

兵卒教科書

全



牛

緒言

今日ノ軍隊教育ノ事物ノ進歩ニ伴フテ愈精微ヲ要スルニ至

レ有限ノ時期ニ於テ無限ノ要求ヲナスハ得テ望ムベカラザルナ

リ故ニ教育者ハ須ク其要否ヲ酌量シ能ク其方法ヲ案シ以テ諸般ノ

要求ヲ飽カシムル爲一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ず遺漏ナカルベシ

然レモ諸般ノ學術ヲシテ短日月ノ間ニ悉ク教授スルハ容易ノ業ニ

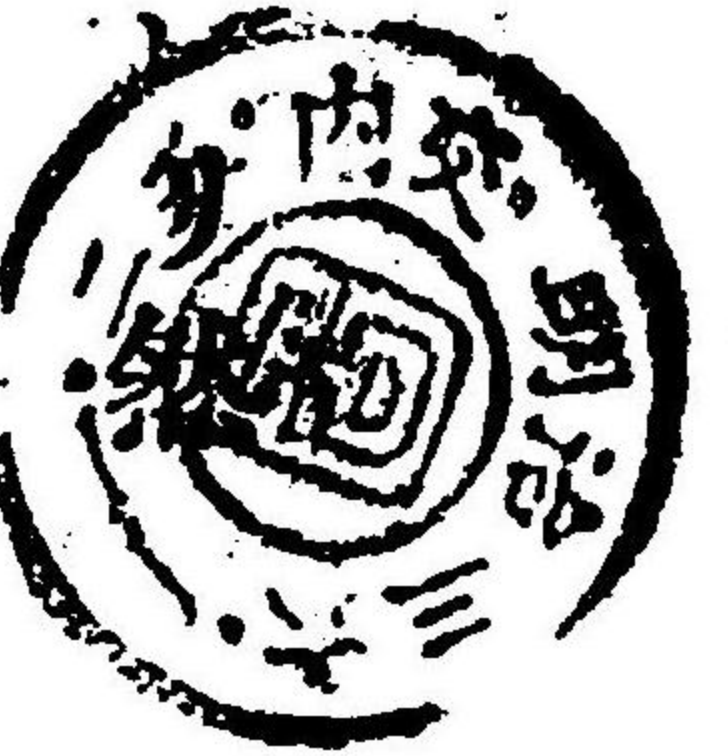
アラズ又被教育者モ悉ク之ヲ服膺シテ受業ノ全部ヲ誤謬ナク實際

ニ施ス是亦難事ト謂フベシ然ラバ兩者ヲシテ互ニ満足ヲ得セシム

ルニハ如何ナル方法ニ依ルカ即チ今日ノ軍隊教育ニ適當ナル書物

ヲ刊行シテ教育者及ビ被教育者ヲ補助スルニアリ本書ハ右ノ目的

ヲ以テ編纂シタルモノニシテ兵卒ノ教育課程ノ概要ヲ列記ス蓋シ



本書ヲ參考シテ實際ニ應用セバ裨補スル處尠少ナラザルベシ

明治三十六年霜月下旬

編者識

兵卒教科書目次

第一篇

勅諭	明治十五年	一
勅諭	明治二十八年	二
職法	附野文	三
軍旗		六
聯隊ノ歴史		七
第一章 編制		八
其一 軍ノ種類、各兵種ノ任務及識別		八
其二 近衛師團ノ編制、常備團隊ノ編制及歩兵聯隊ノ編成		二一
其三 所屬部隊ノ名稱		二三
其四 陸軍武官相當官ノ階級		二三

頁數

其五 上官ノ官姓名

第二章 行狀

其一 服從

其二 尊稱及稱呼

其三 敬禮式

第一 室内ノ敬禮

第二 室外ノ敬禮

其四 上官ニ對スル心得

其五 外出並ニ他隊ノ軍人及人民ニ對スル心得

其六 服裝并服裝ノ注意

正裝、軍裝、略裝、服裝ノ注意

第三章 日常ノ心得

其一 起居ノ定則

二七

三四

三四

三五

三六

三八

三九

四二

四三

四四

四七

四七

其二 衛生上ノ心得

其三 患者ノ心得

其四 酒保ニ關スル心得

第四章 三十年式歩兵銃ノ分解及保存

其一 銃ノ取扱ニ關スル心得

其二 銃ノ各部ノ名稱

其三 分解及結合法

其四 保存

第五章 被服裝具ノ保存

第六章 呼集

其一 非常呼集

其二 火災呼集

其三 不時點呼

四九

五一

五三

五四

五四

五五

五五

五九

六四

六五

六五

六六

六六

其四 臨時ノ呼集

四

六六

第七章 勤務

六七

其一 衛兵一般ノ心得

六七

其二 步哨一般ノ守則

六八

(一) 步哨ノ警戒、(二) 夜間ノ步哨

其三 衛戍勤務ノ斥候巡察

七一

其四 步哨ノ敬禮

七三

其五 風紀衛兵步哨特別ノ守則

七四

其六 使役

七八

第八章 賞罰

七八

其一 褒賞

七八

第一勳章ノ種類、第二射擊徽章、第三褒賞歸休及善行證書附記章

八四

其二 恩給

八四

其三 刑罰

八五

第一懲罰令、第二陸軍刑法

第九章 兵役ノ義務及服役年限

九〇

第十章 休暇

九一

第十一章 射擊ニ關スル心得

九四

其一 射擊一般ノ注意

九四

其二 射擊ノ偏避

九五

第一射手ノ感及、第二天候ノ感及、第三修正

其三 獨立射擊ノ限界

九六

其四 三十年式步兵銃ノ性能

九七

其五 射擊演習ニ關スル心得

九九

第一 教練射擊

九九

(一) 射手ノ等級、(二) 射擊場ノ心得

五

第二 戰闘射撃

第三 證明射撃檢閲射撃及名譽射撃

第二篇

第一章 距離測量

其一 步測法

其二 目測法

其三 音響測量

第二章 地形ノ識別

第三章 方位ノ考察

第四章 徵候

第五章 行軍

其一 行軍ノ種類

其二 行軍ノ心得

其三 行軍警戒勤務

第一前衛、第二側衛、第三後衛、第四斥候甲行軍斥候一般ノ心得
乙敵ニ對スル心得

丙斥候ノ隊形
丁地形ニ關スル心得 第五報告、第六連絡兵、第七傳令使ノ心得

第六章 駐軍

其一 駐軍ノ種別

第一舍營、第二村落露營、第三露營

其二 前哨

第一前哨中隊、第二小哨、第三獨立下士哨、第四前哨ノ步哨

第五前哨ノ斥候甲前哨ノ斥候一般ノ心得
乙前哨ノ斥候敵ニ對スル心得 第六前哨ノ巡察、

第七暗號及記號

其三 外衛兵及風紀衛兵

第七章 戰闘

其一 總說

一〇一

一〇二

一〇三

一〇三

一〇四

一〇五

一〇六

一一〇

一一三

一一四

一一五

一二五

一二八

一三三

一三三

一三七

一五〇

一五〇

一五〇

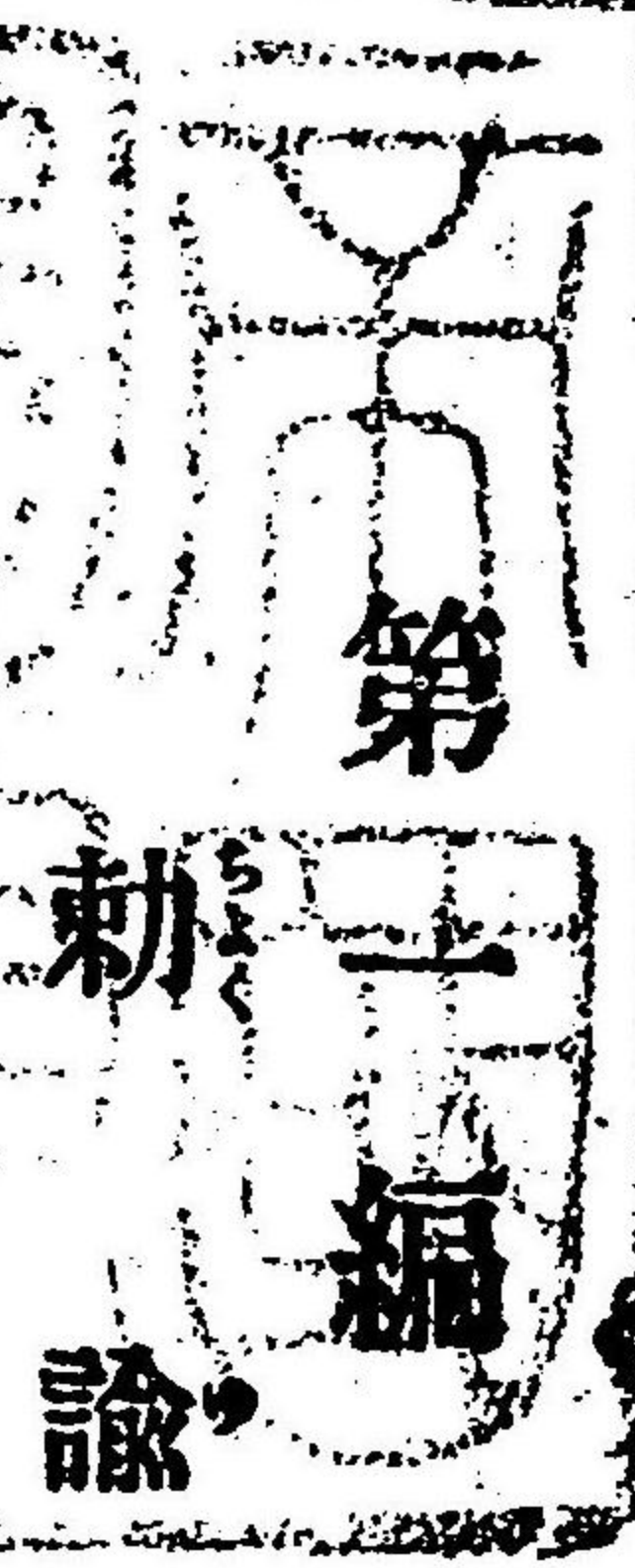
其二	戰鬪間地區地物ノ利用	一五一
其三	戰鬪間兵卒ノ動作	一五四
其四	彈藥補充	一五八
第八章	步兵工作	一五九
其一	器具ノ種類及携帶法	一五九
其二	散兵壕	一六二
其三	前地ノ作業	一六三
其四	障礙物	一六四
其五	束柴及編條	一六六
第九章	河川渡過ノ心得	一六七
第十章	給養并ニ背囊入組品	一六七
第十一章	衛生法	一六九
其一	衛生勤務	一六九

其二	救急法	一七一
第一	創傷、第二止血、第三繃帶包及其使用法、第四急病、第五人工呼吸法	
第十二章	赤十字條約	一八七
第十三章	輸送	一八八
其一	鐵道輸送	一八八
其二	船舶輸送	一八九

兵卒教科書目次終

特15
116

兵卒教科書



我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬ら大
 伴物部の兵どもを率ゐる中國のまつろはぬものどもを平け給ひ高御
 座に即かせられ天下しろし給ひしより二千五百有餘年を経ぬ此
 間世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき古は天皇躬
 ら軍隊を率ひ給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこ
 ともありつれど大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に
 至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を
 建て防人等を設けられしかは兵制は整ひたれども打續ける昇平に

狂^まれて朝廷^{てうてい}の政務^{せいむ}も漸^まく文弱^{ぶんじやく}に流^{なが}れければ兵農^{へいのう}おのづから二に分
 れ古^{いにしへ}の徵兵^{せうへい}はいつこなく壯兵^{そうへい}の姿^{すがた}に變^{かは}り遂^{つい}に武士^{ぶし}となり兵馬^{へいば}の權^{けん}
 は一向^{ひつぱ}に其^{その}武士^{ぶし}ごもの棟梁^{とうりやう}たる者^{もの}に歸^きし世^よの亂^{らん}も共に政治^{せいぢ}の大權^{たいけん}
 も亦^{また}其^{その}手に落^おち凡^{およ}七百年^{しちひゃくねん}の間^ま武家^{ぶけ}の政治^{せいぢ}はなりぬ世^よの樣^{よう}の移^{うつ}
 換^かりて斯^{かく}なれるは人力^{じんりき}もて挽回^{わんくわい}すへきにあらすこはいひなから且^{かつ}
 は我國^{わがくに}體^{たい}に戻^もり且^{かつ}は我^{わが}祖宗^{そそう}の御制^{おんせい}に背^{そむ}き奉^{たてまつ}り淺間^{あさま}しき次第^{しだい}なりき
 降^{くだ}りて弘化^{くわうか}嘉永^{かゑい}の頃^{ころ}より徳川^{とくがわ}の幕府^{まくふ}其^{その}政衰^{まつりおとろ}へ剩^ま外國^{がいこく}の事^{こと}も起^{おこ}
 て其^{その}侮^{あはれ}をも受^うけぬべき勢^{いきま}に迫^おりければ朕^{ちん}が皇祖^{くわうそ}仁孝^{にんかう}天皇^{てんかう}皇考^{くわうかう}孝明^{かうめい}
 天皇^{てんかう}いたく宸襟^{しんきん}を惱^{なや}し給^{たま}ひしこそ忝^{かたじけ}なくも亦^{また}惶^{かしこ}けれ然^{しか}るに朕^{ちん}幼^おな
 くして天津^{あまつひ}日嗣^{ひつぎ}を受^うけし初^{はじめて}征夷^{せいゑい}大將軍^{たいしやうぐん}其^{その}政權^{せいけん}を返^{へんじやう}上^{じやう}し大名^{だいめい}小名^{せうな}其^{その}
 版籍^{はんせき}を奉還^{ほうくわん}し年^{ねん}を経^へすして海内^{かいだい}一統^{いつとう}の世^よとなり古^{いにしへ}の制度^{せいど}に復^たしぬ

是^{こゝに}文武^{ぶんぶ}の忠臣^{ちゆうしん}良弼^{りやうへき}ありて朕^{ちん}を輔翼^{ほよく}せる功績^{こうせき}なり歷世^{れきせい}祖宗^{そそう}の専^{せん}ら蒼^{そう}
 生^{せい}を憐^{あは}れ給^{たま}ひし御遺澤^{ごゐたく}なりこはいへこも併^{しか}我^{わが}臣民^{しんみん}の其^{その}の心^{こゝろ}に順逆^{じゆんぎやく}
 の理^りを辨^わへ大義^{たいぎ}の重^{おも}さを知^しれるか故^{ゆゑ}にこそあれされは此時^{こゝろ}に於^おて
 兵制^{へいせい}を更^{あらた}め我國^{わがくに}の光^{ひかり}を耀^{かがや}かさんと思^{おも}ひ此^{こゝろ}十五年^{じゅうごねん}か程^{ほど}に陸海軍^{りくかいぐん}の制^{せい}
 をは今^{いま}の樣^{よう}に建定^{たてまつ}めぬ夫^{それ}兵馬^{へいば}の大權^{たいけん}は朕^{ちん}が統^すふる所^{ところ}なれば其^{その}司^{つかさど}々^々
 をこそ臣下^{しんか}には任^{まか}すなれ其^{その}大綱^{おほづか}は朕^{ちん}親^{した}之^をを攬^とり肯^{あへ}て臣下^{しんか}に委^{ゆた}ぬへ
 きものにあらず子^こ々^々孫^{そん}々^々に至^{いた}るまで篤^{あつ}く此^{こゝろ}旨^{めい}を傳^{つた}へ天子^{てんし}は文武^{ぶんぶ}の
 大權^{たいけん}を掌^{しやう}握^{あく}するの義^ぎを存^{ぞん}して再^{また}中世^{ちゆうせい}以降^{いこう}の如^{ごと}き失體^{しつたい}なからんこご
 を望^{のぞ}むなり朕^{ちん}は汝^{なんぢ}等^ら軍人^{ぐんじん}の大元帥^{だいげんすい}なるそされは朕^{ちん}は汝^{なんぢ}等を股肱^{ここ}と
 頼^{たの}み汝^{なんぢ}等は朕^{ちん}を頭首^{ちゆうしゆ}と仰^{あや}きてそ其^{その}親^{した}は特^{とく}に深^{ふか}かるへき朕^{ちん}か國家^{こくが}を
 保^ほ護^ごして上天^{じやうてん}の惠^{めぐみ}に應^おず祖宗^{そそう}の恩^{おん}に報^{むか}ひまらす事^{こと}を得^えるも得^えさ

るも汝等軍人か其職を盡すに盡さざるに由るそかし我國の稜威
 振はさるることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其
 榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心
 になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受
 け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍
 人に望むなれば猶訓諭すへき事こそあれいてや之を左に述へむ
 一軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの誰か
 は國に報ゆるの心なかるへき況して軍人たらん者は此心の固か
 らては物の用に立ち得へしとも思はれず軍人にして報國の心堅
 固ならざるは如何程技藝に熟し學術に長するも猶偶人にひこし
 かるへし其隊伍も整ひ節制も正しくとも忠節を存せざる軍隊は

事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑國家を保護し國權を維持す
 るは兵力に在れば兵力の消長は是れ國運の盛衰なることを辨へ
 世論に惑はず政治に拘はらず只々一途に己が本分の忠節を守り
 義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ其操を破り
 て不覺を取り汚名を受くることなかれ
 一軍人は禮儀を正しくすへし凡軍人には上元帥より下一卒に至る
 まて其間に官職の階級ありて統屬するのみならず同列同級とて
 も停年に新舊あれば新任の者は舊任のものに服従すへきものそ
 下級のものは上官の命を承ること實は直ちに朕か命を承る義な
 りと心得よ己か隸屬する所にあらずとも上級の者は勿論停年の
 己より舊きものに對しては總て敬禮を盡すへし又上級の者は下

級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからず公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれども其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はず下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには啻に軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし

一軍人は武勇を尙ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれば我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまじ況して軍人は戰に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよがるへさかさばあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からず血氣にはやり粗暴の振舞なごせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらんものは常

に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己れか武職を盡さんこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尙ふものは常々人に接するには温和を第一とし諸人の愛敬を得んご心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果ては世人も忌嫌ひて豺狼なごの如く思ひなむ心すへきごごにこそ

一軍人は信義を重すへし凡信義を守るごご常の道にあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交はりてあらんごご難かるへし信ごは己か言を踐行ひ義ごは己か分を盡すをいふなりされは信義を盡さんと思は、始より其事のなし得可きか得可からざるかを審に思考すへし臆氣なるごごを假初に諾ひてよしな

き關係を結ひ後に至りて信義を立てんとすれば進退谷まりて身の措所に苦しむことあり悔ゆとも其詮なし始に能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むへからすこと知り其義はごても守るへからすこと悟りなは速に止ることそよけれ古より或は小節の信義を立んとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に蹈迷ひて私情の信義を守りあたら英雄豪傑ごもか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへき

一軍人は質素を旨とすへし凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華美の風を好み遂には貪汚に陥りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はこきせらるゝ迄に至り

ぬへし其身生涯の不幸なりといふも中々愚なり此風一たひ軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誠め置きつれと猶も其の惡習の出でんことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ゆるそかし汝等軍人ゆめ此訓誡を等閑には思ひそ

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫くも忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心は又此五ヶ條の精神なり心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あれは何事も成るものそかし況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の常經な

十
り行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕が訓に遵ひて此道を守り行ひ
國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼生舉りて之を悦ひなん朕一人
の憚のみならんや

明治十五年一月四日

御名 御璽

勅諭

朕が親愛する帝國陸海軍人に告ぐ

朕兵馬の大權を統へ明治十五年陸海軍人の制略立つに於て汝等軍
人の精神五箇條を訓諭し忠節禮儀武勇信義質素貫くに一誠を以て
すへきことを告げたり朕が汝等に訓諭するの殷切なりしもの洵に
汝等を以て朕が股肱と頼めはなり
爾來治平十有餘年客歲清國と釁を開くや汝等は朕が一號令の下に
起て隆暑に耐へ祁寒を冒し内は籌畫警防を努め外は進攻出戦に勞
し陸に海に振古未た有らざるの偉勳を奏し能く交戦の目的を達し
帝國の光榮を四表に發揚せしめたり
朕は帝國陸海軍の進歩茲に至りたるを欣ひ汝等か深く五箇條を服

膺して敢て失墜せず命を重し生を輕し以て能く朕が股肱たるの職を盡したるを嘉す獨り鋒鏑に斃れ疾病に死し然らざるも病癘となりたるものに至ては朕深く其事を烈とし其人を悲まざるを得ず朕今清國と和を講し汝等と俱に治平の慶に頼らんこそ願ふに軍隊の名譽は帝國の光榮と共に汝等の責務を重からしむ朕は我武維れ揚りて汝等と其譽を偕にするを樂むと雖邦家の前程は尙遼遠なり汝等其れ能く朕の訓諭を遵奉し留りて隊伍に在るものと散して郷關に歸るものごに論なく五事を服膺して軍人の本分を恪守し一誠以て他日の報効を期せよ

明治二十八年五月十三日

御名 御璽

讀法附誓文

兵隊は 皇威を發揚し國家を保護する爲めに設け置かるゝものなれば此兵員に加る者は堅く左の條件を守り違背すへからす

第一條 誠心を本とし忠節を盡し不信不忠の所爲あるへからさる事

第二條 長上に敬禮を盡し等輩に信義を致し粗暴倨傲の所爲あるへからさる事

第三條 長上の命令は其の事の如何を問はず直ちに之に服従し抗抵干犯の所置あるへからさる事

第四條 膽勇を尙とひ軍務に勉勵し恐怯柔懦の所爲あるへからさる事

第五條 血氣の小勇に誇り争鬪を好み他人を侮慢し世人の厭忌を來す等の所爲あるへからざる事

第六條 道徳を修め質素を主とし浮華文弱等に流るゝの所爲あるへからざる事

第七條 名譽を尙こひ廉耻を重んじ賤劣貪汚の所爲あるへからざる事

以上掲る所の外法律規則に違背し罪を國家に得るに至ては父祖を辱しめ家聲を汚し醜を後世に遺す獨り其身現在の耻辱のみならずるなり況んや重罪の如きは各人天賦の公權をも剝奪せられ世に立ち人に接るも總て對等の權利を得ざるに至るに於ておや名譽を尙ひ廉耻を重んずるの軍人に在ては殊に戒愼を加へざるへからず

就中陸軍刑法は軍隊の害を爲す者を懲すために特に設けらるゝものたるを以て其刑亦た頗る嚴なり軍人にして之を犯せば啻に本分を誤り軍隊の安寧を害するのみならず遂には世人の信用を損じ陸軍の榮譽を汚す等其責更に重し平素自ら戒飾し決して違背すべからざるものなり

誓文

今般御讀聞相成候讀法之條々堅く相守り誓て違背仕間敷候事
右宣誓如件

明治 年 月 日

軍旗

一軍旗ハ忝クモ 天皇陛下ノ御手ツカラ聯隊ニ授ケ賜ヒタルモノナルカ故ニ我國最モ
 貴重ノ旗章ニシテ名譽ノ表章聯隊ノ神靈ナリ故ニ吾々軍人ハ厚ク之ヲ尊崇シ軍旗ノ
 タメニハ身命ヲ抛テ之ヲ護リ又其名譽ヲ得ンコトヲ努メサル可ラス軍旗ノ名譽ハ聯
 隊ノ名譽ニシテ聯隊ノ名譽ハ即チ兵卒ノ名譽ナリ萬一之ヲ敵手ニ委スルガ如キコト
 アラバ聯隊ハ勿論國家無上ノ耻辱ニシテ其汚名ハ千載ヲ經ルモ消滅スルコトナシ

二軍旗御親授ノ際賜ハリタル勅語

步兵第 聯隊編成ナルヲ告ク依テ今其軍旗一旗ヲ授ク汝軍人等協力同心シテ益威武
 ヲ宣揚シ我帝國ヲ保護セヨ

步兵第二十五聯隊ヨリ第四十八聯隊マテ左ノ勅語ヲ賜ハリタリ

步兵第 聯隊ノ爲ニ軍旗一旗ヲ授ク汝軍人等協力同心シテ益威武ヲ發揚シ以テ我
 帝國ヲ保護セヨ

三此勅語ニ對シ奉リテ聯隊長ハ左ノ奉答ヲナセリ

臣等謹テ

明勅ヲ奉シ死力ヲ竭シ誓テ國家ヲ保護セン

右ノ勅語及奉答ハ深く心肝ニ銘シ片時モ忘ル可ラサルモノトス

聯隊ノ歴史

一明治 年 月 日我 步兵第 聯隊ノ編組初メテ成ル

二年 月 日軍旗ヲ授與セラレ

第一章 編制

其一 軍ノ種類、各兵種ノ任務及識別

一軍ヲ分テ陸軍海軍ノ二種トス陸軍ハ陸ニ在テ戦争ヲナシ海軍ハ戦艦ニ乗シ海上又ハ河上時トシテハ上陸シテ戦争ヲナスモノナリ

二陸軍ヲ左ノ六科及五部ニ分ツ

陸軍 憲兵、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵
經理部、衛生部、獸醫部、軍樂部

三步兵ハ小銃ヲ使用シ徒歩ニテ戦闘ス

四騎兵ハ馬ニ乘リ刀ヲ使用シ若クハ下馬シテ騎銃ヲ使用シ専ラ搜索警戒ノ諸勤務ニ服シ又敵ヲ襲撃衝突ス

五砲兵ハ砲類ヲ使用シ砲戰ニ任ス之ヲ野戰砲兵及要塞砲兵ノ二種ニ又野戰砲兵ヲ野砲

兵山砲兵ニ分ツ

六工兵ハ堡壘ヲ築キ軍橋ヲ架シ道路ヲ開キ又ハ修繕ヲナシ電信ヲ架設スル等ノ諸工事

ヲナシ又歩兵ノ如ク小銃ヲ使用シ戦闘スルヲ得

七輜重兵ハ軍需ノ彈藥、糧食其他軍用物品ヲ駄馬或ハ車輛ヲ以テ運搬スルモノナリ

八憲兵ハ平戰兩時ニ在テ軍隊ノ軍紀風紀ヲ維持スルニ任ズ

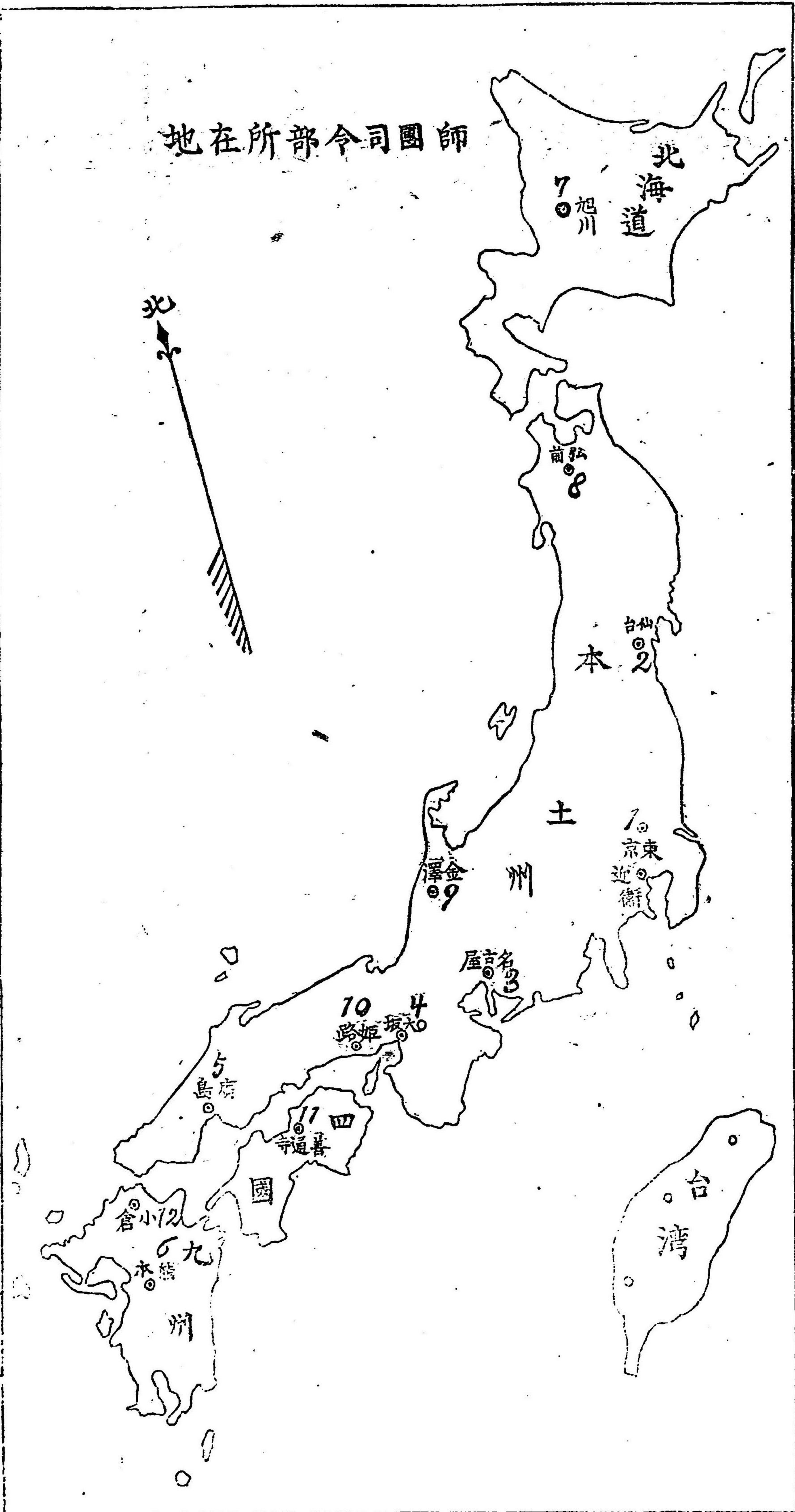
九戦闘ニ際シテハ各兵種互ニ協力シテ戰フモノトス故ニ平時ヨリ互ニ親睦ナルヲ要ス

十諸兵種及各部ノ定色(被服ノ襟肩)左ノ如シ

兵種	步兵	騎兵	砲兵	工兵	輜重兵	憲兵	經理部	衛生部	軍樂部
定色	緋	萌黃	黃	鳶	藍	黒	銀 軍茶 花藍	深綠	紺青
袴地	紺	茜	紺	紺	紺	茜	紺	紺	茜
備考	近衛師團ニ在テハ諸兵種ノ帽及袖章ヲ緋其他ノ師團ニ在テハ黄色トス各部及憲兵ノ帽ノ周圍ハ定色ト同シ(軍樂部ヲ除ク)								

十一陸軍ヲ近衛師團及十二師團(線列)ニ分ツ其司令部ノ位置左ノ如シ

師團司令部所在地



近衛及第一師團	東京	第二師團	仙臺
第三師團	名古屋	第四師團	大阪
第五師團	廣島	第六師團	熊本
第七師團	旭川	第八師團	弘前
第九師團	金澤	第十師團	姫路
第十一師團	善通寺	第十二師團	小倉

十二右諸師團ノ外左ノ各隊アリ
 屯田兵、警備隊、鐵道隊アリ
 十三屯田兵ハ北海道ニアリテ平時ハ農業ニ従事シ戰時ハ隊伍ヲ編成シ戰鬪ヲナスモノナリ
 十四警備隊ハ島嶼ヲ警備保護スル爲メニ設ケラレタルモノナリ(對島ニ在リ)
 十五鐵道隊ハ軍用鐵道及軍用電信ノコトヲ擔任ス
 十六凡ソ軍隊ノ屯在スル土地ヲ衛戍地ト云フ之ヲ稱スルニハ其地名ヲ冠ス設令ハ東京

衛戍地高崎衛戍地ト稱スルカ如シ

其二 近衛師團ノ編制常備團隊ノ編制及步兵聯隊ノ編成

近衛歩兵第一旅團

近衛歩兵第一聯隊

近衛歩兵第二旅團

近衛歩兵第二聯隊

近衛歩兵第三旅團

近衛歩兵第三聯隊

近衛歩兵第四旅團

近衛歩兵第四聯隊

騎兵第一旅團

三個聯隊(聯隊ハ三或ハ五)但シ近衛騎兵聯隊ハ此旅團ニ屬ス

野戰砲兵第一旅團

四個聯隊(聯隊ハ二大隊ヨリ成ル)但シ近衛野戰砲兵聯隊ハ

近衛工兵大隊

(三中隊)

近衛輜重兵大隊

(二中隊)

近衛軍樂隊

(一隊)

常備團隊ノ編制

步兵二旅團(一旅團ハ步兵二個聯隊ヨリ成ル)

騎兵一聯隊(第一師團ハ騎兵一旅團(三個聯隊)トス)

野戰砲兵聯隊(第一師團ハ野戰砲兵一旅團(四個聯隊)トス)

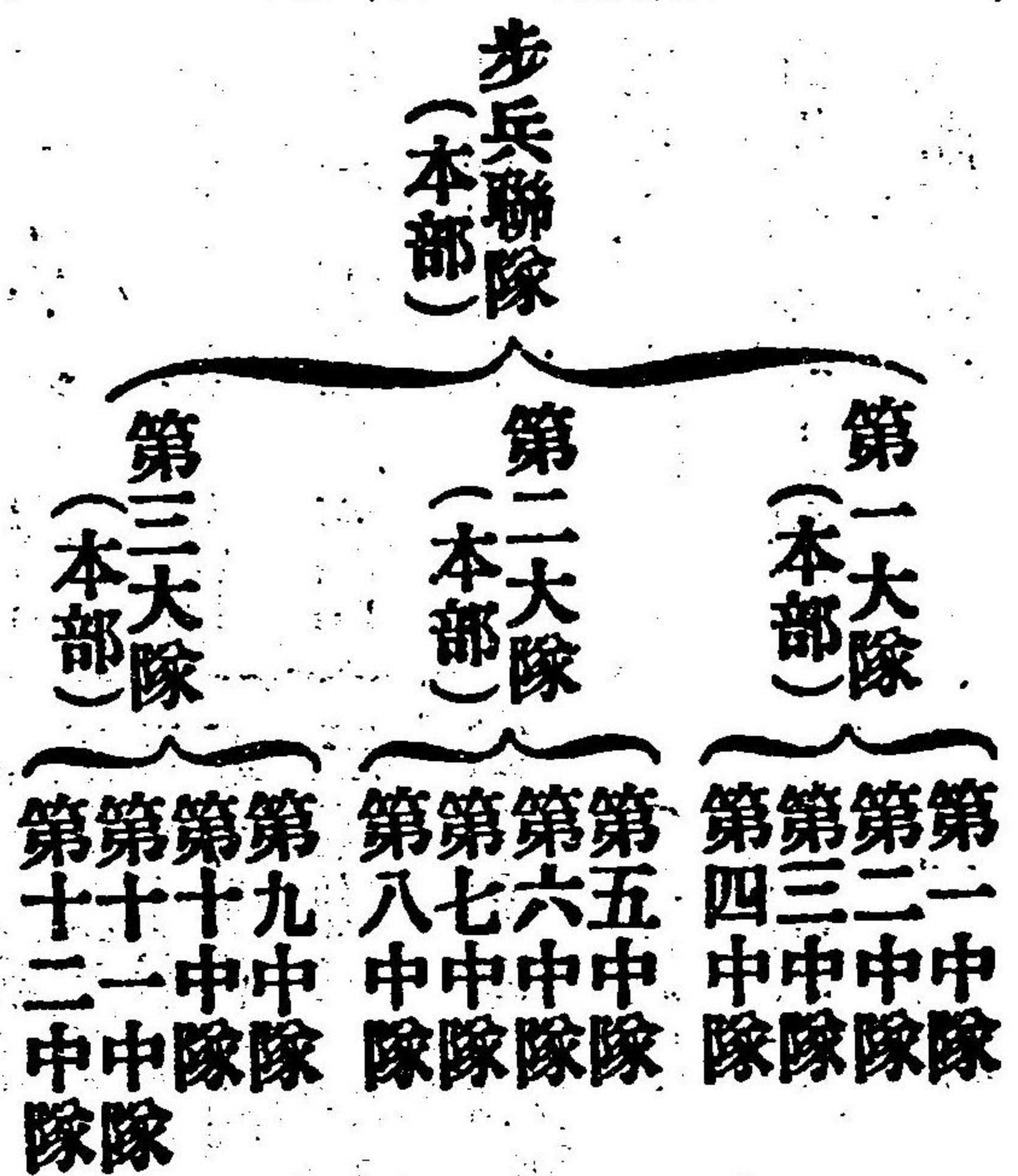
師團司

部 令 工兵一大隊

輜重兵一大隊

第四師團ニハ右ノ外軍樂隊一隊アリ

步兵聯隊ノ編成



一 戰時編制ニアリテハ中隊ヲ三ヶ小隊ニ分チ中少尉ヲ以テ其長トシ小隊ヲ若干ノ分隊ニ分チ軍曹伍長ヲ以テ其長トス

其二 所屬部隊ノ名稱

一 兵卒ハ所屬ノ師、旅、團、聯隊、中隊ノ名稱ヲ知ルヲ要ス例令ハ近衛師團第二旅團

近衛歩兵第三聯隊第一中隊ト云フカ如シ

其四 陸軍武官相當官ノ階級

一 陸軍武官ヲ大別シテ五トス

一 將官並ニ同相當官

二 上長官並ニ同相當官

三 士官並ニ同相當官

四 准士官並ニ同相當官

五 下士並ニ同相當官

ニ以上ヲ細別スレハ左表ノ如シ

第一表 陸軍武官官等表 (其一)

大將						勳任官	高
中將							
少將							
將官	各兵科佐官 (上長官)					三等	任官
	憲兵大佐	步兵大佐	騎兵大佐	砲兵大佐	工兵大佐	四等	
	憲兵中佐	步兵中佐	騎兵中佐	砲兵中佐	工兵中佐	五等	
	憲兵少佐	步兵少佐	騎兵少佐	砲兵少佐	工兵少佐	六等	
	憲兵大尉	步兵大尉	騎兵大尉	砲兵大尉	工兵大尉	七等	
	憲兵中尉	步兵中尉	騎兵中尉	砲兵中尉	工兵中尉	八等	
	憲兵少尉	步兵少尉	騎兵少尉	砲兵少尉	工兵少尉		
	輜重兵大尉	輜重兵中尉	輜重兵少尉				
各兵科尉官 (士官)					六等	任官	
憲兵大尉	步兵大尉	騎兵大尉	砲兵大尉	工兵大尉	七等		
憲兵中尉	步兵中尉	騎兵中尉	砲兵中尉	工兵中尉	八等		
憲兵少尉	步兵少尉	騎兵少尉	砲兵少尉	工兵少尉			
輜重兵大尉	輜重兵中尉	輜重兵少尉					
輜重兵中尉	輜重兵少尉						
輜重兵少尉							
輜重兵少尉							

總監督		軍醫		總監督		軍醫	
監督部上長官		衛生部上長官		監督部上長官		衛生部上長官	
一等監督	二等監督	三等監督	一等軍醫正	二等軍醫正	三等軍醫正	一等獸醫正	二等獸醫正
二等監督	三等監督	一等軍醫正	二等軍醫正	三等軍醫正	一等獸醫正	二等獸醫正	三等獸醫正
三等監督	一等軍醫正	二等軍醫正	三等軍醫正	一等獸醫正	二等獸醫正	三等獸醫正	藥劑監
一等副監督	二等副監督	三等副監督	一等軍醫	二等軍醫	三等軍醫	一等獸醫	二等獸醫
二等副監督	三等副監督	一等軍醫	二等軍醫	三等軍醫	一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫
三等副監督	一等軍醫	二等軍醫	三等軍醫	一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫	藥劑官
一等軍吏	二等軍吏	三等軍吏	一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官
二等軍吏	三等軍吏	一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官
三等軍吏	一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
一等獸醫	二等獸醫	三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
二等獸醫	三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
三等獸醫	藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
藥劑官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官
獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官	獸醫部士官

第二表 陸軍武官等表 (其二)

列任官	各兵科				
	一等	二等	三等	四等	准士官
憲兵特務曹長	憲兵曹長	憲兵軍曹	憲兵曹	憲兵伍長	憲兵特務曹長
步兵特務曹長	步兵曹長	步兵軍曹	步兵曹	步兵伍長	步兵特務曹長
騎兵特務曹長	騎兵曹長	騎兵軍曹	騎兵曹	騎兵伍長	騎兵特務曹長
砲兵特務曹長	砲兵曹長	砲兵軍曹	砲兵曹	砲兵伍長	砲兵特務曹長
砲兵上等工長	砲兵上等工長	砲兵上等工長	砲兵上等工長	砲兵上等工長	砲兵特務曹長
工兵特務曹長	工兵曹長	工兵軍曹	工兵曹	工兵伍長	工兵特務曹長
工兵上等工長	工兵上等工長	工兵上等工長	工兵上等工長	工兵上等工長	工兵特務曹長
輜重兵特務曹長	輜重兵曹長	輜重兵軍曹	輜重兵曹	輜重兵伍長	輜重兵特務曹長

列任官	衛生部		經理部		軍樂部	
	一等	二等	一等	二等	一等	二等
衛生部 下士	衛生部 下士	衛生部 下士	經理部 下士	經理部 下士	軍樂部 下士	軍樂部 下士
衛生部 看護長	衛生部 看護長	衛生部 看護長	經理部 看護長	經理部 看護長	軍樂部 看護長	軍樂部 看護長
上等計手	上等計手	上等計手	上等計手	上等計手	上等計手	上等計手
軍樂部准士官	軍樂部准士官	軍樂部准士官	軍樂部准士官	軍樂部准士官	軍樂部准士官	軍樂部准士官
樂長	樂長	樂長	樂長	樂長	樂長	樂長
樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手
樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手
樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手	樂手

三士官以上ノ諸官ヲ總稱シテ將校ト云フ

其五 上官ノ官姓名 (各自記入ス可シ)

師團長

旅團長

聯隊長

大隊長

中隊長

中隊附士官

特務曹長

曹長

給養班長

一次ニ記憶スルヲ可トスルモノ概テ左ノ如シ
元帥

陸軍大臣

參謀總長

教育總監

師團參謀長

聯隊副官

聯隊旗手

大隊副官

大隊附軍醫

中隊内他ノ給養班長及其他ノ下士

戦友

一其他皇族ノ御名稱及尊顔ヲ拜識スルヲ勉ム可シ

第二章 行狀

其一 服從

- 一兵卒ハ上官ノ命令及ヒ告諭ハ誠意之ヲ服行シ決シテ不服ノ色ヲモ顯ハス事ナク温和ニシテ恭敬遵奉スル之ヲ服從ト云フ
- 二假令同級者ト雖モ故參ノモノ及上級ノ代理者ニハ必ス服從ス可シ
- 三所屬部隊ノ上官ノミナラス我陸海軍人ハ勿論同盟國ノ軍隊ト連合スル時ハ其ノ上官ニ對シテモ服從セサル可ラス
- 四總テ命令ハ謹テ之ヲ守リ決シテ其當不當ヲ論シ理不理ヲ議スルヲ勿レ
- 五兵卒ハ命令ノ原因主旨ヲ詰問スルヲ許サス然レモ其命令ヲ了解セサルハ慎ンテ之ヲ問フハ妨ケナシ
- 六新ニ受クル命令ト前ニ受ケタル命令ト齟齬スルハ其趣ヲ申述ヘ然ル後之ヲ行フ可シ

七兵卒自己ノ直屬上官ニアラサル他ノ高級上官ヨリ命令ヲ受ケ又ハ叱責等ヲ蒙リ

タルハ其旨ヲ自己ノ屬スル直屬上官ニ申告ス可シ

八兵卒衛兵又ハ巡察等ノ職務ニ從事スル時ハ上官ニ對シテモ憚ルヲナク自己ノ職權等

ヲ實行ス可シ

其二 尊稱(下タルモノ上タル人ニ)及稱呼

一兵卒ハ上タル人ニ對シテ稱呼スルハ直ニ其人ニ對シテ言フト否トヲ論セス必ス左

ノ尊稱ヲ用ユルモノトス

(一)天皇 皇后 ニ對シ奉リテハ 陛下

(二)皇太子及皇族ニ對シ奉リテハ 殿下

(三)將官ニハ 閣下

(四)上長官已下ニハ 殿下

二直チニ其人ニ對シテ呼フハ皇族ニハ單ニ殿下ト云ヒ將官ニハ何官閣下上長官以

下ニハ何官殿ト云フ可シ

三目前ニアラサル他ノ上官ノ事ヲ談スル時或ハ數人ノ上官一所ニアルモ其上官ニ用
談アリテ最初之ヲ呼フモ如キハ官名ノ上ニ姓ヲ附スヘシ例之ハ「某中將閣下」「某
少佐殿」「某軍曹殿」ト云フカ如シ

四場合ニヨリ職名ヲ呼フモ妨ケナシ例之ハ「師團長閣下」「中隊長殿」ト云フカ如シ

五兵卒職務上ニテ命令ヲ他人ニ傳フルモ其大佐殿命令ト云スシテ聯隊長ノ命令ト云
フ

其二 敬禮式

一兵卒ハ何レノ時何レノ場合ヲ論セズ上官、軍旗軍隊ニ對シテ必ス敬禮スヘシ其敬禮
タルヤ外容ノ正シキヲ要スルノミナラス眞實恭敬ノ意ヲ以テ敬禮シ輕卒ノ風アルハ
カラス

二敬禮ハ例令遠隔シアルモ上官ヲ識別スレハ之ヲ行フ可シ

三同級者ハ互ニ相競フテ敬禮ヲナシ人ニ後ル、ヲ以テ耻辱トスヘシ

四單獨ノ敬禮ハ定制ノ服装ヲナシタル人ノミナラス面識ノ上官ニ對シテ着服ノ如何ヲ

問ハス必ス之ヲ行フヘシ

五「君カ代」ノ奏樂ヲ聞クトキハ直ニ姿勢ヲ正スヘシ

六所屬團隊長自己ノ屬スル師團長、旅團長、聯隊長、大隊長中隊長及中隊附士官ニハ
停止敬禮ヲ行フヘシ

七我陸海軍人軍隊ノミナラス和親諸國ノ陸海軍人軍隊ニモ敬禮ヲ行フモノトス

八敬禮ハ上官ノ答禮ヲ終ラサルニ其禮式ヲ止ムヘカラス但シ敬禮ヲ行フモ上官之ヲ知
ラサルモ此ノ限ニアラス又タ上官ハ單ニ目視ヲ以テ答禮スルコトアリ

九上等兵ニハ下士ニ對スルト同シ敬禮ヲ行フモノトス

第一 室内ノ敬禮(室内トハ居室事務 室應接所等ナリ)

一室内ニ入ルモ 戶外ニ於テ先ツ帽ヲ脱シ又外套ヲ着シ居ル時ハ之ヲ脱スヘシ但
シ銃ヲ携フル時ハ此限リニアラス

二室内ノ敬禮 ハ受禮者ニ正面シ姿勢ヲ正シ其人ノ眼ニ注目シテ體ノ上部ヲ少シク
前ニ傾ケ帽ヲ右手ニテ前庇ヲ摘ミ垂直ニ下ケ其内部ヲ右股ニ向ハシム但シ執銃シテ

ルルハ立統シテ姿勢ヲ正スヘシ

三上官之居室ニ入ルルハ其席ヲ距ル一五六歩ノ所ニ於テ敬禮ヲ行フ可シ若シ上官
數名アルルハ先ツ最高級ノ人ニ敬禮シ次ニ一同ニ敬禮ス可シ去ル時モ亦タ同シ

四上官ヨリ賞狀其他物品等ヲ受クルルハ五六歩前ニ於テ敬禮ヲナシ適宜ニ前進シ
帽ヲ左脇ニ挟ミ右手ヲ以テ拜受シ左手ヲ副テ披見シ後チ左手ニ移シ右手ニ帽ヲ採リ
舊位ニ復シテ敬禮ヲ行ヒ右轉回ヲナシテ退ク可シ上官ニ物品ヲ呈スル時モ亦之ニ同
シ

五前項ノ場合ニ於テ執統シアルルハ敬禮ノ後左手ヲ以テ之ヲ受ク若シ受タル所ノ
モノ其場ニ於テ披見ヲ要スレハ右臂ヲ以テ統ヲ支ヘ右手ヲ副ヘテ披見ス可シ返簡若
クハ領證ヲ受クヘキ時ハ舊位ニ復シテ待ツモノトス

六上官ヨリ命令諭告ヲ承リ或ハ上官ニ陳述ヲナスルモ前二項ニ同シ但シ陳述ヲナスニ
ハ單簡明亮ニシテ音聲ノ活潑ナルヲ要ス

七上官居室ニ來ル時 准士官以上兵卒ノ室内ニ來ルルハ最初之ヲ認メタルモノ「直

レ」ト呼ヒ現在スルモノ悉ク其場ニ立チテ姿勢ヲ正スヘシ

八下士上等兵ニハ唯其場ニ立チテ姿勢ヲ正スヘシ

第二 室外ノ敬禮(廊下及庖厨等)

一室外ノ敬禮 一 舉手注目トス其法姿勢ヲ正シ右手ヲ舉ケ指ヲ接シテ伸シ食指ト中
指トノ間ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍外面ニ向ケ肘ヲ肩ノ高ニシ受禮者ノ眼ニ

注目ス

二途中ニ於テ行幸行啓ニ遇フルハ前驅ノ稍前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面シ(乗車
シアルルハ下車スベシ)車駕六歩前ニ近ク片敬禮ヲ行ヒ六歩過キ去ル迄此姿勢ヲ保
ツ可シ

執統シアル場合ニハ兩陸下ニ對シ奉リテハ前驅ノ稍前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面
シ(乗車ハ下車)車駕六歩前ニ近ヅキタルトキ捧統シ六歩過キ去ルマテ此姿勢ヲ保
ヘシ

三皇族以上ノ人並ニ外國ノ皇帝皇后陛下皇族ニ對シテハ總テ

天皇 皇后兩陛下ニ準シ敬禮ヲ行フ可シ但シ皇族武官ノ職ヲ奉シ其職務執行ノ場合ニ在テハ總テ其官職相當ノ敬禮ヲ行フ可シ

四軍旗及所屬團隊長ニ行キ遇ヒ若クハ其傍ヲ過クルルハ凡ソ六步前ヨリ姿勢ヲ正シ凡ソ三步ノ所ニ停止シ之ニ面シテ敬禮ヲ行フ可シ但シ軍旗ニ上覆ヲナシアルハ敬禮ヲ行フニ及ハス

執銃シアル場合 軍旗、軍隊及凡テノ上官ニ對シテハ、凡ソ六步前ヨリ姿勢ヲ正シ歩調ヲ取リ凡ソ三步ノ所ニ頭ヲ軍旗又ハ敬禮ヲ受クル人ノ方ニ向ケ之ニ注目シツ、行進スヘシ

所屬團隊長以外ノ上官ニ對シテハ停止スルヲナク頭ヲ上官ノ方ニ向ケ敬禮ヲ行フヘシ

五上官ノ引卒スル軍隊ニ行キ遇ヒ又ハ其傍ヲ通過スルルハ其隊長ニ敬禮シ且ツ其

隊ニ注目ス可シ但シ儀仗隊ノ現ニ服務中ノモノニ對シテハ敬禮ヲ行ハス
六途中ニ儀仗隊ヲ附シタル軍人ノ葬儀ニ遇ヒ又タハ其傍ヲ通過スルルハ其ノ柩

ニ對シ死者ノ等級ニ相當スル敬禮ヲ行フモノトス

七乗車ニテ上官ニ遇フルハ其儘姿勢ヲ正シ敬禮ヲ行フヘシ而レモ後方ヨリ來リテ先ニ行カントスルルハ其乗車スルト否トヲ問ハス許可ヲ乞ヒ通過ス可シ自轉車ニ乘

リタル時ハ舉手注目ヲ單ニ注目ニ換ル事ヲ得
八停止シアル場合上官其傍ヲ通過スル時 上官ノ方ニ向キ敬禮ヲ行フヘシ執銃シアル時ハ立銃ヲナスヘシ

九停止シアル上官ノ許ニ至ル時 ハ上官ヲ距ル事五六步ノ所ニ停止シ上官ニ面シテ敬禮ヲ行フヘシ、執銃シアル時ハ立銃ヲナスヘシ

十隊伍ニ列スルルハ何人ニ對スルモ單獨ノ敬禮ヲ行ハス但シ隊伍ヲ解キ休憩シア

ルル或ハ一時隊列ヲ離レタルルハ單獨ノ敬禮ヲ行フ可シ
十一物品ヲ携ヘ右手ヲ舉グル能ハサル時 ハ頭ヲ受禮者ニ向ケ之ニ注目シテ敬禮ス

ヘシ但シ行進中ナル時ハ軍旗及所屬團隊長ニ限り停止シ之ニ面シテ敬禮ヲ行フヘシ
十二上官窓ヨリ外望シアル前ヲ過クルルハ 又ハ己レ窓ヨリ外望シアルル上官其ノ前

ヲ遇レハ自分ノ居ル場所ニ從テ室内又ハ室外ノ敬禮ヲ行フヘシ
十三上官ト同行スルハ其左側或ハ其後方又ハ兩側ヲ行進ス但誘導者ハ此限ニ非ス

其四 上官ニ對スル心得

- 一上官ヲ尊敬スルハ管ニ外形ニ表ハスノミナラス眞ニ心ノ底ヨリ尊敬ノ意ヲ表ス可キモノトス
- 二直接ニ上官ニ接スル時ニ非ラサルモ表裏ナク尊敬ノ意ヲ以テ遇シ上官ノ言動ニ對シ云々スヘカラス
- 三上官ノ取扱不當ト思フモ直チニ論辯シ又ハ不服ノ色ヲ現ハス事ナク從順ニ服従スヘシ
- 四上官ニ對スル言語ハ不敬ニナラサル様注意シ又巧言ヲ以テ信用セラレン事ヲ望ムヘカラス
- 五狹キ路ニ於テ上官ニ遭遇セシ時ハ己レ先ツ一側ニ避ケ途ヲ讓ルヘシ
- 六混雜スル場所ニ於テ上官又ハ古參者ト同時ニ乗車スルカ又ハ物品ヲ購ハントスル時

ハ己ヲ後ニスルハ禮儀ナリ

- 七上官ニ對スルハ父兄ニ對スルト同様細心注意シ上官ノ便宜ヲ計ルハ美德ナリ
- 八上官ノ危難ヲ目撃セハ危險ヲ冒シテ迄モ救助スル事ニ勉ムヘシ
- 九尉ハ其罪ニ對スル報酬ナリ故ニ上官ヨリ叱責セラレ又ハ處罰セラル、モ改心シテ再ヒ冒サルニ勉ムレハ上官ハ寛恕スルモノト知ルヘシ
- 十上官ノ言ニシテ無理ト思フモ直チニ訴フルカ如キハ誤ナリ沈思熟考シテ尙思ヒ當ラサル時ハ順序ヲ經テ所屬上官又ハ他ノ同僚上官ニ靜ニ申出ヘシ

其五 外出並ニ他隊ノ軍人及人民ニ對スル心得

- 一日曜日其他休暇日ハ勤務ニ當ラサル兵卒ハ朝食後ヨリ夕食前迄外出ヲ許可セラル、モノトス又慰勞休暇或ハ代日休暇ニテ日夕點呼迄外出ヲ許サル、出入
- 二兵卒ハ己ムヲ得サル事情アルハ中隊長ノ許可ヲ得テ二十四時間以内外出ヲ許サル、
- 三外出スルハ外出ノ服裝ヲナシ必ス軍隊手帳ヲ携ス可シ

四 公用ノ爲メ外出スル片ハ公用證札又臨時外出ヲ許サル、片ハ外出免許證札ヲ携フ可シ

五 外出スル片ハ特ニ服裝法ニ注意シ品行ヲ慎ミ容儀ヲ嚴正ニシテ軍人タルノ品位ヲ重シシ名譽ヲ表示シ決シテ醜狀虚言ヲナシ或ハ不正ノ家屋ニ立寄リ各自ノ禍害ヲ來タシ聯隊ノ名譽ヲ損スルコトアル可ラス

六 他隊ノ軍人ニ對シテハ常ニ禮儀ト親愛トヲ以テ交リ慢リニ自己ノ兵種及部隊ヲ誇稱シ他ヲ輕侮スル等ノ所爲アル可ラス

七 人民ニ接スルニハ温良恭敬ヲ旨トシ懇切丁寧ニ取扱ヒ傲慢粗暴ヲ謹ミ又夕獮屍ヲ天軍人ノ威嚴ヲ損スルコト勿レ

其六 服裝並ニ被服ノ注意

一 服裝ハ軍人ノ容儀ニ關スルモノナルカ故ニ清潔ニシテ端正ナル可シ其不潔不正ナルハ軍人ノ威嚴ヲ失ヒ他人ノ侮ヲ受クルモノナリ
二 服裝ニ三種アリ正裝、軍裝、略裝是レナリ

正裝

一 正裝トハ第一種帽ニ前立ヲ附シ絨衣袴ヲ着シ脚絆ヲ袴下ニ穿テ背囊(外套及携帶器具ヲ附ス)ヲ負ヒ帶革ヲ附ケ銃ヲ携フ但シ自家ノ賀儀葬祭等ニアリテハ背囊ヲ脱シ銃ヲ除ク

軍裝

一 軍裝ハ第二種帽ヲ冠リ絨衣袴ヲ着シ水筒雜囊ヲ携ヘ脚絆ヲ袴上ニ着シ背囊ニ入組品ヲ容レ飯盒替靴器具(時宜ニ依リ毛布)ヲ附ス若シ第一種帽ヲ用ユル片ハ前立ヲ脱ス

略裝

一 略裝トハ第二種帽ヲ冠シ絨衣袴又ハ夏服ヲ着ケ脚絆ヲ袴上ニ穿テ背囊ヲ負フ
二 演習ノ服裝ハ軍裝或ハ略裝ヲ用ユ(通常略衣袴夏衣袴又ハ演習服ヲ用ユ)
三 外出ノ服裝ハ第二種帽ニ絨衣袴ヲ着シ(夏季ニアリテハ夏衣袴又ハ絨衣夏袴)帶劍ス兩雪天ノ時ハ外套ヲ着シ脚絆ヲ袴上ニ附スル等ハ其時ノ命令ニ從フ可シ但シ新年宴會、紀元節、天長節、陸軍始、靖國神社大祭ニハ第一種帽ヲ用キ(前立ヲ脱ス)脚絆

ヲ袴下ニ穿ツ

四公用私用ニ論ナク外出スル時ハ必ス帶劍スルモノトス但シ帶劍ヲ禁テラレシキハ
帶革ノ

服裝ノ注意

一帽ハ第一種第二種ヲ問ハス左右前後ニ傾カサル如ク正シク冠ヲ隊伍ニ列スル片ハ必
ス紐ヲ願ニ掛ク可シ

二上衣及袴ハ正シク釦或ハ「ホック」ヲ掛ケ釦ヲ生セサル如クシ殊ニ袴ハ緊着シ弛ミ下
ラサル様注意ス可シ

三絨袴ヲ着スルトキハ必ス襟布ヲ用ユ可シ而シテ其上線ハ上衣ノ襟ヨリ僅ニ出ツル如
ク着スルヲ法トス

四脚絆ハ各自其足ニ合セテ釦ヲ着ケ替ヘテ其弛ミ下ラサル如クス可シ而シテ縮革ノ垂
下セサルヲ要ス

五舎外ニ於テ袴ノ裾ヲ折り又ハ靴足袋ヲ袴上ニ出スヲ禁ス

六外套ヲ携フルトキハ巻テ左肩ヨリ右脇ニ掛ク可シ

七背囊ニハ其服裝ノ種類ニ依テ正シク装着シ背囊ノ上端ハ肩ト齊フシ縮革等ノ剩餘及
上部ノ懸ケ革ノ外方ニ現ハレサル様注意ス可シ

八帶革ハ之ヲ堅ク締メ傾カサル如クシ上衣又ハ外套ニ釦ヲ生スルトキハ兩脇ニ送り前
後ニ置ク可ラス

第三章 日常ノ心得

其一 起居ノ定則

一軍隊ニ起居ノ定則アルハ恰モ一家ニ家法家風アルカ如シ若シ家族ニシテ家法家風ヲ
踐躡スル時ハ一家亂レ他人ノ侮蔑ヲ受クルニ至ルト同シク兵卒カ起居ノ定則ヲ守ラ

サル時ハ紀律立タス軍紀亂レ全ク烏合ノ衆ニ等シキニ至ルヘシ故ニ細心注意シテ定
則ヲ嚴重ニ行フヘシ

二毎朝起床直チニ人員検査ヲ受ケタル後窓戸ヲ開キ毛布敷布ヲ振ヒ叮嚀ニ疊ミテ寢臺
ノ上ニ置キ洗面ノ後武器ヲ清拭シ被服ヲ整頓シ又雑巾ヲ以テ棚机窓等ヲ拭フ可シ

但シ室内ニ撒水スルハ嚴禁トス
 三午食後ハ直ニ寢具ヲ展ヘ臥床ノ準備ヲナス可シ
 四起床ヨリ日夕點呼迄ハ特ニ許可アルカ又タハ衛兵下番ノ者ニアラサレハ寢臺ニ就キ
 又ハ之ニ腰ヲ掛クルヲ禁ス
 五詩ヲ吟シ歌ヲ唱ヒ及ヒ高聲ニ雜談スルヲ禁ス食事中ハ特ニ行儀ヲ正シ靜肅ヲ旨トス
 可シ
 六吹煙ハ所定ノ場所外ニ於テスルヲ禁ス又舍外ニアリテハ彈藥庫彈藥詰替所被服庫薪
 炭庫等ノ近傍ニ於テスルヲ禁ス
 七室内ニ入ル時ハ先ツ靴ノ泥土ヲ靴拭ニテ叩擽ニ掃除スヘシ又脱靴ノ時ハ兵舎階段ニ
 上ダザル前ニ靴ヲ脱クヘシ
 八室内又ハ廊下ニ痰ヲ吐キ吹殻ヲ棄ル等總テ汚穢ノ事ヲナス可ラス
 九何レノ場所ト雖モ許可ナク猥ニ釘ヲ打ツ可ラス
 十窓戶、机、腰掛、暖室爐其他ノ諸器具ヲ汚シ傷ケ或ハ落書ス可ラス

十一窓戶ノ開閉ハ規定ノ如クスヘシ又窓ヨリ物ヲ棄テ又ハ物ヲ掛ケ乾カス可ラス
 十二官物ハ勿論私物ト雖モ常ニ能ク整頓シ所定外ニ散亂シ置ク可ラス
 十三許可ナキ私物ハ管内ニ置クヘカラス
 十四常食ノ外室内ニ於テ飲食ス可ラス
 十五炊事場、洗濯所、浴室、縫工場、靴工場、休養室、銃工場、將校集會所、下
 士集會所、他中隊ノ兵舎、諸倉庫、彈藥詰替等ハ用ナクシテ立入ヘカラス
 十六官給ノ諸物品ハ鄭重ニ保存スヘシ若シ破損セハ管ニ自償スルノミナラス事ニ依テ
 ハ罰ヲ蒙ルモノトス
 十七廁圍ノ外一切大小便ヲナスヲ禁ス

其二 衛生上ノ心得

一兵卒ノ身體ハ健全ニシテ鐵石ノ如クナラサル可ラス若シ健康ニ非レハ一朝事アルニ
 臨ンテ幾多ノ困難ニ堪ヘ思ヒノ儘ニ働キヲ爲ス能ハス故ニ健康ハ 天皇陛下ニ對シ
 奉リ忠節ヲ盡スノ意ナリ且ツ一身ノ幸福ナルヲ以テ上官ヨリ示サレタル衛生法ハ固

ク之ヲ守ルヲ要ス

- 二室内ハ常ニ清潔ニ掃除シ置ク可シ又時々窓戸ヲ開キ新鮮ナル空氣ヲ流通セシメ煖室
- 爐ヲ設ケタルトキハ煙ノ室内ニ散セサル様注意ス可シ
- 三身體ノ不潔ナルハ病ヲ招クノ大原因ナルヲ以テ日々數回頭面手足ヲ洗滌ス可シ殊ニ
- 足ハ靴ノ爲メニ鬱蒸シ易キヲ以テ屢々洗滌スルヲ要ス
- 四頭髮及爪ハ常ニ短ク剪ル可シ
- 五温浴ハ身體ヲ清潔ニスルモノタルヲ以テ常ニ怠ル可ラス但シ食後若クハ空腹或ハ不
- 快ノ時ノ入浴ハ却テ害アルカ故ニ手拭ヲ温湯ニ濕シテ全身ヲ摩擦スヘシ
- 六被服ノ清潔ハ常ニ容儀ヲ美ナラシムルノミナラス衛生上緊要ノ事ナリ故ニ襦袢袴下
- 襟布其他敷布枕覆等ハ屢々洗濯シ且ツ乾燥シタルモノヲ着ス可シ
- 七帽子衣袴靴等ノ狭小ナルハ身體ヲ壓迫シ血脉ノ運動ヲ妨ケ或ハ頭痛ヲ醸シ或ハ動作
- 自由ナラス或ハ靴傷ヲ生スル等ノ事アルヲ以テ稍寛裕ナルヲ良シトス
- 八睡眠ノ不足ハ大ニ身體ノ疲勞ヲ來スヲ以テ公務或ハ止ムヲ得サルノ外ハ猥リニ就眠

時間ヲ空費ス可ラス行軍等ニ在テハ殊ニ然リトス

- 九演習後又ハ行軍途中渴ヲ濕スハ精神ヲ爽快ナラシムルノ益アリト雖凡水ヲ飲メハ腹
- 痛下痢ヲ發スルヲ以テ最モ注意ス可キ事トス
- 十身體殊ニ腹部ヲ冷スハ病ヲ招クノ原因ナリ殊ニ傳染病ニ感染シ易シ故ニ常ニ腹巻ヲ
- 用キテ腹部ヲ煖メ又タ夏期ト雖凡決シテ裸體ノ儘寢ヌ可ラス
- 十一軍隊ニテ調理シ及酒保ニテ販賣セル食料ト雖凡定量ヲ超テ過食スルハ身體ニ害ア
- リ
- 十二營外遊歩ノ時ハ成ル可ク狹隘不潔ノ市街家屋等ニ至ルヲ避ク可シ斯ノ如キ地ハ下
- 等人民ノ輻湊スル所ニシテ健康ヲ害スルヲ明カナリ
- 十三傳染病ハ一人ヨリ全隊ニ傳波スルモノナレハ最モ恐ル可キモノナリ故ニ兵卒ハ傳
- 染病ノ流行ニ際シテハ全軍ノタメ己レヲ慎ミ豫防法ヲ嚴守スルハ勿論其流行地ニ至
- ルヘカラス

其三 患者ノ心得

一患者ハ毎朝點呼ノ時給養班長ニ申出テ診斷時間ニ至レハ週番下士ノ誘導ニ從ヒ醫官ノ診斷ヲ受クルモノトス其臨時發生セシモノハ定時外ニ受診スルヲ得

二患者ハ醫官ノ診斷ニ依リ其輕重ニ從ヒ就業、半休、全休、入院ノ四種ニ區別ス

(一)就業 トハ藥ヲ貰ヒ治療ヲ受ケ而シテ其病症ニ依リ或ハ脚絆ヲ去リ或ハ外
套ヲ着スル等ニテ其日ノ業ニ就ク但シ術科休ハ術科ヲナサス他ノ勤務ニ換エラル
、事アリ

(二)半休 トハ其日ノ業ヲ休ミ舍内ニ休息スルヲ得然レハ寢臺ニ就クヲ得ス

(三)全休 トハ日ヲ期シテ治シ得ルモノニシテ休養室ニ入り寢臺ニ就キ休養ス

(四)入院 トハ病院ニ入りテ治療ヲ受ルモノナリ

三疾病ノ原因ニ依リ一等症二等症、三等症ニ區分ス

(一)一等症トハ公務或ハ演習上ヨリ發シタル疾病又ハ傷痕ヲ云フ此病者ノ日數ハ缺
勤ニ算セス

(二)二等症トハ自然ニ發シタル病ニシテ入院スレハ缺勤ヲ算シ且日給二分ノ一ヲ減

セラル

(三)三等症トハ自己ノ不攝生或ハ不品行ヨリ招キシ病ニシテ入院スレハ其缺勤ヲ算
シ且ツ日給二分ノ一ヲ減ス且ツ其ノ病ノ原因ニ依リテハ處罰セラル、コアリ

四病床ニ在ルトキ上官ノ來室アラハ床上ニ座シテ或ハ横臥ノマ、敬禮シ其容體ヲ問ハ
ル、トキハ具サニ申述フ可シ

五行軍中患者アルトキハ醫官之ヲ診斷シ其病症ノ重輕ニ從ヒ一等、二等、三等患者ニ

區別ス

(一)一等患者 歩行ニ堪エサル者ニシテ車馬ヲ以テ送致ス

(二)二等患者 歩行シ得ルモ武器背囊ヲ携行シ能ハサル者ニシテ單身徒步セシム

(三)三等患者 武器背囊ヲ携行シ得ルモ隊伍ニ列シ能ハサルモノニシテ隊列ヲ離
レ獨行セシム

其四 酒保ニ關スル心得

一酒保ハ聯隊一般ノタメ便利及衛生ヲ旨トシ精良ナル飲食物其他日用品ヲ廉價ニ販賣

シ且ツ飲食セシムルタメ設ケ置カル、モノナリ

二酒保ニ就ク時ハ靜肅ニシ衛生ニ注意シ暴飲過食スヘカラス又軍人ノ態度ニ愧ルカ如

キ賤卑ノ行爲アルヘカラス

三左ノ者ハ酒保ニ就キ飲食スルヲ許サス

(一) 衛兵其他勤務中ノ者

(二) 武器ヲ携ヘタルモノ

(三) 休業以上ノ患者

(四) 隊長ヨリ酒保ニ就キ飲食スルヲ禁セラレタル者

(五) 禁足苦役ノ罰人又ハ犯罪者及犯行取調中ノモノ

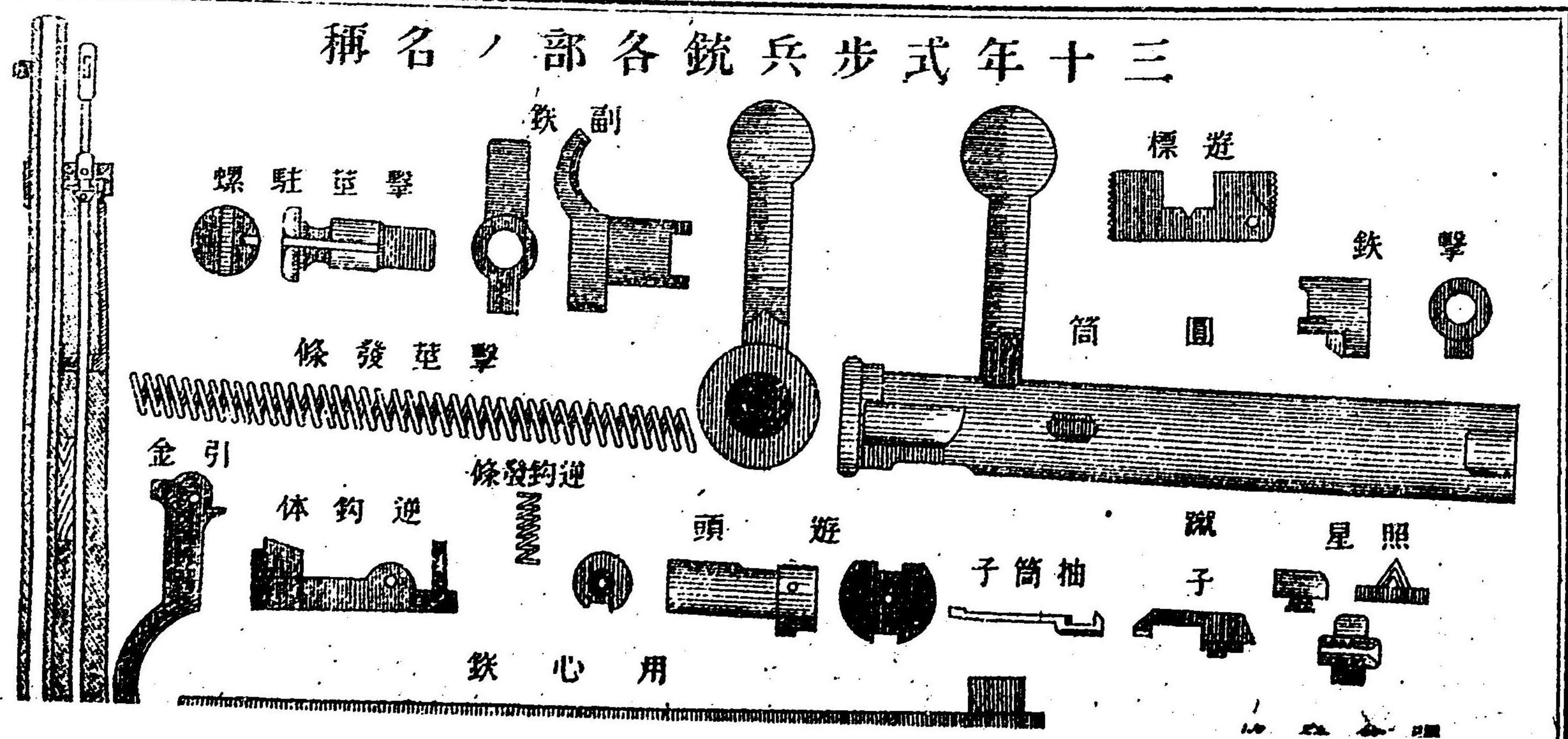
第四章 三十年式歩兵銃ノ分解及保存

其一 銃ノ取扱ニ關スル心得

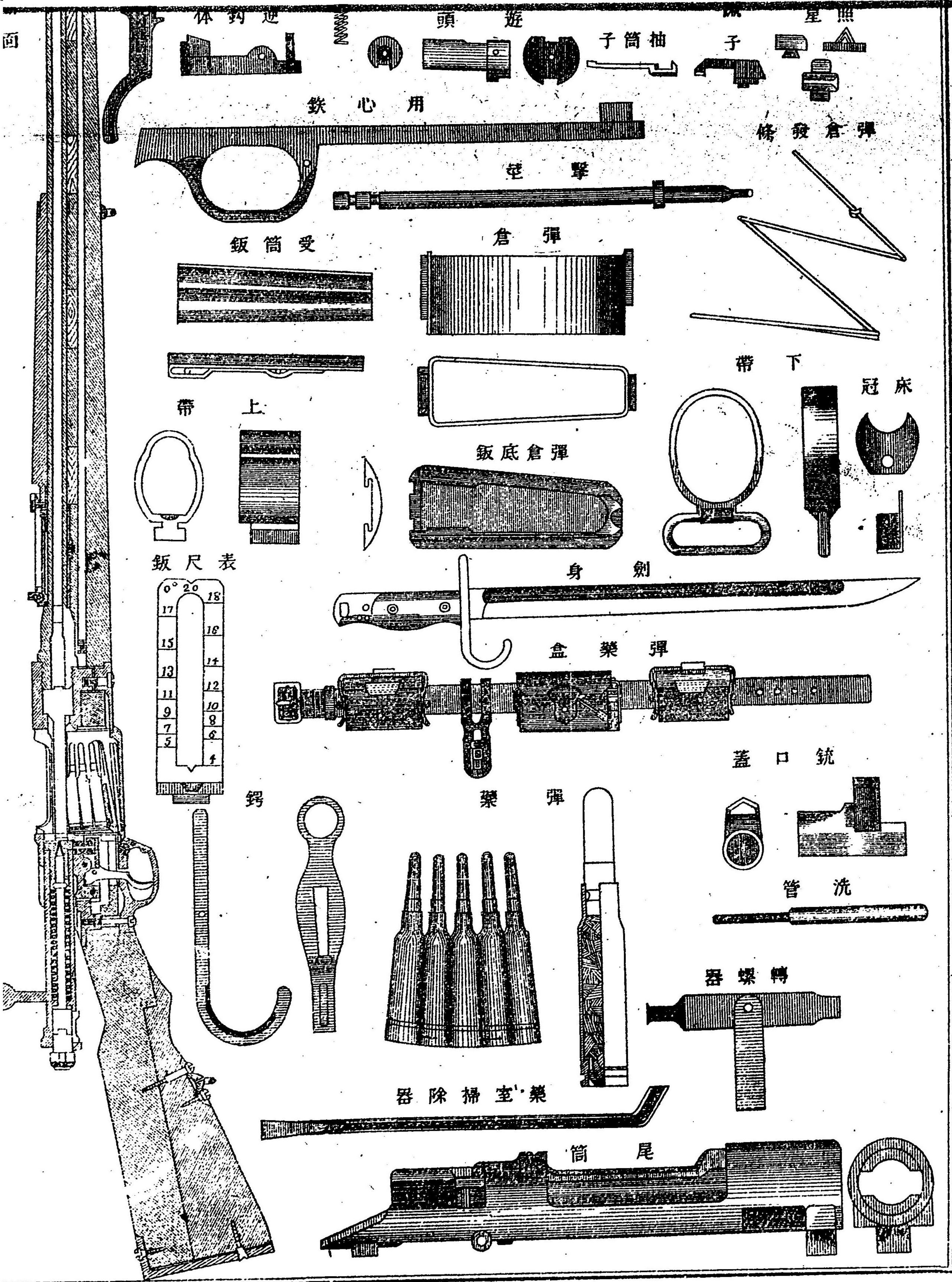
一銃ハ兵卒ノ唯一ノ武器ナリ昔時ニ於ケル武士ノ刀槍ニ等シ故ニ最大ノ愛顧ヲ以テ之

ヲ保存シ其手入常ニ精密ナルヲ要ス

稱名ノ部各銃兵步式年十三



縱斷面



二兵卒ノ 天皇陛下ニ對シ奉リ忠節ヲ竭スハ專ラ戰爭ニ臨ミ強敵ヲ破リ 皇威ヲ萬邦

ニ輝スニアリ而シテ其ノ強敵ヲ破ルノ具ハ各人ノ所有スル銃ヲ以テセサル可ラス故ニ

平時ニ於テ銃ノ手入惡シク一點ノ錆タモ生シメ或ハ不取扱ニ依テ之ヲ傷クルトキ

ハ戰爭ニ臨ミ其用ヲナサス全ク其職責ヲ盡シ能ハサル可シ

三三十年式歩兵銃ハ精良無比ノ兵器ナリ而シテ其ノ各部ノ機關ハ精巧ニシテ細密ナリ故

ニ兵卒ハ其ノ一小部タモ紛失ハ勿論損傷セサル様可シ

四最初銃ヲ受取ル片ハ勿論之ヲ使用スルノ前後其他時々之ヲ検査シ聊カタリ不具合

ナルカ又ハ疵鏽ヲ生セシ片ハ其旨速ニ届出テ検査ヲ受ク可キモノトス

其二 銃ノ各部ノ名稱 (圖ヲ参照)

其三 分解及ヒ結合法

一般ノ分解

第一 負革

第二 遊底ヲ脱スルニハ左ノ順序ニ從フ

(一)銃身上ニシ銃ヲ水平ニ置キ左手ニテ下方ヨリ銃把ヲ握リ其母指ヲ以テ遊頭駐子頭ヲ壓シ右手ニ槓杆ヲ握リ垂直ニ起シテ後之ヲ抽出ス

第三 棚杖 銃ヲ立テ銃身ヲ前ニシ左手ニテ上帶ノ下際部ヲ握リ其母指ヲ以テ上帶發條ヲ壓シ右手ニ棚杖頭ヲ撮ミテ抽出ス

是レヨリ以下ハ上官ノ許可アルニ非レハ分解スルヲ禁ス
第四 上帶 棚杖ヲ抽出スルト同法ヲ以テ一層強ク上帶發條ヲ壓シ上帶ヲ脱ス

第五 彈倉底飯同發條及受筒飯 銃身ヲ上ニシテ銃ヲ水平ニ置キ右手ニテ用心鐵ヲ撮ミ左手ヲ底飯ノ下方ニ置キ右手ノ母指ニテ彈倉駐子頭ヲ壓シテ脱出ス

第六 用心鐵 銃ヲ立テ尾筒ノ長短兩駐螺ヲ緩回シ用心鐵ヲ徐ロニ動搖シツ、離脱ス

第七 彈倉 母指ト食指ヲ以テ彈倉ノ上下部ニ就テ之ヲ撮ミ徐ロニ抽出ス
第八 下帶 銃ヲ立テ銃身ヲ左方ニシ右(左)手ノ母指頭ニテ下帶發條ヲ壓シ左(右)手ヲ以テ脱ス

第九 木被 銃身ヲ上ニシ右手ヲ以テ木被ノ前端ヲ撮ミ少シク起シ徐ロニ前方ニ脱ス

第十 銃身 銃身ヲ下ニシ銃把ヲ左腋下ニ挟ミ左手ニ照尺部ヲ支ヘ右手ニテ輕ク彈倉ノ前方ヲ叩キ之ヲ脱ス

遊底ノ分解

一遊底ノ分解結合ハ左ノ順序ニ從フ此分解ハ棚杖ヲ抽出セサル前ニ於テ行フモノトス而シテ分解ノ際ハ順序正シク併ヘ置ヘシ

第一 遊頭 遊頭ヲ左ヘ九十度回轉シ抽筒子蹴子ト共ニ之ヲ脱ス

第二 擊莖駐螺 左手ニテ圓筒部ヲ握リ右手ノ食指ヲ以テ擊鐵ヲ擊發段ニ下ロシ次テ擊莖駐螺頭ヲ駐螺發條ノ上ヨリ撮ミ其螺子部ヲ脱シ終ル迄左ヘ戻回シ右手ニ

テ銃ヲ垂直ニ支持シ左手ニ圓筒ヲ握リ母指ヲ槓杆ノ方厚部ニ釣シ其擊莖尖端ヲ棚杖頭ノ凹部ニ當テ圓筒ヲ下方ニ壓シ駐螺ヲ脱ス

第三 副鐵

第四 擊莖及擊莖發條

第五 擊鐵

二 結合法ハ凡テ分解ト反對ノ順序ヲ以テス

三 單ニ彈倉機ノ分解ヲ要スルトキハ彈倉底飯同發條及受筒飯、用心鐵、彈倉ノ分解順序ニ依リ之ヲ行フヲ得ヘシ

四 右ニ示ス以外ノモノハ決シテ分解スヘカラス斯ノ如キモノハ其位置ニ就テ掃除スヘシ

五 分解結合ノ注意

(一) 擊莖ヲ分解スルニ當リ擊莖駐螺ノ戻回困難ナルトキハ最初ノ一二旋ハ轉螺器ヲ用ユルコトヲ得

(二) 上帶、下帶ヲ分解或ハ結合スル片ハ照星トノ觸突又ハ其摩擦ニ依リ銃身ノ染炭及銃床ヲ毀損セサルコトニ注意スヘシ

(三) 木被ヲ分解スルニ當リ其緣鐵ヲ損セサルコトニ注意スヘシ

(四) 轉螺器其他鐵石ヲ以テ銃ノ諸器具ヲ打ツヲ嚴禁ス

(五) 銃身ニ塗油スルニ當リ銃ヲ分解セス單ニ下帶ヲ脱シテ木被ノミヲ脱スルコトヲ得然レトモ屢々之ヲ脱離スルヲ禁ス

其四 保存

一 銃身及照準機ノ損傷ハ射擊上大ナル關係ヲ及ホスモノナルヲ以テ最モ注意ヲ要スルモノトス

二 總テ銃ハ成ルヘク地上ニ置クコトヲ避クベシ止ムヲ得サル場合ニ於テモ銃口照尺及機關部ハ直接地上ニ觸レシムヘカラス若シ土砂及雪等ノ銃腔中ニ侵入セシ片ハ如何ナル場合ト雖モ之ヲ除去スルニアラサレハ決シテ射擊スヘカラス何トナレハ微細ナル砂塵ト雖モ射擊ノ際腔中ヲ損害スルコト大ナレハナリ

三 銃ヲ使用セサルトキハ常ニ銃口蓋ヲ冠シ置クヘシ然レトモ射擊ヲ行フ爲メ營外ニ携帶スル片ハ必ス脱去スルモノトス又木栓或ハ紙栓ヲ以テ銃口蓋ニ代用スルヲ禁ス何トナレハ銃口部ニ鏽ヲ促スノ原因トナリ若シ一タヒ鏽ヲ生スレハ之ヲ除去セントス

ルモ頗ル困難ナルニ至ルヘシ
 雨雪天ノ際行軍ヲナスニハ豫メ銃身ト銃床トノ接着面ニ豚脂或ハ密蠟ヲ塗抹シ置ク
 ヘシ此レ水分ノ浸入ヲ防カンカ爲メナリ
 四銃ヲ轉倒シ或ハ之ヲ衝突スルカ如キハ命中ヲ害スルノ患アリ最モ戒慎セサルヘカラ
 ス若シ此過失ヲナセシ兵卒ハ速カニ報告シテ検査ヲ受クルコト緊要ナリ
 銃身ハ銃床ニ結合セシトキハ多少屈撓ニ抗堪スルノ力アルモ之ヲ分解スル片ハ此抗
 堪力微弱ナリ故ニ最モ注意シテ取扱ハサルヘカラス
 五行軍演習或ハ運搬ノ際銃ヲ携帶スルトキハ堅硬ナル物體若クハ背囊負帶ノ金屬具等
 ニ觸レ銃床ニ損傷ヲ受ケシメサル如ク注意スヘシ
 一名ノ兵卒ハ數挺ノ銃ヲ携帶スヘカラス成ルヘク一名一挺ニ限ルヲ要ス此レ兩銃相
 衝突シテ損傷スルノ患アレハナリ若シ行軍中等萬止ムヲ得サル片一時二挺ノ銃ヲ携
 持スルコトアルモ相摩擦セサル如ク注意スヘシ又銃ヲ携帶スルトキハ之ニ他ノ物品
 フ掛クルヲ禁ス

六銃ヲ銃架ニ架スルニハ激突セサルコトニ注意スヘシ此レ照星ヲ毀損シ或ハ銃身ノ着
 色ヲ剝脱スルノ患アレハナリ
 七床尾ヲ地上ニ置クトキハ決シテ衝突スヘカラス何トナレハ床尾ヲ毀損スルノ恐アル
 ノミナラス床尾鉸附着ノ螺子ヲ破損スルヲ以テナリ
 八射撃ニ用ヒシ銃ニ拭淨法ヲ行ヒタル時ハ翌朝ニ至リ腔中ニ發鏽セサルヤ否ヤヲ再ヒ
 検査スルヲ要ス
 九各螺子ニ鏽ヲ生ジタル爲メ銃身銃床ニ固着シ離レ難キトキハ、給養班長ニ届出ル
 モノトス
 十螺子ヲ旋脱スル始メト之ヲ螺着スル終リハ過激ニセサル様注意スヘシ而シテ轉螺器
 ハ螺子頭ノ溝内ニ全ク入レ偏スルコトナク溝内ニ垂直ニスヘシ、然ラサレハ螺子溝
 中ヲ滑走シテ此ノ部分ヲ毀損スルノ患アリ
 十一兵卒ハ日常及ヒ射撃後ニ於テ武器ノ検査ヲナスヘシ其注意スヘキ箇所左ノ如
 シ

銃身部

銃身外部 染烘部黒色ヲ失ハサルヤ、外部ニ錆ヲ生シアラサルヤ

銃腔 發錆シアラサルヤ、土砂、塵埃、雪等アラサルヤ

藥室 錆ヲ生シアラサルヤ

照星 光輝ヲ發セサルヤ、打撲若クハ磨滅シアラサルヤ

遊標 表尺銀ノ刻線ニ合スルヤ、遊標ハ上下スルヤ

同駐鉤 表尺刻割部ニ確カニ挿入シアルヤ

照尺座駐栓 脱出スルコトナキヤ

尾筒

引鐵 第二段ノ作用ヲナスヤ

噴氣孔 塵埃洋渣ナキヤ

遊頭 發錆スルコトナキヤ、同先頭ノ穴ニ外物ナキヤ

副鐵 副鐵鉤トノ接際破損シアラサルヤ、位置宜シキヲ得ルヤ

繫莖發條 屈曲セサルヤ、折損セサルヤ

遊底

蹴子 折損セサルヤ

圓筒内部 發錆セサルヤ

擊莖 幹部發錆シアラサルヤ、折損シアラサルヤ

彈倉

同駐螺發條 同脚折損シアラサルヤ

前床部 打撲傷ナキヤ

銃把部 裂傷又打撲傷ナキヤ

銃床部 同右

木被 裂傷ナキヤ

駐梁 打撲アラサルヤ

下帶 發條ヲ壓セサルヤ

同翻環 塗油固結シアラサルヤ、運動シ得ルヤ

銃鍊 下帶翻環ニ同シ

銃尾 動搖セサルヤ、發錆セサルヤ

銃尾 動搖セサルヤ、發錆セサルヤ

棚 杖

折損屈撓セサルヤ又眞鍮部方窓部屈撓セサルヤ
發錆セサルヤ安置適當ナリヤ銃身ト並行スルヤ

劍 身

劍尖黑色ニ變セサルヤ、屈撓シアラサルヤ折損セサルヤ

駐 箭 頭

裝着シアリヤ、塗油適當ナリヤ

駐 梁 溝

塵埃アラサルヤ

銃 劍

柄 頭

疵ヲ生セサルヤ

彈 鎖 子

其機能ヲ有スルヤ

銃 鞋 外 部

打撲ナキヤ、屈撓シアラサルヤ

第五章 被服裝具ノ保存

一 衣服ハ之ヲ着用スルノ前後ニ於テ輕ク打チ上方ヨリ下方ニ向ヒ刷毛ニテ塵ヲ拂ヒ絨

衣ノ釦ハ磨板ニ挾ミ之ヲ磨キ殊ニ襟、肩章、袖章ノ赤部ヲ汚損セサル様注意ス可シ

二 衣袴及下着類ニ破綻ヲ生セシキハ自ラ之ヲ繕フベシ之ニ用ル糸ハ必ず其品ノ色ニ透

應セシムヘシ其破損大ナルニ至ツテハ修理ヲ乞フ可シ

三 夏衣袴及下着類ハ時々洗濯シテ清潔ニナシ置ク可シ

四 衣袴外套脚褲等ノ隊號姓名若クハ番號ハ消滅セサル様時々記入シ明瞭ナラシメ置ク可シ

五 靴ハ能ク泥ヲ去リ靴墨又タハ油(鯨油ヲ良シトス)ヲ塗り新古品交互ニ之ヲ穿キ何時

行軍アリテモ差支ナキ様ニナシ置クヘシ踵ノ曲リタルモノ等ハ直ニ修理ヲ申出ヘシ

六 包布敷布枕覆ハ不潔トナラサル様屢々洗濯スヘシ

七 繩テ革具ハ薄ク脂ヲ塗り充分ニ之ヲ摺付ケ刷毛ニテ摩擦スヘシ

八 眞鍮類ハ磨粉ヲ以テ磨キ決シテ油ヲ塗ル可ラス又金具類ハ錆ノ生セサル様注意スヘシ

九 携帶器具ハ時々上覆ヲ脱シ油ヲ塗り置ク可シ

第六章 呼 集

其一 非常呼集

一 非常呼集トハ、營内又ハ營外ニ於テ五發ノ警報アル時等ノ事變ニ際シ非常警戒ヲ

- 要スルコト生ゼシ場合ニ呼集スルモノナリ
- 二非常呼集ノ時ハ、風紀衛兵所ニテ非常ノ號音ヲ吹奏ス
- 三兵卒ハ直ニ軍裝シテ中隊前ニ集合スヘシ
- 四當番卒ハ規定ノ服裝ヲシテ服務ノ場所ニ到ルヘシ

其二 火災呼集

- 一火災呼集トハ、營内或ハ屯營附近ニ火災アルキ、呼集スルモノナリ
- 二火災ニ際シテハ、兵卒ハ喧噪ナラス務メテ迅速ニ整列スヘシ
- 三火災呼集ニアラテハ略裝ニテ銃器ヲ携ヘ中隊舍前或ハ火災ナキ地ニ整列ス

其三 不時點呼

- 一不時點呼トハ不時ニ人員ノ檢査ヲ行フモノヲ云フ
- 二不時點呼ノ時ハ最モ靜肅迅速ニ各自ノ居室ニ集合シ給養班長ノ指揮ニ從ヒ點呼ヲ受ヘシ

其四 臨時ノ呼集

- 一臨時ノ呼集ハ、兵卒等ガ平素各呼集ニ應スル用意及注意ヲ怠ラサルヤ否ヤヲ檢査スルモノナリ
- 二各呼集ニ應スル服裝ヲナシ整列スルモノトス

第七章 勤務

其一 衛兵一般ノ心得

- 一總テ勤務ハ平時ニ在テ兵卒ノ盡ス可キ實地ノ軍務タルヲ以テ能ク困苦疲勞ニ堪ヘ身命ヲ惜マス其守則及守地ヲ守ラサル可ラス
- 二衛兵ノ種類左ノ如シ
 - (一) 守衛々兵ハ宮城及青山假東宮御所ノ儀仗並ニ警備ニ任スルモノナリ
 - (二) 衛成服務ハ平時衛成地ノ治安ヲ維持シ且事變ニ際シ人民ヲ保護スルニアリ
 - (三) 風紀衛兵ハ屯營ノ風紀ヲ維持シ且ツ内外ノ警戒ヲ掌ルモノナリ
- 三衛兵ハ晝夜ノ別ナク帽劍彈藥盒及ヒ脚絆靴ヲ脱スルヲ許サス常ニ能ク服裝ヲ整ヘ整急ノ準備ヲナシ舍内ニ在テハ靜肅ニシテ諸事嚴正ナラサル可ラス是レ衛成勤務ハ職

時警備勤務ノ豫習ニシテ自然ニ其精神ヲ鍛鍊スルノ良法ナリ守衛兵ハ我日本帝國之軍隊ヲ代表シ風紀衛兵ハ其聯隊ヲ代表スルモノナレハナリ
四何レノ時ニ在テモ銃ハ定メラレタル所ノ銃架ニ掛ケ背囊ハ番號ノ順序ニ整頓シ置ク
ヘシ

五衛兵要事アリテ衛舎ヲ離レントスル時ハ必ス上官ノ許可ヲ受クベシ
六夜間衛兵ハ、衛兵全員ノ三分ノ一ハ就眠スルコトヲ得ルモノトス又就眠スルト雖モ帽劍帶革脚絆ヲ着ケタルマヽニシテ決シテ服裝ヲ亂スヲ許サス
七控兵ハ、常ニ武裝ヲ整ヘ不時ノ呼集ニ應ジ得ル準備ヲナシアルヘシ

其二 步哨一般ノ守則

一歩哨ハ姿勢動作ヲ嚴正ニス可シ吟歌喫烟シ或ハ漫リニ人ト談話シ或ハ哨舎ヲ毀損シ或ハ其近傍ヲ汚穢ニシ或ハ頭巾ヲ冠ムル可ラス又雨雪天ノ外ハ哨舎内ニ入ル可ラス
二擔銃或ハ立銃ヲナシ或ハ銃ヲ腕ニシテ其守地ヲ看守ス可シ決シテ手ヨリ銃ヲ離ス可ラス夜間又ハ別命アルニ非ラサレハ劍ヲ銃ニ附セス

三哨舎ノ近傍三十步(風紀衛兵步哨ニアツテ八十步以内)行動スルヲ得ルト雖モ爲メニ看守ヲ怠ル可ラス交代或ハ敬禮ヲナスドキハ必ス定位ニ復スヘシ異常ヲ認メタルカ又敬禮及交代ノ時ハ必ス哨舎ヨリ出ヘシ
四歩哨々舎内ニ在ル時ハ殊ニ其目ヲ働カシ警戒スヘシ
五歩哨係ノ引卒セシ兵ニアラサレハ交代ヲナスヘカテス守衛隊司令官又ハ衛戍司令官衛戍副官衛兵司令若クハ巡察ノ將校下士及上等兵ニアラサレハ他人ニ其ノ守則ヲ語リ或ハ更ニ他人ヨリ守則ヲ受ク可ラス

(二) 步哨ノ警戒

一凡ソ步哨ハ百事ニ配意シ瞬時モ警戒ヲ怠ル可ラス尙敬禮ノタメ警戒ハ怠ル可ラス
二若シ某所ニ火災アルヲ知ラハ「火事」ト呼ハリ又ハ盜賊暴行者ヲ見レハ「氣ヲ着ケ」ト呼ビ隣哨又ハ衛舎ニ急報スヘシ
三前項ノ場合ニ於テハ其一名之ヲ報告シ單哨ニ在テハ步哨ヨリ步哨ニ傳ヘテ衛舎ニ報ス可シ

四衛兵ハ左ニ列記スル者ニ對シテハ門外又ハ衛舎前ニ執銃横隊ニ整列シテ敬禮スヘキモノトス故ニ銃前哨ハ常ニ注意シ監視スヘシ而シテ是等ノ來ルヲ望見セハ「執レ銃ト」呼フヘシ(夜間ヲ除ク)但シ第三項第四項ノ者ニ對シテハ其門ヲ出入スル時ニ限ル守衛衛兵ノ敬禮ハ別ニ定ムル所ニヨル

(一)兩陛下皇族

(二)軍旗

(三)元帥陸軍大臣參謀總長、教育總監、臺灣總督、都督、陸軍大將及特命檢閱使タル將官

(四)准士官以上及見習士官ノ率ヒル武裝シタル軍隊

(二)夜間ノ步哨

一步哨特別ノ時機ニ於テ又ハ特別ノ守則ニヨリ夜間安ニ人ノ接近スルヲ許サ、ルトキハ間查ヲ行フ可シ(守衛隊ニ在リテハ平時ハ夜間間查法ヲ行ハス其ノ疑ハシキモノハ靜ニ其誰ナルヤヲ糺ス可シ)

二步哨間查ノ方法

(一)人來ラハ「止レ」ト呼ヒ其人止レハ「誰カ」ト問フ

(二)間查シタル者斥候又ハ巡察ト答フルトキハ「良シ」(但シ銃前歩哨ハ第三項ノ處置ヲナスヘシ)ト云ヒ、又其者差支ナキ者ナレハ「通レ」ト呼ビ、通行セシムヘシ

(三)若シ「止レ」ト呼フコト三回ニ及フモ止ラス依然前進スル者ハ、銃ヲ構ヘテ通スヘカラス

(四)銃前歩哨夜間斥候其他軍隊ノ來ルヲ見レハ、「止レ」ト呼ヒ止マラシメ衛舎ニ向テ「執レ銃」ト呼フヘシ、而シテ衛兵執銃整列セハ敬禮ヲナシ通行セシムヘシ

(五)銃前歩哨ニアラサル其他ノ步哨軍隊ノ來ルヲ見レハ、構銃ヲナシ「止レ」ト呼ヒテ之ヲ止メ停止セハ「誰カ」ト呼フ、彼レ斥候ト答フレハ「暗號ニ進メ」ト呼ヒ其長ヲシテ單進シテ答ヘシムヘシ、暗號合一スレハ通過ヲ許スヘシ、若シ暗號ヲ知ラス又ハ相違スル時ハ、武裝ヲ脱カシメ衛兵司令ニ報スヘシ

其二 衛戍勤務ノ斥候巡察

- 一 巡察ニ將校巡察、下士巡察ノ二種アリ
- 二 巡察將校ハ、肩章ヲ帶フ
- 三 巡察下士ハ、武裝ス但シ曹長ハ背囊ヲ負ハス只外套ノミヲ携フ
- 四 斥候ハ特別ノ場合ニ出スモノトス
- 五 衛戍勤務ノ斥候ハ、諸衛兵ヨリ出スモノニシテ、守地ノ近傍ヲ巡視ス、其長ハ將校下士、上等兵若クハ一等卒ヲ以テ充ツ
- 六 斥候ノ行進路ハ、指定ノ道路ヲ行進シ搜索スヘキ必要アラサル時ハ定路外ニ出ルヲ得ス
- 七 斥候ハ火災其他非常ノコトアレハ、速ニ最寄ノ衛舎ニ報知スヘシ
- 八 兩斥候夜間遭遇スル時ハ、最初ニ發見セシ者「止レ」ト呼フ、彼止レハ「誰カ」ト呼ビ、彼斥候ト答フレハ亦自身モ斥候ト唱へ次ニ「暗號ニ進メ」ト呼ビ、兩斥候長相對シテ構銃ヲナシ暗號ヲ聽聞シタル後、互ニ巡察ノ事件ヲ通報ス
- 九 若シ巡察下斥候ト遭遇シタル時ハ問查ヲナスモノトス、其方法兩斥候ニ同シ

其四 歩哨ノ敬禮

- 一 總テ歩哨ハ左ニ列擧スルモノニ對シテ敬禮ヲ行フ可シ
 - 一、天皇皇后陛下、皇太子皇太子妃殿下其他ノ皇族、并ニ外國ノ皇帝皇后陛下及皇族
 - 二、軍旗
 - 三、陸軍大臣及將校、准士官、見習士官
 - 四、守衛隊歩哨ニ在テハ、賢所御代拜ノ諸官或ハ勅使
 - 五、勳六等或ハ功五級以上ノ勳章佩用者(寶冠章ヲ除ク)
 - 六、下士
 - 七、勳七等或ハ功六級以下ノ勳章
 - 二 立銃ノ儘姿勢ヲ正シ敬禮スル者
 - 三 敬禮ヲ行フニハ其定位置ニ立チ受禮者凡ソ六歩前ニ來ル并敬禮ヲ行ヒ六歩過キ去ル迄其姿勢ヲ保ツ可シ
- 但シ哨舎内ニ在ル并ハ必ス出テ、敬禮ヲ行フモノトス

- 三 複哨ニ在テハ互ニ注視シカメテ同時ニ行フ可シ
- 四 夜間ト雖モ其受禮者タルヲ識別スレハ必ス敬禮ス可シ
- 五 軍隊ニ對シテハ其隊長ニノミ階級相當ノ敬禮ヲ行フ可シ
- 六 帶勳者ニシテ其勳章ト其官職ト敬禮上相異ルルハ重キニ敬禮スヘシ
- 七 兵卒ヨリ敬禮ヲ受クルルハ立銃ノ儘姿勢ヲ正シ答禮ヲ行フ可シ

其五 風紀衛兵步哨特別ノ守則

步哨特別ノ守則

營門歩哨

- 一 營門歩哨ハ皇族、軍旗、元帥、陸軍大臣、參謀總長、教育總監、臺灣總督、都督、陸軍大將及特命檢閱使タル將官所屬師旅團聯隊長及准士官以上又ハ見習士官ノ指揮スル軍隊營門ヲ出入スルルハ「執レ銃」ト呼ブ
- 二 印鑑ヲ所持スル者ハ之ヲ檢シタル後出入ヲ許ス
- 三 出入者ノ服裝、所持品、軍隊手帖、印鑑、物品持出證、等ハ綿密ニ檢査シ若シ違フ

モノアレハ司令ノ許ニ至ラシム

四 下士上等兵ノ指揮シテ隊伍ヲナシタルモノハ出入ヲ許スト雖モ其疑ハシキカ或ハ夜

間ニ於テ出門セントスルモノアルルハ衛兵司令ノ許可ヲ得ルモノトス

五 步哨ノ守則ヲ受ケ又ハ守則ヲ語ルモ差支ナキ人ハ聯隊長週番中隊長週番特務曹長

(聯隊)ノ衛兵司令并ニ衛兵ノ上等兵ニ限ル

軍旗ノ歩哨

七十六

營倉ノ歩哨

彈藥庫ノ歩哨

七十七

其六 使役

- 一 使役ニ充ル所ノ兵卒ヲ分テ當番卒從卒トス
- 二 當番卒ハ命令使書翰使其他ノ雜役ニ服務スルモノヲ云フ
- 三 當番卒ハ營内ニ於テ使役スルノ外ハ第二種帽ヲ冠リ劍ヲ佩ヒ脚袴ヲ袴上ニ穿ツヘシ外套ヲ携フル時ハ卷テ左肩ヨリ右腋下ニ掛ルモノトス
- 四 當番卒ノ不注意ヨリ生シタル器具ノ紛失破損ハ該人ヲシテ償ハシム若シ其本人不分明ナルトキハ其受持ノ當番卒一同ヨリ之ヲ償ハシム
- 五 從卒ハ品行方正勤務勉勵ナルモノヨリ撰拔スルモノトス
- 六 從卒ハ將校ノ兵器被服等ヲ拭淨シ傳令ノ勤務ニ任シ其他將校身邊ノ用向ヲ辨スルモノトス又將校出務中ハ其所在ノ當番勤務ヲ兼テシムルモノナリ

第八章 賞罰

其一 褒賞

一 兵卒ノ受ク可キ褒賞ハ賞勳、射擊徽章、褒賞歸休、及善行證書トス

二 賞勳トハ功勞ニ依テ勳章若クハ金圓ヲ賜フモノニシテ軍人タルモノ最モ名譽トスル所タリ之ヲ分テ勳勞、勳功、殊勳ノ三種トス

(一) 勳勞トハ平戰兩時ニ通シテ國家ノタメ勳勞ノアルモノヲ云フ

(二) 勳功トハ平戰兩時ニ通シテ國家ノタメ功績ヲ擧ケシモノヲ云フ

(三) 殊勳トハ戰爭中拔群ノ武功アル者ニシテ全軍又ハ一部ノ軍隊ヲ補益セシモノヲ云フ

三 勳章ハ明治八年二月ノ創定ニシテ其詔ニ曰ク

朕惟フニ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜シク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬フ可シ依テ勳章賞牌ノ典ヲ定メ人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス汝有司其レ之ヲ體セヨ

四 明治廿一年一月更ニ瑞寶章ヲ設ケラレ勳等ヲ潤飾増設シ新舊併セ行フテ獎勵ノ道ヲ擴メラル

五 明治廿三年二月又タ金鷄勳章ノ創設アリ其詔ニ曰ク

朕惟ミルニ 神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ
 二登極紀元ヲ算スレハ二千五百五十年ニ及ヘリ朕此期ニ際シ天
 皇裁定ノ古事ニ徴シ金鷄勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與
 シ永ク天皇ノ威烈ヲ輝シ其忠勇ヲ獎勵セントス汝衆庶此旨ヲ體
 セヨ

天恩ノ優渥ナル夫斯ノ如シ豈軍人タル者奮勵切瑳忠節ヲ盡スノ念ヲ失フテ可ナランヤ

第一 勳章の種類

一大勳位菊花章

大勳位菊花大綬章 大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ニ垂レ
 其副章ヲ左肋ニ佩フ

大勳位菊花章頸飾 頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ
 其副章ヲ左肋ニ帶フ

二旭日章

勳一等旭日桐花大綬章 大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ニ垂レ

勳二等旭日 日 大綬章 其副章(桐花大綬章ニ在テハ桐花章)ヲ左肋ニ帶フ

勳三等旭日重光章 右肋ニ帶ヒ其副章(三等勳章)ヲ
 中綬ヲ以テ喉下ニ帶フ

勳四等旭日小綬章 中綬ヲ以テ喉下ニ帶フ

勳五等雙光旭日章 小綬ヲ以テ左肋ニ帶フ

勳六等單光旭日章 同右

勳七等青色桐葉章 同右

勳八等白色桐葉章 同右

三瑞寶章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル佩用ハ旭日章ニ同シ

四金鷄勳章

功一級ヨリ功七級ニ至ル
功一級章ハ大綬ヲ以テ左肩ヨリ右脇ニ垂レ
其副章ヲ左肋ニ帶フ其他ハ旭日章ニ同シ
五寶冠章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル

六勳三等或ハ功三級以上ハ將官ニ勳六等或ハ五級以上ハ上長官士官ニ勳七八等及七級ハ下士兵卒ノ勳功アル者ニ賜フモノナリ而レテ拔群ノ功アルモノハ兵卒タリトモ勳六等或ハ功六級ノ勳章ヲ賜フ
七寶冠章ハ婦人ノ功勞アル者ニ賜フ者ナリ

第二 射撃徽章

一射撃徽章ハ年度射撃結果ノ最優等ナル名級射手ニ授與シ以テ良射手タルヲ表彰スル名譽賞標ナリ其種別左ノ如シ

第一種 徽章ハ 聯隊ニ三個ニシテ特別射手ニ附與ス

第二種 徽章ハ 各大隊ノ下士二個ニシテ一等射手ニ附與ス
各中隊兵卒二個ニシテ一等射手ニ附與ス

第三種 徽章ハ 各中隊兵卒二個ニシテ二等射手ニ附與ス

第四種 徽章ハ 各中隊兵卒一個ニシテ三等射手ニ附與ス

一射撃ノ徽章ハ全兵役間之ヲ佩用シ上衣左肋ノ邊ニシテ第二ト第三トノ釦間ノ高サニ佩フ若シ數個ヲ有スルトキハ其種類ノ順次ニ從ヒ右ヨリ左ニ列ス可シ但シ佩用スルハ制服ヲ着シタル時ニ限ル

第三 褒賞歸休及善行證書

一褒賞歸休トハ平素行狀方正勤務勉勵技藝熟達ニシテ隊中ノ鑑鑑トナル可キモノヲ現役ニケ年ニシテ歸郷セシムルヲ云フ

二善行證書ハ現役中行狀方正勤務勉勵學術技藝ニ熟達シタルヲ表スル所ノ名譽ノ證明書ナリ

附記章

一從軍記章ハ將卒ノ別ナク凱旋ノ後從軍セシ者ニ賜フ紀念章ナリ
（現時明治七年征台役ト同廿七八年戰役、三十三役）トノ三種アリ

二憲法發布紀念章ハ明治廿二年二月十一日憲法發布式ニ參列セシ奏任官以上ニ賜ハリシモノナリ

三大婚二十五年祝典ノ章ハ明治廿七年三月九日祝典ノ節御召ニ依リ參内シタル者ニ賜リタリ

四赤十字社員徽章ハ赤十字社員タル徽章ナリ

其二 恩給

一恩給ハ平戰兩時公務ノタメ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ニ準ス可キモノニシテ免官若クハ現役ヲ免レタル者ニハ免除恩給ヲ給シ猶ホ傷痍ノ重症ニ從ヒ増加恩給ヲ給セラル、モノナリ

但シ恩給ヲ受ケスシテ滿期若クハ免官ノ後傷痍重症ニ赴キタル者ハ規定ノ年限内ニ請願スレハ相當ノ恩給ヲ給セラル、モノナリ

二平戰兩時公務ノタメ傷痍疾病ニ罹ルモ輕症ニシテ以上ノ恩給ヲ受クル能ハサルモノニハ賑恤金ヲ給セラル

三平戰兩時公務ノタメ死没シ或ハ之ニ依テ受ケタル傷痍ニ原因シテ死没シタル軍人ノ寡婦孤兒父母兄弟ノ内一人ニ扶助料ヲ給與セラル

四免除恩給ヲ請求スルニハ請求書ニ履歷書、傷痍疾病原因ノ現認證書ヲ添へ所管長官ニ差出ス可キモノトス

其三 刑罰

第一 懲罰令

一懲罰令ハ故意懈怠疎虞過失等ノ輕犯ニシテ刑法ニ該ラサル者及素行修ラス軍人ノ體面ヲ汚ス者ヲ懲戒スルノ罰典ナリ之ヲ分チテ重營倉輕營倉トス

二重營倉ハ演習ノ外勤務ヲ止メ營倉ニ錮シ寢具ヲ與ヘス其食料ハ飯及鹽ト湯ヲ給セラル然レモ七十二時ノ内二十四時ハ輕營倉ニ移ス而シテ日給ハ十分ノ八罰俸ヲ附加ス

三輕營倉ハ重營倉ト同シク營倉ニ錮スト雖モ寢具及常食ヲ給ス而シテ日給十分ノ六ノ罰俸ヲ附加ス

四 營倉ノ罰ハ苦役若クハ禁足ニ換ユルヲアリ而ルトキハ重營倉ハ一日ヲ三日ニ輕營倉
ハ一日ヲ二日ニ算ス

五 苦役ハ日常ナス可キ勤務ノ外諸雜役ニ服シ營外ニ出テ或ハ酒保ニ就ク事ヲ禁セラル
ルモノトス而シテ日給十分ノ二ヲ減ス

六 犯罪ノ項目概テ左ノ如シ

- (一) 法則命令ヲ遵奉セス若クハ之ヲ誹謗シ又ハ之ヲ誤ル者
- (二) 罵詈侮慢若クハ爭鬪スル者
- (三) 猥リニ劔ヲ拔キ又ハ暴行脅迫スル者
- (四) 職役若クハ屯營本隊ヲ離ル、者
- (五) 酩酊事ヲ省セサル者
- (六) 故ナク諸般規定ノ期ニ後ル、者
- (七) 言語所爲ノ詐僞ニ渉ル者
- (八) 失言過語若クハ應答從順ノ道ヲ失フ者

(九) 疾病事故ニ托シ勤務演習ヲ免レントスル者

(十) 官給品ノ措置拭拂法ニ違ヒ又ハ之ヲ破毀汚損遺失若クハ之ヲ擅用スル者

(十一) 犯罪者ヲ曲庇スル者

(十二) 服裝法ニ違フ者

(十三) 敬禮ヲ缺ク者

(十四) 軍人ノ態度ヲ失フ者

(十五) 素行修マラサル者

第二 陸軍刑法

一 陸軍刑法ハ軍人ノ犯罪者ヲ處斷スル罰則ニシテ其罪目ヲ分テ反亂、抗命、暴行、侮
辱、違令、逃亡、詐僞及結黨トス

二 主刑重罪ニアリテハ死刑、徒刑、流刑、懲役、禁獄トシ輕罪ニ在テハ禁錮トス

一 反亂

(一) 黨ヲ結ヒ兵器ヲ取り反亂ヲナス者或ハ之ヲナスヲ謀リ物品ヲ掠奪スルモノ

(三) 敵ヲ利シ味方ヲ害スル者

(三) 以上ノ豫備ヲナス者

二 抗命

(一) 命令ニ従服セス若シクハ上官ノ制止ニ従ハサル者

三 暴行

(一) 上官又ハ哨兵或ハ同等若クハ以下ノ軍務ヲ行フ者ニ對シ暴行ヲナス者

(二) 多衆結合シテ相爭鬪スル者

(三) 哨兵衛兵妄ニ發射スル者

四 侮辱

(一) 上官又ハ哨兵若クハ同等或ハ以下ノ者軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ罵詈訾若クハ

侮慢スル者

(二) 文書圖書ヲ流布シ若クハ多衆ヲ會シ演說ヲナシテ上官ヲ誹謗スル者

五 違令

(一) 哨兵ニ對シ哨令ヲ犯ス者

(二) 哨兵擅ニ守地ヲ離レ又ハ睡眠シ或ハ酩酊事ヲ省セサルモノ

(三) 擅ニ哨令ヲ變更シ若クハ之ニ違フ者

(四) 故ナク歸隊若クハ召集ノ期ニ後レ十日ヲ過クル者(戰時ハ五日)

(五) 政事ニ關スル事項ヲ上書建白シ又ハ講談論說シ若クハ文書ヲ以テ廣告スル者

(六) 俘虜降人ヲ逃走セシメ或ハ之ヲ藏匿スル者又其看守中若クハ護送中怠慢ニ由

リ其逃走ヲ致ス者

(七) 現ニ軍務ニ服シ擅ニ其地ヲ離ル者

(八) 戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ急呼ノ號報アルトキ故ナク來會セサルモノ

六 逃亡

(一) 敵前ニ在テ擅ニ職役若クハ本隊ヲ離ル、者其他ノ場合ニ在テハ逃亡後六日

(戰時ハ三日)ヲ過クル者

(二) 敵ニ降ル者

七 詐偽

(一) 斥候偵察ノ命ヲ受ケ詐偽ノ報告ヲナシ若クハ傳令使命令ヲ偽リ傳ル者

(二) 疾病ヲ詐偽シ身體ヲ毀損シ兵役ヲ免レント圖ル者并ニ歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニアルモノ戰時ニ於テ此所爲ヲ以テ召集ヲ免ル、コトヲ圖ル者

八 結黨

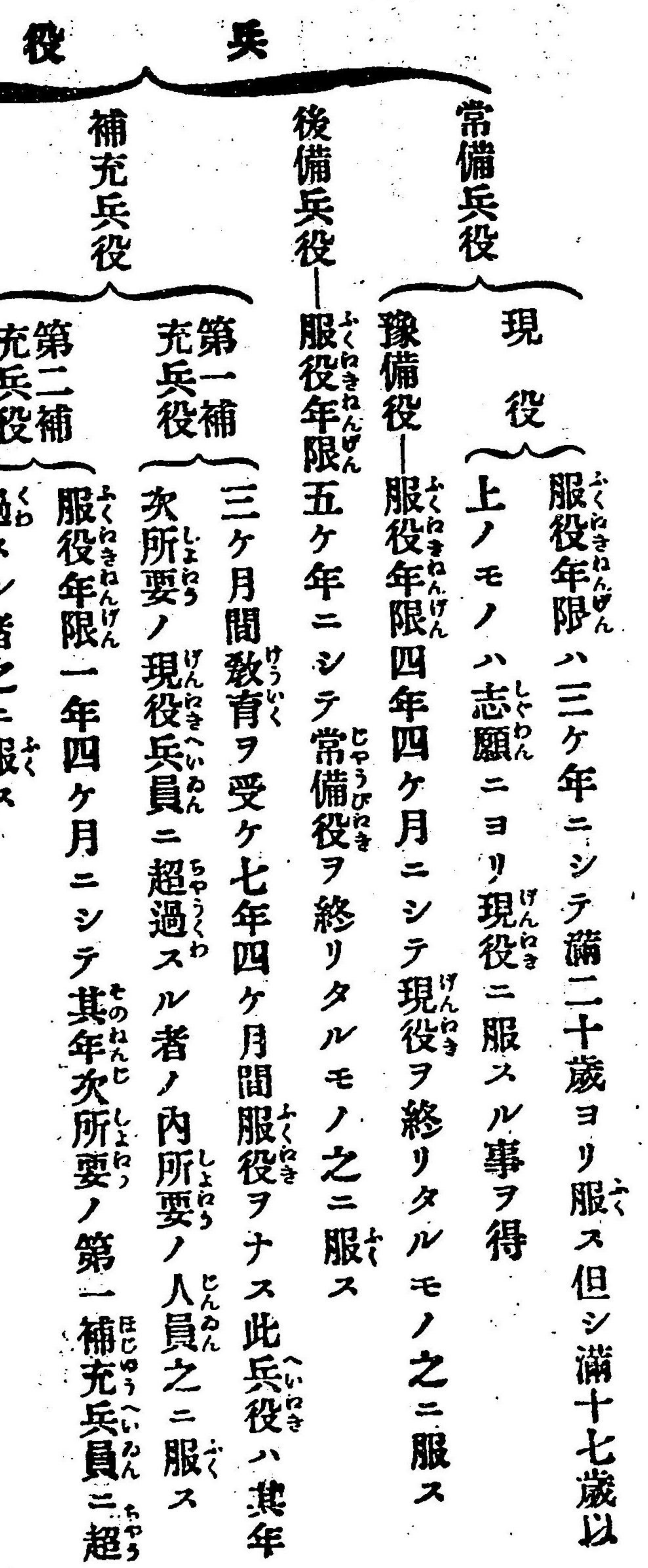
(一) 黨ヲ結ヒ軍事ニ關スル規則命令ノ施行ヲ妨ケ若クハ之ヲ妨ケント謀リ其他服從法ニ違フ者

一 右ノ外賭博強盜盜犯其他普通刑法ニ規定スル者ハ同法ニ由リ總テ重キニ從テ處斷ス

一 軍法會議護送中ハ日給ヲ半減シ處刑中日給ハ之レヲ給セラレサルモノトス

第九章 兵役ノ義務及服役年限

一大日本帝國ノ臣民ニシテ滿十七歲ヨリ滿四十歲迄ノ男子ハ總テ兵役ニ服スルノ義務アルモノトス



二 特別 戰時若クハ時變ニ際スル時ハ服役年限ヲ延期スルコトアリ

第十章 休暇

軍人ノ休暇ヲ分テ四トス

- 一定例休暇
- 二慰勞休暇
- 三褒賞休暇
- 四請願休暇

休暇

- 一定例休暇ハ下士以上ニ附與セラル、モノナリ
 - 二慰勞休暇ハ、特別ノ任務ニ服シ又ハ演習等ノ爲メ山野ヲ跋渉スル等其勞多キ者ニ賜フモノニシテ其日數ハ一日以上三日以内トス
 - 三褒賞休暇ハ、行狀方正勤務勉勵學術技藝ニ熟達シ他人ノ模範トナルヘキ者ニ賜フモノニシテ其日數ハ一ヶ月ニ一日トス
 - 四請願休暇ハ、臨時ニ許サル、モノニシテ即チ父母ノ重病又ハ死亡ノ爲メ歸郷ヲ要スルトキ等願ニ依リ許サル、モノトス其日數ハ往復ヲ除キ二週日間以内トス
- 請願休暇ハ止ムナキ事故ノ連續スル時ハ、數回之ヲ請願スルコト得

請願休暇ノ手續ハ父兄又ハ親族ノ願書ニ郡(村)長或ハ郡市長ノ與書及ヒ醫師ノ診斷書ヲ添へ所屬隊ニ願出ツ可シ

五兵卒休暇日數二日以上ニ涉ルトキハ、行狀方正勤務勉勵ナル者ニ限り所屬長官ヨリ

特ニ外泊ヲ許可セラル、コトアリ

六休暇ハ勤務繁劇ナルトキハ、許可セラレサルコトアリ

七休暇中動員ノ令下リシトキハ、急行シテ其所屬隊ニ復歸スヘシ

八褒賞休暇及ヒ慰勞休暇ヲ許サル、モノハ朝食後ヨリ日夕呼點前迄外出シ得ルモノトス

九休暇ヲ許サレタル者外宿歸省又ハ他行中ノ心得左ノ如シ

- (一) 特ニ品行態度ヲ慎ムヘキ事
- (二) 地方ノ法令ヲ遵守シ軍人ノ至ルマシキ場所ニ立寄ル可ラス
- (三) 歸郷中父母病氣又ハ死亡スト雖厄期日ニ至レハ必ス歸營スヘシ若シ出發ノ日ニ當リ父母死亡スルカ或ハ本人大病ニ罹リ事故止ムヲ得スニ在郷ヲ要スルトキハ相當

ノ手續ヲナス可シ

(四)自己ノ發病又ハ天災地變ニテ期日ニ歸營シ難キトキハ願書ニ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書並ニ郡(市)或ハ町(村)長ノ證明書ヲ添へ所屬隊ニ請願ス可シ但船又ハ汽車等ノ事變ナルトキハ其會社社長ノ證明書ヲ要ス

第十一章 射撃ニ關スル心得

其一 射撃一般ノ注意

一 射撃術ハ巧ニ敵兵ヲ殺傷スルヲ目的トシ兵卒ノ技術中是レヨリ最大切要ノモノナシ其精密ナルト否トハ直ニ戦闘ノ勝敗ニ關ス又射撃ニ熟練ナルハ戦闘ニ於テ精神ヲ沈着スルノ基因ニシテ自信力ヲ富マス是ヨリ大ナルハナシ
二 射撃ヲ行フニハ眼、心、指ノ三者一致スルニアラサレハ其宜シキヲ得可ラス而シテ此一致ハ數多ノ演習ヲ積マサレハ能ハサルモノナリト雖モ熱心ト精神ノ沈着トヲ以テ速成スルヲ得可シ

三 食指ヲ以テ引金ヲ壓シ發射スル方法拙劣ナル時ハ彈丸ハ命中セズ故ニ食指ノ使用及

ヒ力ノ與ヘ方ヲ豫行演習ニ於テ注意スルヲ要ス

其二 射撃ノ偏避

一 射撃偏避ヲ起ス諸種ノ原因左ノ如シ

第一 射手の感及

一 反動ニ抵抗セントスルヨリ生スル肩突引金ノ劇壓照準ノ過長ヨリ生スル視力及臂ノ疲勞等ハ偏避ヲ生スル重ナル原因ナリ故ニ兵卒ハ絶ヘス豫行演習ニ依テ習熟シ己レ自ラ矯正スルヲ勉ム可シ

二 照星ヲ過高ニ見出ス片ハ彈着高ク過低ニ見出ストキハ彈着底ク又照星右或ハ左方ニ偏スルトキハ彈着モ亦右或ハ左方ニ偏ス故ニ照星ハ必ス平星ニ見出ス可シ

三 銃ヲ右ニ傾クルトキハ彈着ハ右下ニ偏シ左ニ傾クルトキハ左下ニ偏ス

四 床尾飯ヲ肩ニ支ユルノ確實ナラサルタメ、姿勢ノ不良ナルタメ、又偏避ヲ生ス

第二 天候の感及

一 風ノ前方ヨリ吹クトキハ彈着ヲ下方ニ後方ヨリスルトキハ上方ニ偏シ右方ヨリ吹ケ

ハ彈着左方ニ左方ヨリスレハ右方ニ偏シ斜風ハ射距離及方向ヲ偏移ス
二天候濕暖ナルカ又濕氣アル時ハ空氣輕クシテ彈着上方ニ偏シ寒冷ナルカ又雨雪天
ノ時ハ空氣重クシテ彈着下方ニ偏ス

三曇天曉暮等總テ照星ヲ視ルニ明瞭ナラサルトキハ勢ヒ過高ニ見出スヲ以テ彈着ヲ高
カラシム

四太陽ノ光線上方ヨリ輝照スルトキハ照星膨大ニ視ユルヲ以テ彈着下方ニ偏シ右ヨ
リ輝照セハ右方膨大ニ視ユルヲ以テ照星ヲ左ニ偏移スルカ爲メ左ニ偏シ左ヨリ照セ
ハ右ニ偏ス

第三 修正

一銃ノ構造上ヨリ來ル偏避ト彼是綜合シ彈丸ノ到着點ヲ考ヘ照準點ヲ決定シ射撃ス
ベシ

其二 獨立射撃ノ限界

一銃ノ用法適當ナル時ハ目標ノ大小及射距離ニ關シ獨立射撃ノ効力アル目標ノ最小限

界左ノ如シ

- 一、二百米突以内ニ在リテハ頭首ヲ顯ハシタル單獨兵
- 二、三百米突以内ニ在リテハ伏姿單獨兵
- 三、四百米突以内ニ在リテハ膝姿單獨兵
- 四、五百米突以内ニ在リテハ密集セル二人膝姿兵
- 五、六百米突以内ニ在リテハ密集セル二人立姿兵及單獨騎兵

其四 三十年式歩兵銃ノ性能

一三十年式歩兵銃ハ連發銃ニシテ其彈丸ノ速力及侵徹力ノ大ナルト其火藥ノ微煙ナル
トニ依リテ卓絶ナル威力ヲ有ス
二重量及尺度

銃ノ全長 劍ヲ除ク一米突二七五(四尺二寸一分弱)
銃劍ヲ加ヘ一米突六六五(五尺四寸九分強)

銃ノ重量 銃剣ヲ除キ彈倉空虛

一貫二十六匁目(三吉瓦八五〇)

三初速ハ銃口前二十五米突ニ於テ六百七十八米突トス

四最大射距離概テ四千米突

五六百米突以下ノ距離ニ於ケル彈丸ノ侵徹力ハ物質ニ應シ距離ノ増減スルニ隨ヒ左ノ如ク増減ス

尋常ノ積土ハ 一米二十乃至〇米七十珊知

砂 〇米六十乃至〇米三十珊知

松ノ乾燥セサルモノ 〇米八十五乃至〇米三十五珊知

松ノ乾燥セル材木 一米十乃至〇米四十珊知

踏固セル雪 一米九十乃至〇米七十五珊知

煉瓦壁 四百米突以内ニテ四珊知五密理乃至二珊知二密理

厚テ五密理ノ鐵板ハ七密理乃至十三密理米突ノ凹痕ヲ生ス

其五 射擊演習ニ關スル心得

一射擊演習ヲ區分シテ教練射擊、戰鬥射擊、證明射擊トス其他檢閲射擊名譽射擊ナル

モノアリ

第一 教練射擊

一教練射擊ハ兵卒ヲシテ射擊ニ熟達セシメ且ツ之ヲ維持スルニ在リテ諸種ノ標的ニ對シ行フモノナリ

二教練射擊ハ一、二等射手ニ於テハ十一習會三等射手ニ在リテハ十四習會アリテ其内

最初ノ數習會ハ基本射擊トス

三基本射擊ハ射手ヲシテ射擊術ノ初步ヲ近キ距離ニ於テ練習セシメ尙ホ嚴ニ諸規則ヲ

遵奉シ精密ニ射擊セシムルニ在リ

四兵卒一年度ニ於テ各種射擊ニ使用スヘキ彈藥ハ百二十五發トス

(二) 射手ノ等級

一初年兵及未熟ナル射手ハ悉ク三等射手トス三等射手ノ各習會ニ合格シタル者ヲ二等

射手ニ二等射手ノ合格シタル者ヲ一等射手ニ昇級セシム
二連續ニケ年間一等射手ノ各習會ニ合格セル者ヲ特別射手トス

(二) 射撃場ノ心得

一 射手ノ軍紀ヲ維持シ不慮ノ災害ヲ豫防スルタメ左ノ條件ヲ嚴守スヘシ
一 射撃中「打方止メ」又「打方待テ」ノ號令若クハ記號アル時ハ直ニ射撃ヲ中止ス可
キコト

二 凡テ喧噪ニ涉ル所爲ハ射撃場ニ於テ嚴禁トス故ニ射場ヨリ監的手ニ音響ヲ以テ交
通スルヲ禁ス

三 裝填セル銃ハ手ヨリ離ス可ラス

四 射撃ヲ終リタル時ハ銃及彈藥盒ヲ其長ノ検査ヲ受ケ打殘ノ彈藥及不發彈ハ射撃掛
ニ返却シ退場スルモノトス

五 射撃場ニ於テ妄リニ照準ノ演習ヲナス可ラス

六 射場ト監的壕トノ交通ハ特別ニ設ケアル通路ニ由ルカ又タ一時射撃中止ノ時ニ於
テスルモノトス

テスルモノトス

第二 戰團射撃

一 戰團射撃ハ各個戰團射撃及部隊戰團射撃ノ二種トス

二 各個戰團射撃ハ實戰ニ近キ方法ニヨリ施行スルヲ以テ射手ハ教練射撃距離測量等ニ
於ケル要領及獨立射撃ノ限界ヲ應用シ能ク地物ヲ利用シテ銃ノ用法ニ熟練シ獨立射
撃ノ演習ヲ完成スルニアリ

三 射手ハ距離ヲ測定シ射撃ノ効力ヲ判斷シ所用照尺及照準點ヲ報告シ教官ノ指示
ヲ待テ射撃ス

四 部隊戰團射撃ハ實際ノ戰團ニ模擬シテ行フモノニシテ其目的ハ幹部及兵卒ヲシテ射
撃ノ指揮及軍紀ニ慣熟セシムルニアリ

第三 證明射撃並ニ檢閲射撃及名譽射撃

一 證明射撃トハ銃ノ彈道及諸効力等實際ニ就テ證明シ以テ銃ノ用法ヲ了解セシムルニ
アリ

二 檢閲射撃トハ幹部ノ射撃指揮ニ關スル注意ノ適否兵卒ノ射撃動作ニ於ケル熟達ノ程度ヲ師團長若クハ旅團長檢閲セラル、モノナリ

三名譽射撃ハ、中隊ノ射撃教育ヲ獎勵シ且ツ教練射撃ニ於ル熟達ノ程度ヲ檢知スル爲行ハル、モノナリ而シテ師團内ニ於テ名譽射撃ノ成績最優等ノ中隊ニハ、名譽旗ヲ交付セラレ休暇ヲ賜ハル此章標ハ次年ノ名譽射撃期日迄所有スルモノトス

第二編

第一章 距離測量

一 凡ソ戦闘ニ於テ勝ヲ制スルハ射撃ノ精確ニアリ射撃ノ精確ハ距離測量ノ精密ニ依テ之ヲ得ベシ故ニ距離ヲ誤リタル射撃ハ數多ノ彈丸ヲ費スモ更ニ其効ナシ是レ距離測量ノ最モ大切ナル所以ナリ

二 單筒ナル距離測量ニ三種アリ步測、目測、音響測量トス

三 稱呼ヲ便ニスルタメ六百米突以内ヲ近距離六百米突ヨリ千米突迄ヲ中距離千米突以上ヲ遠距離ト云フ

四 兵卒ハ六百米突以内ハ精確ニ測量シ又千米突迄モ測量シ得ザル可ラズ目測ハ自己視力ノ強弱ヲ斟酌セザル可ラズ

其一 步測法

一步測トハ一地點ヨリ他ノ地點迄ヲ步ヲ以テ測ルノ法ニシテ之ヲ行フ前ニハ各自百米

突十米突一米突ヲ幾歩ニ陷ムカラ熟知シ而ノ自ラ歩測シテ其歩數(歩數ハ複歩ヲ用ユルヲ良トス複歩トハ二歩)ヲ米突數ニ換算スルニアリ

二注意ス可キハ歩長ノ常ニ一定ナルト兩測點ヲ直進スルニアリ而シテ凹凸甚シキ土地ハ歩測ノ誤差多キモノト知ル可シ

其二 目測法

- 一、目測ニ熟達セザレバ如何ニ良好ナル射手ト雖、戰場ニ於テ其効力ヲ充分ニ顯ハスヲ能ハザルナリ
- 二、目測トハ物體ノ現象ニ依テ距離ヲ測定スルヲ云フ、而シテ目前ノ某距離ヲ豫知スル時又ハ已知距離ヲ目標距離ニ比較シテ測定スルモノナリ
- 三、通常二百米突ニ於テハ相貌ヲ判別スルヲ難ク顔ハ白色ナル平面ノ如シ四百米突ニ於テハ已ニ顔面ヲ視ルヲ得ズト雖モ兩臂ハ尙之ヲ認ムルヲ得
- 四、目測ハ土地ノ形狀天候及時刻ニヨリ差異ヲ生スルヲ左ノ如シ

近ク目測スル場合

- 一、太陽ヲ背ニスルトキ
- 二、上ヨリ下ヲ見ル場合
- 三、天氣晴朗ナルトキ
- 四、目標ノ背後明瞭ナルトキ
- 五、中間ニ斷絶地アルトキ
- 六、平坦地、水面、明瞭ナル遠隔物アル場合
- 七、波狀地
- 八、敵兵身體ノ大部ヲ見得ルトキ

其二 音響測量

- 一、音響ハ一秒時間ニ大約三百三十三米突ヲ經過ス即チ三秒時間ニ千米突ヲ經過ス
- 二、音響ヲ測量スルニハ銃砲ノ硝烟又ハ發火ヲ視テ其音響ノ耳朶ニ達スル迄ノ時間ヲ測

遠ク目測スル場合

- 一、炎暑及太陽ニ面スルトキ
- 二、下方ヨリ上方ヲ見ル場合
- 三、曇天ノトキ
- 四、狹長ナル土地及森林内
- 五、目標ノ背後暗黒ナルトキ
- 六、濃霧、曉方、暮方
- 七、一部ノミ見ユル敵兵

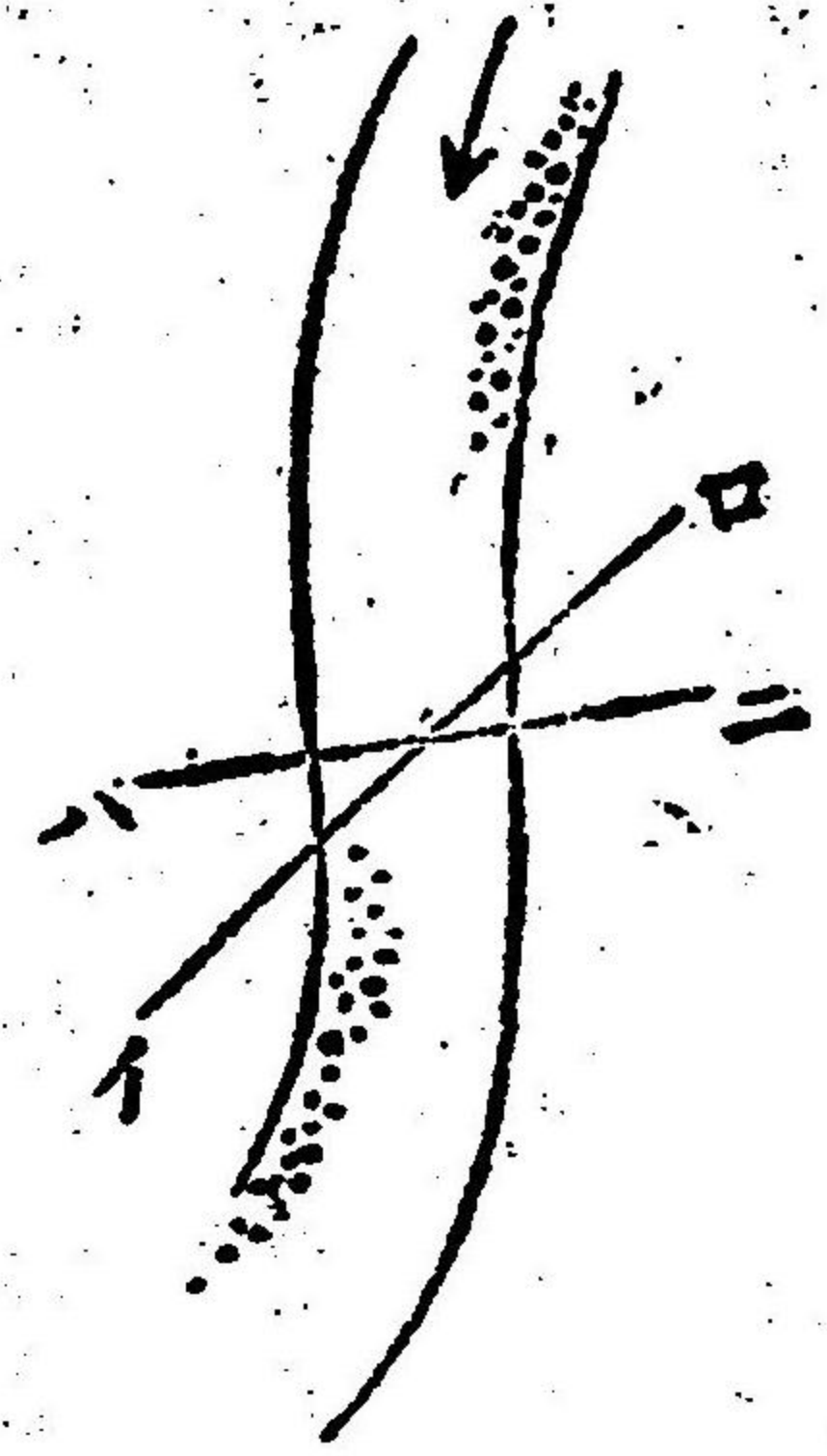
リ以テ距離ヲ知ルナリ
 三此時間ヲ計ルニハ三秒時間ヲ正シク一ヨリ十節調ニ口誦シ以テ各數ノ節調一定ナル
 如ク習熟スルヲ要ス而シテ此口誦ノ一節ハ百米突ヲ飛走スル時間ニ應ズルモノトス
 例之ヘハ今敵ノ硝煙若クハ發火ヲ視ルキハ直ニ口誦一、二、三……ト調ベ始メ五
 ノ終リニ於テ音響ヲ聞クキハ敵ハ我ヲ距ル五百米突ナルヲ知ルナリ
 四此測法ハ夜間或ハ地物ニ掩蔽スル敵兵迄ノ距離ヲ測ルニ便ナリ

第二章 地形ノ識別

- 一兵卒ハ左ニ記スル地區地物ノ名稱及ヒ性質ヲ了知スヘシ
- 一蔭蔽地 樹木又ハ家屋ヲ以テ通視ヲ妨グル土地ヲ云フ
- 一開濶地(敞開地) 遠ク展望シ得ル土地ヲ云フ
- 一平坦地 凹凸ナク土地ノ傾斜極メテ少キ地表ヲ云フ
- 一不齊地 凹凸高低アリテ波狀ヲナス土地ヲ云フ
- 一平原 トハ敞開シタル廣キ原ヲ云フ

高地ノ部

- 一高地 總テ土地ノ廣ク隆起セル地部ヲ云フ
- 一臺 トハ山頂ニアル廣キ平地ヲ云フ
- 一丘阜 土地ノ孤立シテ突起セシモノヲ云フ
- 一堆土 トハ小サクシテ高クナリタル土地ヲ云フ
- 一防界線 巔頂ト斜面トノ交截線ヲ云フ
- 一鞍部(峠) ニツノ山カ中腹相接スル所ヲ云フ
- 一麓 山又ハ高地ノ基脚ヲ云フ
- 一谷 トハ高地ト高地トノ間ニアル低キ土地ヲ云フ
- 一河川 水ノ高キヨリ低キニ流ル、者ヲ云フ
- 一河口 河川ノ海湖等ニ注ク口ヲ云フ
- 一右岸左岸 下流ニ面シ其右ヲ右岸左ヲ左岸ト云フ
- 一淺瀨 河水ノ淺キ所ヲ云フ淺瀨ハ河幅廣ク或ハ左圖ノ如ク彎曲部ニシテ兩岸ニ細徑通ズルヲ以テ之レヲ知ルヘシ



「イロ」或ハ「ハニ」ノ方向ハ通常淺瀬ナルモノナリ
一渡渉場 深サ八十珊知米突以下ニシテ徒涉シ得
可キ淺瀬ヲ云フ

一渡船場 渡船或ハ筏ヲ以テ渡河スル所ヲ云フ

一堤防 水ノ溢流ヲ防クタメ海岸或ハ河川ノ兩側ニ築キタル土堤ナリ

一橋梁 トハ橋ノコトニシテ鐵橋、石橋、木橋、土橋、舟橋等アリ

一森林 樹木ノアル地ヲ云フ樹木ノ種類ニ由テ鍼葉樹林、潤葉樹林アリ

一並樹 道路ノ兩側或ハ一側ニ樹木ノ列植セル者ヲ云フ

一獨立樹 獨立セル大ナル樹木ヲ云フ

一抽出樹 森林中ノ抽出タル樹木ヲ抽出樹ト云フ

一林縁 トハ森林ノ邊緣ヲ云フ

一市街 人家密集集團シ繁華ナル所ヲ云フ

一村 農家ノ集團シタル所ヲ云フ

部ノ林部

開ニ屋家

部ノ路

一集團家屋 家屋ノ數軒集リタルモノヲ云フ

一獨立家屋 一軒屋ヲ云フ

一凹道(鑿開道) 高地等ヲ切り開キテ設ケタル道路ニシテ左右ノ地ヨリ低キ者ヲ云フ

一凸道(築堆道) 土塊ヲ積堆シタル道路ニシテ左右ノ地ヲ瞰下スル者ヲ云フ假令ハ堤道ノ如シ

一墜道(トンネル) 高地ヲ穿チ貫キタル道路ヲ云フ

一隘路 狹少ノ正面ニ非レハ通過シ得サル道路ヲ云フ例ハ橋梁水田間ノ道路等ノ如シ

一街道 市街或ハ名邑ヲ連絡スル道路ノ名ヲ云フ假令ハ佐倉街道、青梅街道等ノ如シ

一小徑 歩兵ニ非レハ通過シ得サル道路ヲ云フ

一道路ノ交叉點 數條ノ道路會合シテ交叉スル地點ヲ云フ其ノ交叉ノ形狀ニ依

部ノ路

部ノ路

部ノ路

雜部

- リ十字路(+)三叉路(人)丁字路(丁)五叉路(X)ト云フ
- 一水田 トハ田ノ泥土深クシテ四季水アルモノヲ云フ
- 一陸田 トハ季節ニヨリテ水アルモ跋涉シ得ル田ヲ云フ
- 一生籬 トハ植ヘ列ヘタル竹又ハ樹木ノ垣ヲ云フ

第二章 方位ノ考察

一方位ノ考察ハ極メテ必要ナルモノニシテ未タ知ラサルノ土地ニ於テ方向ヲ知リ又夜間ニ於テモ迷フ事ナク且ツ報告ヲナスニ便利ナルモノナリ

二方位考察ノ方法ハ左ノ五種トス

(一)磁石—之ヲ水平ニ持テ其青色ノ針端ハ常ニ北ヲ示スモノナリ

一短針ヲ太陽ニ正對セシム然ル時ハ短針トXII字ノ圓分中央點ノ方向ハ南方

ナリ

(二)時計

二垂直ナル物體ノ影ト時計ノ短針ノ影トヲ一致スル如クシ時計ヲ水平ニ保持ス此時短針ト十二字ナル文字トノ間ヲ等分シタル線ヲ引延シタルモノ

ハ北ナリ

(三)太陽

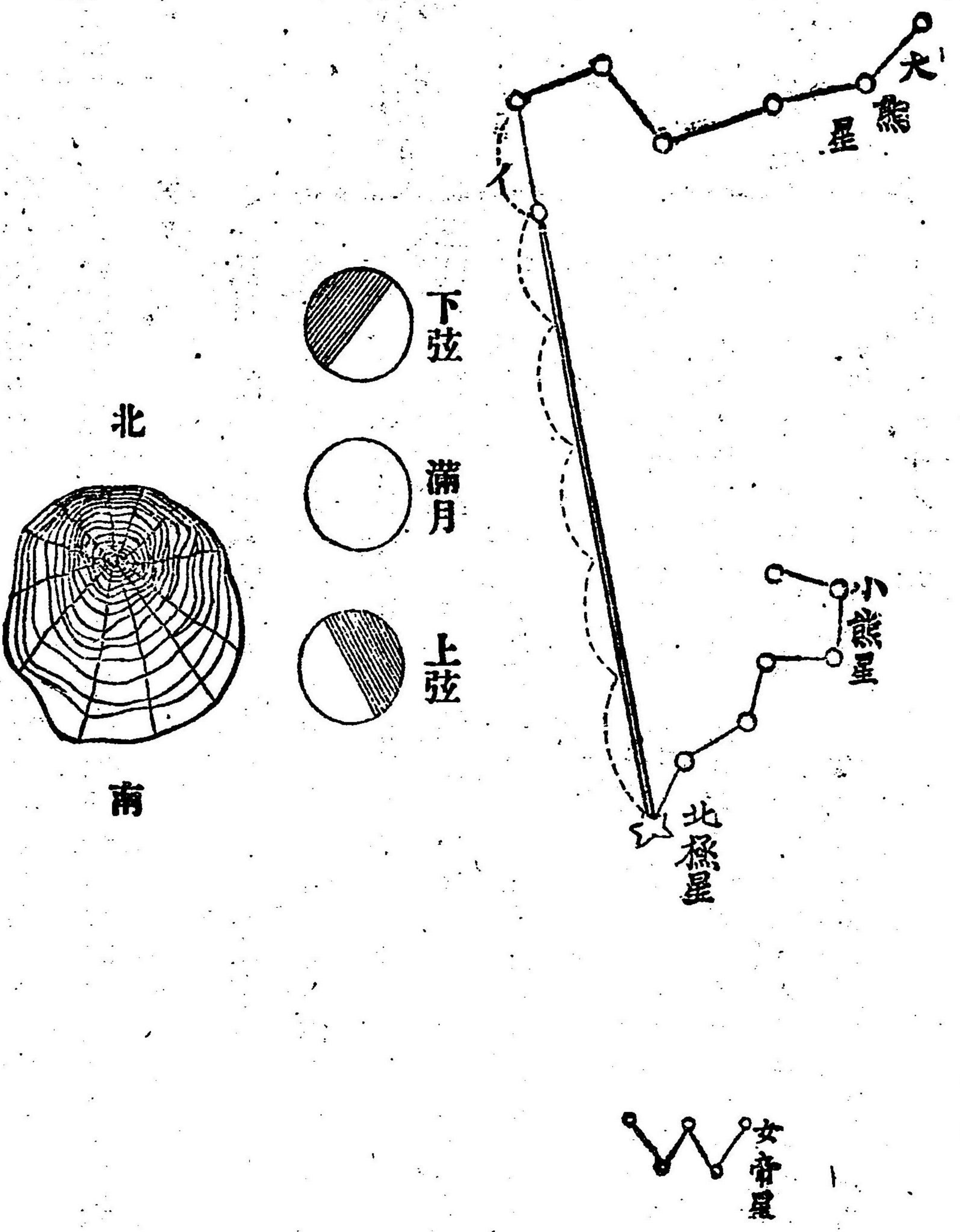
- 一正午太陽ヲ後ニシテ立ツトキハ其影ハ北方ニ寫ルモノナリ
- 二午前六時頃東ニ同九時頃東南ニ正午南ニ午後三時頃西南ニ午後六時頃西ニアリ

(四)四月、北極星

- 一滿月ノ時ハ午前六時西ニ夜半ハ南午後六時東ニアリ
- 二上弦(半月右上缺)ノ時ハ午後六時ニ南ニ夜半西ニアリ下弦(半月左下缺)ニハ夜半ニ東方午前六時南ニアリ
- 三晴朝ノ夜大熊星、女帝星ニ注目スルキハ、左圖(イ)ノ線上(イ)ノ五倍ノ處ニ一ノ小星ヲ見ルヘシ之レ北極星ニシテ常ニ北方ニ位置スルモノナリ

(五)木理及樹枝

- 一樹木又ハ道標等ノ如キモノニ苔類ノ萌生セル方向ハ通常北ナリ
- 一木(下圖)ノ切口疎ナル方ハ南ニシテ密ナル方ハ北ナリ
- 一其地方ノ恒風(多ク吹ク風)ヲ知ル時ハ樹木ノ枝葉ノ屈曲ニヨリ方位ヲ知ルヲ得ヘシ又海岸ニアル樹木ハ悉ク海ニ反對スル方向ニ枝ノ屈曲スルモノナリ



第四章

徵候

(状況ヲ察スルノ出来ル徵ナリ)

- 一 諸種ノ徵候ハ敵ノ遠近ト其狀況トヲ察知スルヲ得ルモノニシテ兵卒ハ事ニ觸レ物ニ當リテ速カニ判斷スルヲ要ス
- 二 徵候ハ自然ニ發生スルモノト敵兵我ヲ欺ク爲ニ殊更ニナスモノトヲ區別シテ深ク考察スルヲ要ス
- 三 塵烟ノ飛揚スルハ通常行軍縱隊ノ行進ヨリ起ルモノニシテ其塵埃ノ濃クシテ低キハ步兵淡クシテ高キハ騎兵最モ濃クシテ且ツ斷絶スルハ砲兵ナリ
- 四 車輛ノ響馬匹ノ嘶鳴犬ノ烈シキ吠聲等ハ軍隊通過ノ徵ナリ
- 五 人跡ノ蹄痕、車轍ハ敵ノ多寡兵種隊形行進方向ヲ察知スルヲ得
- 六 太陽ノ光輝行軍縱隊ノ武器ヲ射テ其反射赫灼スル片ハ概テ我ニ向テ進軍ノ徵ナリ之レニ反シテ明滅異同アルハ退軍ノ徵ナリ
- 七 夜間ニ在テハ燎火及其員數ハ以テ敵ノ景況ヲ察ス可キ徵候トス
- 八 敵兵ノ撤去セシ露營ノ跡ヲ觀察スル片ハ此所ニ露營セシ兵隊ノ多寡及士氣上ノ景況

如何ヲ知ルヲ得可シ然レモ敵兵退却ノ夜ノ如キハ殊更ニ露營火ヲ増ス事アルニ注意スヘシ

九河岸ノ一部ニ船舶及材木ヲ集ムルハ渡河ヲ計ルノ徵ニシテ之ヲ燒棄シ或ハ橋梁ヲ破壊スルハ退軍ノ徵ナリ

十敵地ニ於テ土民ニ憂懼ノ狀アルハ敵兵遠キ徵ニシテ土民ニ不遜ノ情態アルハ敵兵其近傍ニアルカ或ハ潜伏スルヲ證スルニ足ル

十一土民ノ容易ニ我カ尋問ニ應スルモノハ欺騙(アサムク)スルナリ故ニ數人ニ問ヒ其答同一ニ非レハ決シテ信用ス可ラス又土人ノ頻リニ談話ヲ試ミルハ間牒ノ徵ナリ慎マサル可ラス

十二居民ノ家財ヲ運フニ忙ハシク或ハ婦女老幼ノ他ニ逃避スルハ戰鬪ノ期近キシ徵ナリ然レモ又敵ハ訛傳流言ヲナスヲ屢々アリ

第五章 行軍

一行軍トハ軍隊ノ一地ヨリ他ノ地ニ轉スル爲運動スルヲ云フ

二戰地ニ於テ兵卒其勞力ノ多分ハ常ニ之ヲ行軍ニ消費ス而シテ其行軍力ノ強弱ハ勝敗ニ關スル極メテ大ナルモノナリ故ニ兵卒ハ能ク衛生ヲ守リ戰鬪ヲ交ヘスシテ途中ニ倒ル、ガ如キコトアルヘカラス

其一 行軍ノ種類

- 一 旅次行軍 全ク敵ニ出會スルノ虞ナキ時ニ行フモノナリ
- 二 戰備行軍 敵ニ衝突ス可キ虞アル片警戒ヲ嚴ニシ戰鬪ノ準備ヲナシ行進スルヲ云フ
- 三 夜行軍 急行ヲ要シ又ハ行軍ヲ秘スル片若シクハ炎熱ノ時ニ於テ夜間行進スルヲ云フ

其二 行軍ノ心得

- 一 行軍中ハ嚴格ニ行軍軍紀ヲ守リ正シク被服裝具ヲ装着シ且專ラ衛生ニ注意スルヲ要ス 衛生ノ不注意又ハ靴傷ヨリ生スル減員ノ多少ハ軍隊ノ價值ニ關係ス
- 二 出發後途歩ノ號令アレハ步調ヲ取ルヲ要セス別ニ命ナキ片ハ談話シ唱歌シ喫烟スル

ヲ得可シ銃ハ隨意ニ右肩左肩ニ擔ヒ或ハ負革ヲ以テ肩ニ懸ル事ヲ得ルモ他人ノ妨害トナラサル様注意スヘシ

三市街ヲ通過スル時ハ號令ナキモ必ス姿勢ヲ正シ談話唱歌喫煙ヲ爲スヘカラス

四廣キ街道ニ在テハ常ニ其ノ一側ヲ空フシ他隊ノ通過ニ供ス可ク狹キ道路ニ在テモ尙

未傳令騎兵等ノ通過ニ妨ケナキヲ要ス

五兵卒ハ勉メテ前後ニ重疊シ定規ノ距離ヲ取り左右ニ擴張ス可ラス

六各個人恣ニ服裝ヲ紊スヲ禁ス時トシテ襟ヲ開キ或ハ帽子ノ紐ヲ上クルヲ許サル、

一アサ

七兵卒已ムヲ得サルコトアリテ其列ヲ離レント欲スルハ小隊長ノ許可ヲ得テ其銃ヲ戰

友ニ托シ事終ラハ直チニ舊位ニ復ス可シ

八行軍スルタメ最モ緊要ナルハ脚力ノ強健ニアリ靴傷ヲ豫防スルノ注意ハ行軍スル歩

兵ノ一大要事トス故ニ左ノ注意ヲ怠ルヘカラス

(一) 足痛ヲ感スルハ勿論未ダ之ヲ感セサルモ靴ト相摩擦スルコト甚シキ部分ニハ必

ス塗脂スルヲ良トス

(二) 休憩ノ片時機妨ケナキ片ハ冷水ニテ足ヲ洗フ可シ但シ水氣ヲ存シテ靴ヲ穿ツヲ

禁ス

(三) 靴下ハ皺ノ生セサルヲ要ス又タ靴ノ内部ニ砂礫等ノ入りタルトキハ速ニ除去ス

可シ

(四) 出發前靴ニ油ヲ塗ルヘシ而シテ靴ハ足ニ適合シ且ツ其革ノ強硬ナラサルヲ良シ

トス故ニ雨雪天ノ片穿用シタル場合ニハ其水氣將ニ乾カントスル片其ノ靴ニ塗脂

スルヲ良シトス又舍營地到着ノ後チ靴ヲ乾カスニハ其内部ニ藁又ハ糞ヲ填充シ置

ク可シ然ル片ハ乾キタル時ト雖モ靴其形ヲ失セス且ツ強硬ナラサルモノトス

(五) 行軍ニ際シ靴ノタメニ足部ニ水泡ヲ生スルノ憂アルモノハ出發前足ヲ清潔ニシ

脂油類ヲ塗り若シ水泡ノ生シタルトキハ投宿ノ後細針ヲ以テ水泡ヲ破リ其皮ノ剝

ケサル如ク充分水液ヲ絞り後チ煙草ノ吸殻ヲ飯糊ニ混シテ紙ニ塗りタルヲ貼付ス

可シ然レモ患部大ナルトキハ診斷ヲ受ク可シ

(六) 演習又ハ行軍等ニテ發汗セシトキハ暫時休憩ノ後チ被服ヲ交換シ全身ヲ拭フ可シ決シテ熱氣ニ任セテ俄カニ衣ヲ脱シ冷風ニ觸ル、可ラス

(七) 冬期寒風ニ吹カレ凍冷ノ際直ニ温室ニ入り若クハ烈火ニ當ル等ハ宜シカラス必ス運動ヲナシ身體ノ温ルヲ待ツヘシ殊ニ手足耳足先ヲ摩擦シ凍傷ニ罹ラサル様注意スヘシ

(八) 降雨又ハ河川徒涉等ノ爲メ全身濕潤セシ時ハ決シテ停止又ハ假眼等ヲナスコナク勉メテ身體ヲ運動ス可シ

(九) 行軍中渴ヲ潤サンニハ休止ノ時或ハ行軍ヲ妨クルコナク水筒ノ湯又ハ茶ヲ飲用スヘシ決シテ生水ヲ飲ムヘカラス

(十) 休止セル片其近傍ニ良水アレハ面部及ヒ手ヲ洗ヒ口ヲ嗽キ鼻腔ヲ洗淨スヘシ

其二 行軍警戒勤務

一 戰備行軍ノ警戒法ハ前進ニ前衛退却ニ後衛ヲ備ヘ又要スル片ハ別ニ側衛ヲ以テ側面ヲ掩護ス

第一 前衛

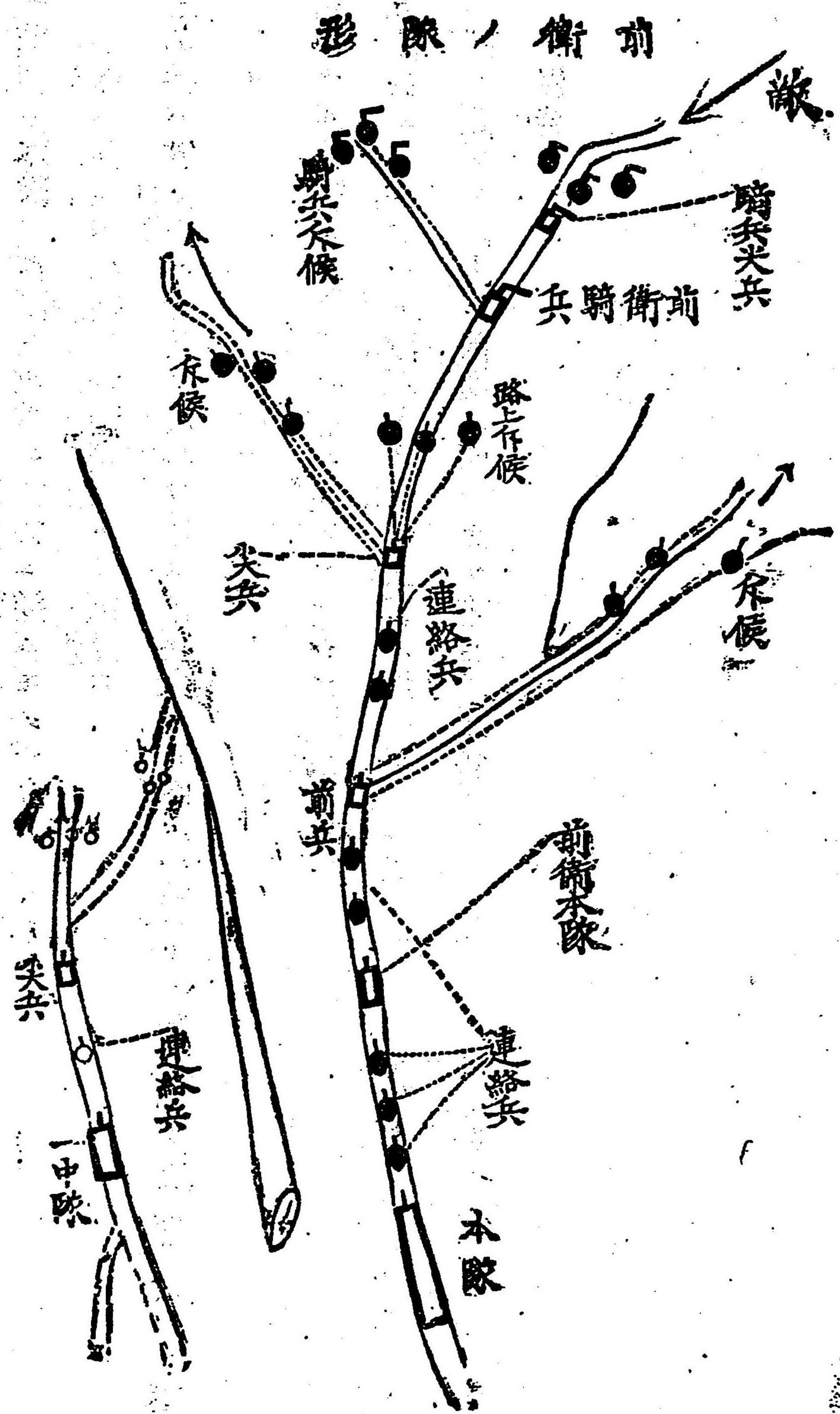
一 前衛ハ本隊ヲ掩護スル爲ニ前方ニ進ムモノナリ

二 前衛ハ前衛本隊前兵前衛騎兵トニ區分ス

三 前兵ハ其前方ニ歩兵ノ尖兵ヲ出ス前兵大ナル時ハ尖兵トノ間ニ前兵支部ヲ設クル事アリ

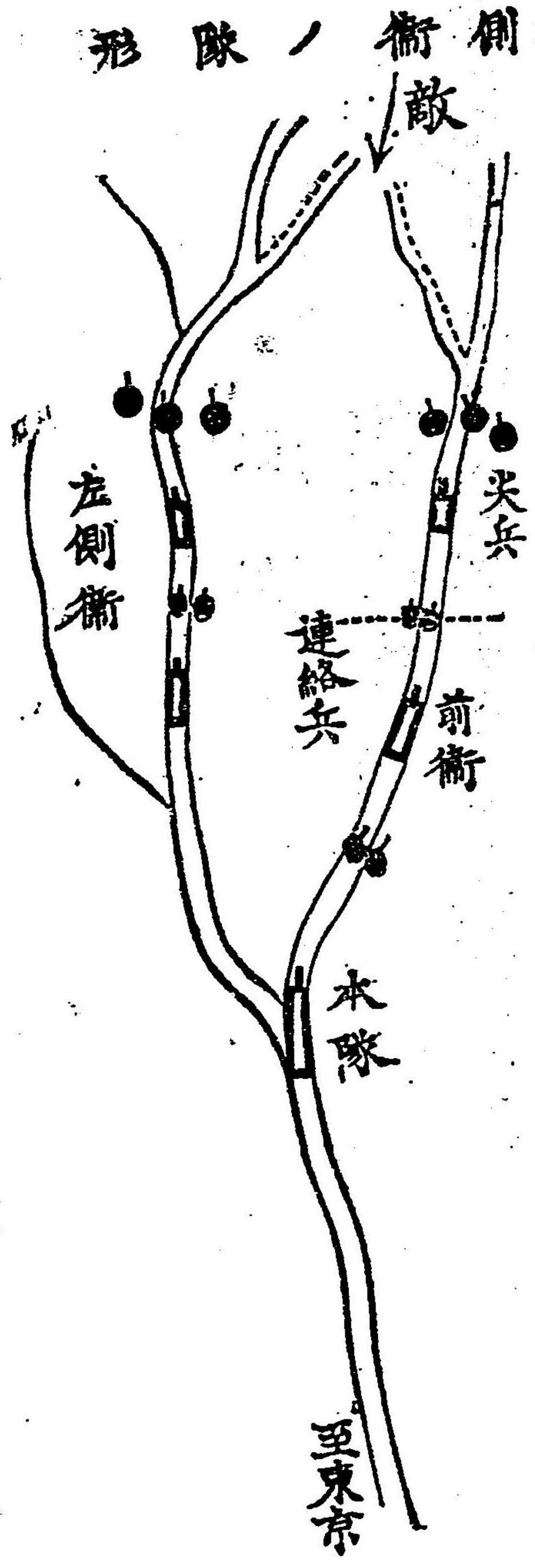
四 小ナル部隊ニアリテハ直ニ尖兵ヲ出シテ警戒ス

五 歩兵ノ尖兵ハ一分隊以上ノ兵ヲ士官ノ指揮ニ屬シ以テ若干ノ抵抗力ヲ備ヘ前兵ト距離ヲ距テ、敵方ニ前進ス而シテ後方ニ二三名ノ兵卒ヲ前兵トノ中間ニ置キ之ト連絡ヲ保持セシム



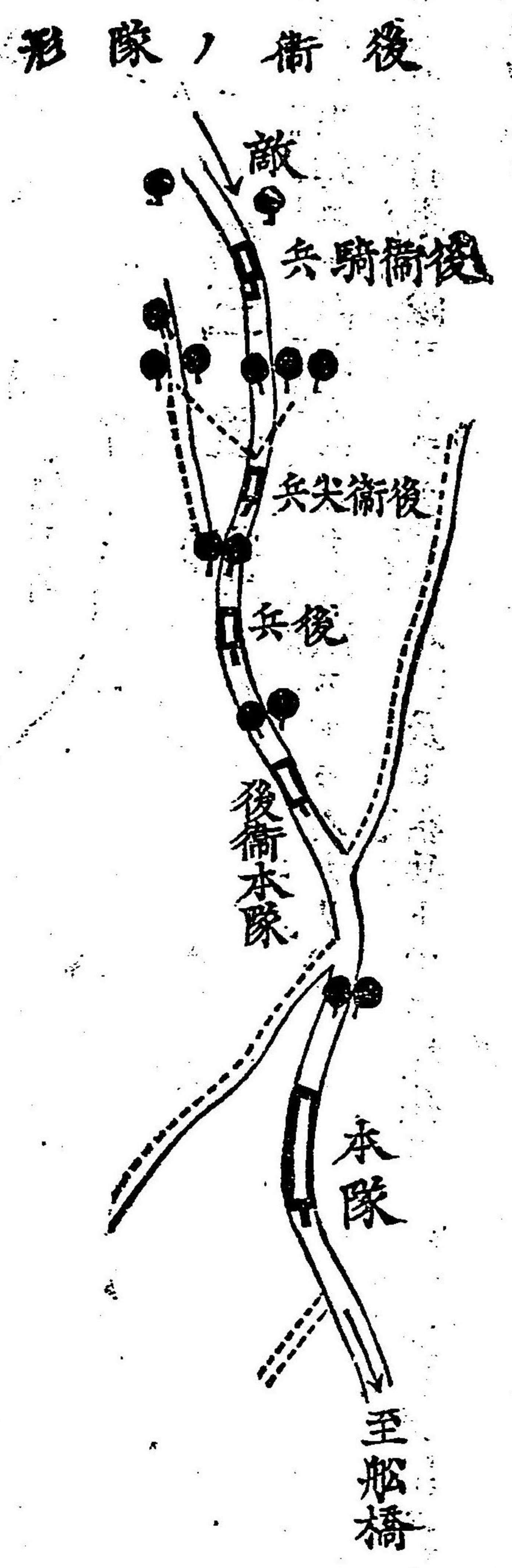
第二側衛

一側衛ハ本隊ノ側面ヲ掩護スルタメ出スモノナリ



第三後衛

一後衛ハ退却スル際敵方ニ在テ警戒スルモノナリ
二後衛ハ其行軍縦隊ヲ分チテ後衛本隊及ヒ後兵トナス後兵ヨリ後衛尖兵ヲ出ス又後衛騎兵ヲ置ク



第四 斥候

甲 行軍斥候一般ノ心得

一斤候ノ任務ハ、敵情或ハ地形等ヲ搜索シテ報告スルニ在リ

二斤候ハ軍ノ耳目トナルヘキモノナレハ其働キノ如何ニ依リテ勝敗ノ分ル、モノニシテ戰時兵卒ノ業務中責任ノ重キモノナリ、從テ其功積亦著大ナリトス故ニ決シテ忽ニナスヘカラス

三斤候ハ通常三名ニシテ内一名ハ其長トナル又下士斥候將校斥候ノ區別アリ

四斤候ハ其長ノ運動ニ從ヒ決シテ連絡ヲ絶ヘカラス

五斤候ノ搜索(サカスコト)區域取ル可キ道路等ハ命令ノ趣旨ニ從フモノトス

六戰備行軍ニ用ユル斥候ニ二種アリ一ハ駐止シ一ハ行動ス

(一) 駐止スル斥候ハ例之ハ行進路ノ側方ニアル要點(隘路橋梁渡船場等)ヲ本軍ノ此點ト齊頭面ヲ通過シ終ル迄監視セシムルヲ要スル時等ニ用ユルモノニシテ此斥候任務終レハ原隊ニ復歸スルモノトス

(二) 行動スル斥候ハ本隊(自己ノ屬スル隊)ノ前方若クハ側方ヲ搜索シツ、行進スルモノニシテ其運動ハ迅速ナラサルヘカラス

(三) 側方ニ出サレタル右側或ハ左側斥候ハ常ニ本道ノ斥候ニ連絡シ勉メテ廣ク密ニ搜索スルヲ要ス

七斤候ニ必要ナル性質ハ慧敏ト熱心ト沈着ト剛膽ナリ

慧敏ナルモノハ未タ知ラサル地ニ於テ能ク其地形方位及通路ヲ知リ熱心ナルモノハ

久シキニ堪ヘ勞ヲ覺ヘス沈着及剛膽ナルモノハ不意ノ事ニ驚カス如何ナル危険ニ際スルモ尚ホ能ク脱逸ノ方法ヲ求メ得ル者ナリ

八斥候長ハ其任務ヲ確實且ツ明瞭ニ知ルヲ要ス若シ其ノ任務了解シ難キ點アラハ之ヲ質問シ其説明ヲ乞フ可シ而シテ其ノ任務ヲ簡單ニ部下ニ示スヲ要ス是レ止ム無ク離散シタル場合ニ必要ナレハナリ

九斥候ハ必ス其見聞セシ事情ヲ命セラレシ上官ニ報告ス可シ夫レ敵情ヲ迅速且確實ニ報告スルハ勝利ヲ得ルノ最大要件ナリ又豫期セシ地點ニ變化ナキ時モ其旨報告スルヲ要ス

十凡テ斥候ハ己レノ身ヲ隱ス爲メ地形地物ヲ利用シ躍進スヘシ而シテ敵ニ見ラルベクナク能ク敵ヲ見ルコトヲ勉メ敵ノ位置兵員編合及動作等ヲ探知スルコト必要ナリ

乙 敵ニ對スル心得

一路上斥候(本道上ヲ行進スル斥候)ハ尖兵ノ運動ニ從ヘ敵ヲ發見セハ直チニ尖兵長ニ報告シ地物ヲ利用シテ監視(見張ル)スヘシ

二斥候敵ニ遭遇シ力及ハサル片ハ之ヲ避ケ迂回シテ其後方ヲ搜索ス可シ然レモ敵兵寡弱ナル片ハ之ヲ捕獲スルヲ計ル可シ

三諸種ノ徵候ニ注意シ敵ヲ發見スルカ或ハ怪シキ響音ヲ聞ク時ハ直チニ記號ヲ以テ其長ニ報告シ一名ハ視察スルカ或ハ響音ノ原因ヲ探リ要スレハ一名歸テ其位置兵員等ヲ報告ス可シ何レノ場合ヲ論セス機ヲ失ハス報告スルニ他ノ手段ナキニ非レハ射撃ス可ラス若シ不意ニ射撃ヲ受クル片ハ速ニ身ヲ隱シ敵ヲ監視(見張ル)ス可シ

四敵兵退却スル片ハ猥リニ之ヲ追躡スルコトナク自己ノ任務ヲ續行スヘシ

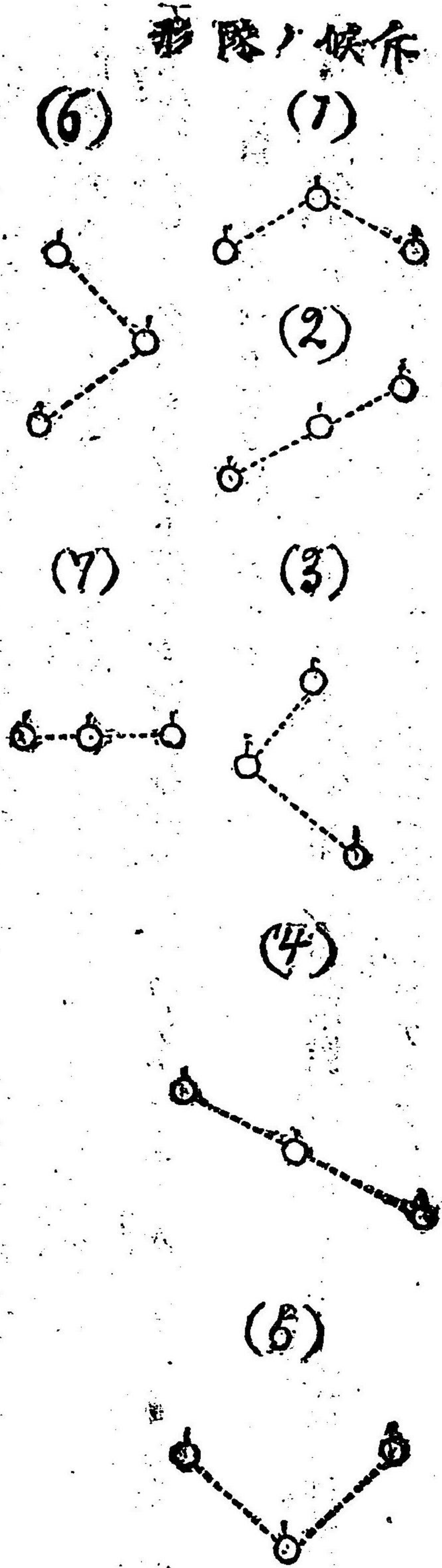
五斥候敵襲ヲ受ケ若シ其長ト離レシ時ハ捕獲サル、コトナク速ニ本隊若クハ集合地ニ歸リ各自ニ見聞セシ事ヲ報告スヘシ

六戰鬪間危殆ナル側方ニ派遣セラル、斥候(即チ戰鬪斥候)ハ、常ニ敵ノ運動ニ注意シ敵ノ斥候ノ如キハ之ヲ擊退スヘシ其報告ハ特ニ速カナルヲ要ス

丙 斥候隊形

一斥候ノ隊形ハ場合ニ應ジ地形ニヨリ情況ニ應ジ或ハ前後ニ連リ或ハ左右ニ並ヒ或ハ

三角形トナリテ適宜其距離間隔ヲ保持シ互ニ見失フコナク原隊トノ連絡ヲ保チ又相近ツキテ同時ニ捕獲セラレサル如ク注意スヘシ



丁 地形ニ關スル心得

斥候各種ノ地形ト諸種ノ景況ニ於ケル動作左ノ如シ
 一 道路ノ曲折點ニ至レハ其一人進ンテ前方ヲ窺ヒ異狀ナキハ行進ヲ持續ス可シ又路上ニ於テ遮障切斷等ノ障礙ニ遇ヘハ速ニ尖兵長ニ報告ス可シ
 二 丘陵若クハ波狀地ニ至レハ一名ハ斜坡ニ登リ巔頂ノ稍後方ニ停止シテ前方ヲ搜索ス

他ノ兵ハ之レニ近ク隨行シ内一名ハ報告ニ赴クノ用意ヲナシアル可シ
 三 隘路ニ遇ヘハ意ヲ決シテ之レニ進入シ速カニ其近傍殊ニ出口ヲ搜索スヘシ
 四 凹道ヲ通過スルハ少ナクモ一名ハ斜坡或ハ頂上ヲ行進ス可シ
 五 敵國若シクハ敵ノ已ニ通過セシ地ニ在テ橋梁ニ遇ハ、破壊シアラサルヤ又ハ爆藥等ヲ裝シアラサルヤ否ヤニ注意シ橋下及橋柱ヲ檢ス可シ
 六 森林ニ至ルハ其入口及側方ニ通スル道路等ヲ搜索シ速ニ出口ニ達スルコトヲ勉ム可シ

七 生離傷壁凹道等ニ潛ミ行キ敵ノ様子ヲ窺フヘシ
 八 村落ニ近クハ土民ヲ捕ヘ之ニ敵情ヲ尋問ス若シ此尋問ヲナシ能ハサルハ警戒ヲ加ヘテ速ニ出口ニ至ル可シ
 九 夜中村落ニ近クハ最近ノ家屋ニ潛行シ止テ景況ヲ窺ヒ要スレハ其一名家屋内ニ入りテ住者ニ事情ヲ尋問シ時宜ニ由テハ其一名ヲ拘引ス可シ
 十 夜間又ハ霧深キ時ハ成ルヘク低地ヲ通り屢々停テ耳ヲ地面ニ傾ケ響音ヲ聞キ若シ

足音や蹄音ヲ聞ク時ハ身ヲ隠シテ搜ルヘシ又時々高所ニ上ルヲ利トスルコトアリ是レ火光ヲ見響音ヲ聞ニ便ナレハナリ

第五 報告

一 斥候ノ報告ハ戦闘計畫ノ基礎トナルモノナルヲ以テ簡短明瞭ニシテ且ツ確實ナルヲ要ス

二 報告ニ際シ左側右側右翼左翼等ノ語ハ敵ニ對シ己ヲ基準トシテ稱呼スルモノト知ルヘシ然レハ敵ヲ基準ニ呼フ事モアリ例令ハ敵ノ左翼ト云フカ如シ

三 見聞セシ事件又ハ想像セシ事ハ區別シテ報告ス可シ

四 報告ニハ必ス時刻(目下ノ出來事)ニテ分明ナル片ハ(略ス)場所、兵種、兵員、動作、敵情ヲ具備シ又場合ニヨリ爾後ノ處置ヲ申告スルモノトス例セハ左ノ如シ

(一) 大井村常泉寺ノ東方三百米突ノ林端ニ敵ノ歩兵五名停止シアルヲ見ル

(二) 三名ノ敵ノ騎兵穩田村ヨリ代々木村ノ方向ニ進ムヲ見タリ是レ敵ノ斥候ナラン

(三) 午前十時澁谷村ニ至リシ時土人ノ言ニヨレハ三十分前敵騎二名宮益町方向ヨリ

來リ目黒村ニ向ヒ行進セリト

(四) 午前九時松川橋ニ於テ敵歩兵約八十名甲州街道ヲ酒井村ニ向ヒ行進スルヲ見ル斥候ハ續ヒテ示命ノ點ニ至ラントス

(五) 江田村ノ西北ニ於テ三葉村ノ北方三百米突ノ高地ヨリ敵ノ射撃ヲ受ク此ノ高地ニハ掘開セル新土ヲ見ル是レ敵ノ散兵壕ナラン斥候ハ該村西方小林中ニ隱匿シテ

監視中

第六 連絡兵

一 連絡兵ハ各部隊間ノ連絡ヲ失ハザルタメニ名或ハ數名ノ兵卒ヲ其中間ニ置ク者ヲ云フ此兵ハ絶ヘス前後ニ注意シ記號等(例ヘハ發進ニハ銃ヲ立ニシテ上ケ、停止ニハ横ニシテ下ケ、敵ヲ發見セハ銃口ニ帽ヲ載セ上ク)アレハ之ヲ悉ク前後ニ傳ヘ報スルモノトス此連絡兵ハ尖兵ヲ除クノ外漸次後方部隊ヨリ出スモノトス

二 凡テ停止ノ記號ハ前方梯隊停止スルモ前方ヨリ記號ヲナサ、レハ停止ノ記號ヲナサ、ルヲ一般トス

三道路ノ支分點又ハ曲折部及不齊地等ニシテ前部隊ト通視ヲ遮キル虞アル片ハ或ハ駈足ニテ前進シ或ハ停止シ後方又タハ前方部隊ト連絡ヲ絶タサルニ注意ス可シ

第七 傳令使ノ心得

- 一 傳令使トハ口上又ハ筆記ノ命令及報告ヲ傳達スル者ヲ云フ
- 二 傳令使ノ任タル實ニ重大ニシテ全軍ノ運動ヲ連繫スル命脈ト云フ可シ故ニ之カ任ニ當ルモノ死力ヲ盡シテ使命ヲ全フスルヲ務メサル可ラス
- 三 傳令途中敵ノタメ書翰等ヲ掠奪セラレントスル時ハ之ヲ破壊消滅シ假令捕獲セラレ殘酷ノ死ヲ以テ脅迫セラル、斥決シテ傳令ノ事實ヲ告ク可ラス
- 四 兵卒上官ノ口達ヲ受ケ他ニ傳達ス可キ時ハ慎ンテ承ハリ少ニテモ了解シ難キコトアレハ再ヒ其説明ヲ乞ヒ然ル後命セラレタル通り必ス復誦スルヲ法トス
- 五 傳令使ハ必ス出發前ニ於テ受領者ノ官姓名經由ス可キ道路及ヒ歸路(口達ノトキハ步度ヲモ)ヲ承知セサル可ラス
- 六 命令及報告ヲ傳達スルトキハ受領者ニ對シ其命令及ヒ報告ヲ口述スルニ先チ其受領

者(職名或ハ官名等)ヲ呼ビ後チ其ノ出處ヲ明亮ニ發唱スルモノトス例之ハ大隊長殿聯隊長ノ命令或ハ前哨司令官殿前哨中隊長報告等ト稱スルカ如シ

七 筆記セシ命令或ハ報告ヲ他ニ傳達ス可キ片ハ其遺失ト敵ニ奪ハル、ヲ避クルヲ要ス

八 書簡袋ニ一個ノ十字形(並)アル片ハ速歩ヲ用ヒ二個(十急)アル片ハ速歩ト駈足トヲ混用シ三個(十十至急)アル片ハ脚力ノ堪ユル限リ迅速ナルヲ要ス

並ハ十二分間ニ一吉羅急ハ九分間ニ一吉羅ヲ行クヲ要ス

九 書簡袋ヲ呈シタルトキハ其封筒ニ受領者ノ受領證明ヲ受ケ持チ歸ル者トス

十 傳令使ハ途中上官ニ遇フモ傳令ト呼ヒ其步度ヲ變スルコトナシ但シ受禮者ニ注目シテ禮意ヲ表ス

十一 傳令使ハ特ニ諭示アリタル時ノ外命セラレタル人ニ非ラサレハ之ヲ渡シ或ハ語ル可ラス

十二 傳令ハ歸來ノ後復命スヘシ

第六章 駐軍

其一 駐軍ノ種別

一 軍隊ノ宿營法(トマルコト)ヲ分テ(一)舍營(二)村落露營(三)露營トス
 二 宿營間ニ於ル内外直接ノ警戒ハ風紀衛兵及ヒ外衛兵トス

第一 舍營

一 舍營 トハ軍隊家屋ニ宿泊スルヲ云フ兵卒ハ此時ニ於テ需用品ヲ補充シ裝具被服
 ヲ補修スルモノトス

二 緊急舍營 トハ敵ニ近接シ或ハ急襲ノ虞アル片一中隊或ハ一小隊或ハ分隊毎ニ一

團トナリテ一家屋ニ宿泊シ服裝ヲ整へ背囊及ヒ銃器ハ各其傍ニ置キ帶革脚絆及靴ヲ
 穿チシ儘臥眠シ凡テ窓戸ヲ開キ各家屋ニ少クモ兵卒一名點燈シテ警戒スルヲ云フ

三 敵ニ接近シアル片大兵村落ニ舍營シ僅カニ身ヲ容ル、カ如キ極メテ狹縮ナル舍營ヲ
 ナスコトアリ斯ノ如キ時ハ尤モ靜肅ヲ保持シ且各兵卒ハ武器裝具ヲ裝へ暗黒ノ時ト
 雖モ速ニ武裝ヲナシ出發シ得ル如クスヘシ

四 戰團後新ニ略取シタル村落ニ舍營スルトキノ如キハ敵ノ脱走兵等ノ潜伏シアラサル

ヤニ注意ス可シ

五 宿舍ニ到着セハ先ツ武器被服靴其他諸物品ノ手入ヲナシ武器及ヒ裝具ハ定メラレ
 タル場所ニ順序正シク配列シ暗黒ト雖モ武裝シ得ル如ク爲スヘシ而シテ勉メテ行軍
 ノ疲勞ヲ恢復スルコトヲ計ル可シ

六 舍營ニ在テハ敵ニ近接シアルトキト雖モ舍主ニ對シテハ專ラ温和ヲ旨トス可シ蓋シ
 温和ノ處置ハ敵地ト雖モ我便利ヲ得ルコト大ナレハナリ舍主ノ待遇縱ヒ不遜不信ナ
 ルコトアルモ兵卒ハ之ヲ直接ニ責ムルコトナク必ス其次第ヲ上官ニ申告ス可シ

七 宿舍給養(舍主ヨリ饗膳ス)ノ場合ニアリテハ其饗膳不良ナルモ之ヲ罵リ或ハ竊カニ
 器物ヲ破毀スル等ノ所爲ヲナスヘカラス其甚不良ナル片ハ詳ニ之ヲ上官ニ申告ス
 可シ

八 舍營中歌ヲ謠ヒ詩ヲ吟シ口論ヲナシ喧噪ナルヘカラス

九 舍營司令官及ヒ高等司令部ノ宿所ニハ旗或ハ束藁ノ標示アリ夜間ハ燈火ヲ點シテ認

知シ易ラシメアルヲ記憶セヨ
十合營中ノ警報ハ非常號音ヲ吹奏ス此時各兵卒ハ靜肅ニ武裝ヲナシ速ニ中隊ノ集合所ニ至ル可シ

十一警報ハ時トシテ號音ヲ用フルコナク靜秘ニ行フコアリ此時ハ其直屬上官ノ號令若クハ告諭ニヨリテ集合ス敵兵急ニ合營地内ニ侵入シ其所屬部隊ニ集合スル能ハサル并ハ各其所ニ於テ現在ノ人員相協力シテ戰鬥ス可シ

第二 村落露營

一村落露營トハ敵ニ近キ場合ニ多クノ軍隊ヲ小村落ニ集メ置ク時又タハ人家不足ノ時行フモノナリ

二村落露營ニ在テハ某隊ハ家屋ニ舍營シ某隊ハ庭内若クハ其近傍ノ地ニ露營ヲナス故ニ舍營ノ者ハ舍營ノ規則ヲ守リ露營ノ者ハ露營ノ規則ニ從フ可シ

三村落露營ハ諸部隊密集シテ宿營ス故ニ勉メテ靜肅ニシテ混雜ナキ様ニ注意シ又タ擅ニ人民ノ物品ヲ濫用スルコナキヲ要ス

第三 露營

一露營トハ敵ニ近接若クハ夜間尙戰鬥ノ虞アル并或ハ僻地ニシテ宿營ス可キ人家ニ乏シキ時ニ露天ニ宿泊スルモノナリ

二露營ニ在テ各兵ハ其指示ニ應シテ正シク銃ヲ交叉シ背囊ハ晝間集合所ニ置ク可シ

三露營中兵卒其業務ニ従事スル間ハ敬禮ヲ行フヲ要セス故ニ上官ヨリ尋テラル、コアラハ唯直立若クハ靜止シテ之ニ答フヘシ

四敵襲ヲ受クルカ或ハ警報ノ號音ヲ聞ク并ハ速ニ背囊ヲ負ヒ又銃ノ後方ニ集合ス可シ

五露營中呼集アリシ時ハ武器ヲ携ヘズシテ速ニ中隊集合場ニ到ルヘシ

六大小便ハ規定ノ場所ノ外ニ於テ爲ス可ラス

七露營ヲ撤シテ出發スル時ハ出發時刻十五分前ニ火ヲ消スヘシ

歩四十三百二計合
(突米十八百凡)

十歩		半小隊		十歩
△	○	兵衛紀風	又	十歩
銃	合	第二中隊	第一中隊	十歩
場	場	休息地	休息地	十歩
第四中隊	第三中隊	休息地	休息地	三十歩
休息地	休息地	休息地	休息地	四十歩
線ノ校將附隊中				十五歩
線ノ部本隊大及隊聯				十歩
場 事 炊				三十五歩
線ノ匹馬及李行卒兵士下兵重輜				四十歩
團 廁				五十歩

合計二百四十六歩(凡百九十米突)

其二 前哨

一前哨ハ敵ノ情况ヲ搜索シ休止スル軍隊ノ安寧ヲ保持スル爲最前線ニアリテ警戒シ本隊ヲ掩護スルモノトス

二最モ敵ニ接近シテ駐止スル軍隊ハ戦闘準備ノ隊形ニ展開シテ露營スルコアリ

三前哨ハ前哨本隊前哨中隊及前哨騎兵ノ三部ヨリナル之ヲ混成前哨ト云フ又歩兵ノミ

又以テ前哨ヲ組織ス

四前哨本隊ヨリ前哨中隊ヲ出ス

五前哨全隊ノ長ヲ前哨司令官ト云フ

第一 前哨中隊

一前哨中隊ノ任務ハ敵ヲ警戒シ敵襲ニ當リ是ヲ抗拒スルモノナリ

二前哨中隊ニハ特別ノ番號ヲ附スルコナシ其中隊固有ノ番號ヲ稱フ例令ハ前哨第一中

隊ト云フカ如シ

三前哨中隊ハ小哨及ヒ獨立下士哨ヲ出ス而シテ小哨ト獨立下士哨トヲ區別セス通シテ

ヲ奮勵セサル可ラス

二小哨トハ前哨中隊ヨリ出スモノニシテ其長ハ士官ヲ以テ之ニ充ツ小哨ハ步哨若クハ下士哨及斥候ヲ出シテ警戒ス

三特別ニ重要ナルカ或ハ甚タ危殆ノ地及ヒ查哨ニハ必ス下士哨ヲ用ユ此下士哨ハ通常

下士一人兵卒六人ヲ以テシ其二人ハ步哨トナリ自餘ハ交代兵トシテ其近傍ノ遮蔽物

ニ據リ休止シアルモノトス

三查哨ハ内外ヨリ來ル人ヲ査閲シ我軍ノモノタルコト判然シタルモノハ通行セシメ疑

ハシキモノ及ヒ軍使(先ツ其眼ヲ縛シ)降參人ハ小哨若クハ前哨中隊ニ送ルヘシ而シ

テ軍使降參人ト談話スヘカラス

四步哨ハ複哨ト下士哨トヲ通シテ右翼ヨリ番號ヲ附スルモノトス

五小哨ノ又銃ハ步哨ノ交代兵中同時ニ交代ス可キ者及各斥候毎ニ之ヲナシ以テ他ノ者

ニ拘ラス之ヲ取り得ヘカラシム

六兵卒ハ小哨長ノ命令アルニ非レハ背囊ヲ卸シ或ハ睡眠ヲナスヲ許サス又彈藥盒及ヒ

水筒雜囊等ハ終始其身ニ纏フ可シ

七任務ノタメカ或ハ許可ヲ得ルニ非サレハ一人モ小哨ヲ離ル可ラス

八小哨ニ上官來ル片ハ各兵卒ハ依然休息シアルヘシ

九銃前哨ハ警戒ヲ要ス可キ徵候等ヲ見聞シタル片ハ之ヲ小哨長ニ急報ス又タ夜間疑ハ

シキモノ來ル片ハ之ヲ誰何シテ必ス彼我ノ識別ヲナス可シ其他特別ノ守則ハ小哨長

ヨリ授ケラル

十銃前哨ハ敬禮ヲ行ハス又之レカ爲メ「執レ銃」ト呼フヲナシ

第三 獨立下士哨

一獨立下士哨ハ前哨中隊或ハ前哨本隊ヨリ出スモノニシテ下士ノ指揮ニ屬シ其人員ハ

步哨交代兵ノ外斥候ニ充ツ可キモノ若干名ヨリナル

第四 前哨ノ步哨

一步哨ハ最前線ニ在リテ警戒ニ任スルモノニシテ敵ノ動靜ヲ認知シ報告スルヲ專一ノ

目的トス故ニ其勤務ノ勉怠ハ大ニ全軍ノ安危ニ關ス慎マスンハアル可ラス

步哨線ニアル步哨一般ノ守則

(一) 步哨ハ絶ヘス敵軍ノ方位ヲ監察シ凡テ疑ハシキ徴候ニ深ク注意シ若シ敵ニ關シテ發見セシコアラハ其一人ハ速カニ小哨若クハ中隊ニ報ス可シ若シ猶豫セハ危殆ニ陥ルト認メシキ或ハ敵襲ト知リシキハ數回ノ射撃ヲナシテ警報シ一名ハ報告スヘシ

(二) 晝間ハ我軍ノ將校密集部隊斥候及ヒ傳令使ニ步哨線ノ出入ヲ許ス自餘ノ者ハ悉ク查哨ニ送ルヘシ其指示セシ查哨ノ方向ニ直ニ往カス尙ホ步哨線ヲ通過セントスル者及其命スル所ニ從ハサル者ハ之ヲ射撃ス可シ

(三) 步哨ハ遮蔽物ヲ利用シ頭ノミ出シ武器或ハ身體ヲ動サス敵ニ發見セラレサル様ニスヘシ若シ樹木草葉等アリテ我展望ヲ遮ル時ハ取り除クヘシ步哨ハ猥リニ射撃スヘカラス

(四) 夜間步哨ニ近ク者アレハ步哨ハ銃ヲ構ヘテ「止レ」「誰レカ」ト呼ヒ其來ル所以ヲ問フ若シ「止レ」ト呼フコト三次ニ至ルモ尙ホ止マラサルカ或ハ遁レントスル狀アル

片ハ射撃ス可シ其他ノ處置ハ晝間ノモノニ同シ

(五) 敵ノ一將校僅少ノ兵卒ヲ率ヒ白旗若クハ白布ヲ翻ヒシ號音若クハ其他ノ記號ヲ以テ遠方ヨリ其軍使タルヲ標シ來ル片ハ之ヲ待遇スルニ敵ヲ以テセス其武器ヲ取ラシムヘカラス指示シテ查哨ノ方ニ往カシムヘシ又ハ敵ノ單獨兵銃ヲ投棄シ或ハ之ヲ倒ニ携ヘ或ハ遠方ヨリ呼ヒテ其降參人タルヲ表スル時ニモ亦適用ス然レモ此ノ如キ者ハ先ツ其身ヨリ武器ヲ去ラシメ騎馬ナル片ハ腹帶ヲ解カシメ馬ヲ繫クカ或ハ前足ヲ縛ラシメ後テ查哨ノ方ニ行カシム可シ而シテ其武器等ハ步哨交代ノ時之ヲ小哨ニ送致ス

右ノ場合ニ於テ查哨ナキ時ハ小哨長ノ指命ヲ受クヘシ(其間外方ニ面セシメ決シテ私カニ談話セシムヘカラス)

(六) 步哨ハ命令アルニ非サレハ座臥シ或ハ負銃ヲナシ又ハ手ヨリ銃ヲ離スヲ許サス上官ノ來ルアルモ之ニ敬禮スルヲ要セス若シ上官ヨリ質問アレハ唯姿勢ヲ正シテ答フ可シ之レ其監視ヲ中止セサランカタメナリ

歩哨特別守則

- (一) 敵情特ニ監視ス可キ地方
- (二) 前方ニアル我部隊ノ位置及動作
- (三) 顧慮スヘキ村落ノ名稱及道路ノ方向
- (四) 歩哨ノ番號
- (五) 隣歩哨ノ位置番號并ニ之ト連絡法
- (六) 查哨ノ位置
- (七) 所屬小哨前哨中隊ノ位置及ヒ之ニ至ル捷路
- (八) 歩哨特別ノ姿勢

歩哨ノ注意

- 一 逃亡人ヲ認メシ片ハ之ヲ追躡シ尙ホ及ハサル片ハ射撃ス若シ之ヲ捕ヘシ片ハ小哨ニ送ル然レモ其守地ヲ遠ク離ル、可ラス
- 二 歩哨ハ樹木堆土等ニ據リテ敵眼ニ觸レサルヲ要スト雖モ敵ヲ見ルコトヲ忘ル可ラス

三 歩哨ハ常ニ裝填シ且ツ夜間ハ着剣ス

四 夜間ハ目ヨリ耳ヲ專ラ使用シ且ツ方位ヲ誤ラサルタメ高樓喬木等ニ依リ其方向ヲ撰定シ置ク可シ

五 數人近ツキ來レハ其内一人ヲ進メテ其來ル所以ヲ問ヒ通過ヲ許ス可キ者ハ之ヲ許シ其他ノ者ハ悉ク查哨ノ方ニ往カシム

六 歩哨ハ所屬部隊ノ將校下士又ハ歩哨掛上等兵並ニ巡察斥候ニ非レハ其守則ヲ語ル可ラス

七 歩哨報告ニ行ク時單ニ迅速ト云フ考ノミニテ前後ノ考モナク地物ヨリ離ル、ハ敵ニ發見セラル、モト、ナルナリ注意セサルヘカラス何トナレハ敵ノ斥候ハ常ニ此等ノ出來事ヲ待受テ我歩哨ノ位置ヲ知ラント勉ムレハナリ故ニ監視中身體ヲ遮蔽シアルト同様地物ヲ利用シテ報告ニ行ク事ニ留意スルヲ要ス

八 歩哨線ノ近傍ニ於テ射撃其他音響ヲ聞キシ片ハ復哨ノ一名其方向ニ進ミ原因ヲ正ス可シト雖モ遠ク守地ヲ離ル可ラス

九敵兵稍々近ツクハ射撃シテ之ヲ抗拒ス若シ防ク能ハサルハ射撃シツ、迂路ヲ經テ小哨ニ退合ス可シ是レ一ハ小哨ノ位置ヲ隠スタメト一ハ後方部隊ノ射撃正面ヲ避クルカタメナリ

十歩哨ノ交代ハ新舊兩歩哨敵ノ方ニ正面シテ併立シ舊歩哨ハ新歩哨ニ特別ノ守則及ヒ其服務中實見セシ事件ヲ傳告ス可シ但シ此ノ交代ニハ歩哨係下士上等兵ノ監視ニアラサレハ決シテナス可ラス

十一歩哨交代シテ小哨ニ歸レハ自分カ服務中ニ生シタル事ヲ其長ニ報告スヘシ

第五 前哨ノ斥候

甲 前哨斥候一般ノ心得

一前哨ニ於テ斥候ノ任務ハ歩哨ノ耳目ノ及ハサル地ヲ搜索シ敵ノ動靜ヲ候察スルニアリ時トシテハ地形ノ偵察ニ任スルコトアリ

二斥候長ハ出發ノ際敵情取ル可キ道路特ニ意ヲ用ヒテ搜索ス可キ地區地物及要スルハ歸途ノ時限ニ關スル等ノ指示ヲ受ケ之ヲ復誦シテ其ノ任務ヲ單簡ニ部下ニ示スヲ

要ス

三斥候ハ其進退動作ニ深ク注意シ靜肅ニシテ喧噪ナル可ラス又々屢々停止シテ音響ヲ聽取シ能ク地形ヲ暗識スルヲ要ス是レ地形ニ就テノ説明ヲナシ且ツ時機ニヨリ嚮導トナリ得可キカタメナリ

四斥候ハ勉メテ廣ク搜索シ敵ニ中斷セラル、危害ヲ避クルタメ往路ト異ル歸路ヲ選ビ又々出發ノ始メ集合點ヲ定メ置キ止ムヲ得スシテ離散セシハ此點ニ集ルモノトス

五斥候相遇フハ互ニ見聞セル情報ヲ交換ス可シ

六斥候任務ヲ達セハ速カニ歸還スヘシ決シテ無要ノ戰鬥ヲナス如キコトアルヘカラス

七斥候歩哨線ヲ出ツルハ其ノ近隣ノ歩哨ニ其行ク方向歸還時間及地點ヲ告ケ歩哨ヨリ敵情ヲ聞キ又歸還セシハ敵ニ關シテ見シ所ノ事件ヲ單簡ニ告知ス可シ

八斥候歩哨線ヲ通過スル時ハ行進隊形ノマ、進出シ敵ヲシテ歩哨線タルヲ知ラシメサル如クスヘシ

九其他行軍斥候ニ示ス處ノモノハ悉ク此斥候ニ用ユルモノトス

乙 前哨ノ斥候敵ニ對スル心得

一敵ノ一步哨ヲ發見セシハ地物ニ據テ隱匿シ其長ハ隣歩哨ヲ發見スルヲ勉メ而シテナシ得レハ道路及内部ノ景況等ヲ視察シテ速カニ退却ス可シ若シ時機アレハ歩哨ノ一名ヲ捕獲ス可シ(演習ニアリテハ捕獲スルヲ嚴禁ス)

二斥候ハ不意ノ敵襲ニ遇ヒ自己防禦ノタメカ或ハ敵ノ近接ヲ報スルニ餘裕ナキハ非サレハ射撃ス可ラス

三敵ノ小ナル斥候ニ會遇スルハ其斥候ノ通過シ終ル迄潛匿シ後チ續ヒテ行進ス可シ敵ノ斥候極メテ吾カ前哨ニ近接セシハ限リ之ヲ擊退スヘシ

四行進スル敵ヲ發見スルハ力メテ潛伏シテ其兵員及ヒ狀況ヲ察スルヲ勉ム可シ而シテ其敵衆多ニシテ我軍ノ方ニ進ミ來ラハ其一名ヲシテ速ニ報告セシム

五凡ソ敵兵發見ノタメ出タサレタレ斥候ハ敵ノ位置ヲ確認スルニアリ故ニ假令敵ニ覺知セラレ或ハ其射撃ヲ被ルモ尙ホ狀況ヲ探知スルヲ勉ムヘシ

第六 前哨ノ巡察

一巡察ノ任務ハ時々歩哨線内ヲ巡行シ歩哨ヲ監視シ且ツ歩哨ノアラサル土地ヲ搜索シ比隣小哨ト連絡ヲ通スルニアリ而シテ其兵員通常ハ長ト共ニ二名ヨリナルモノトス

二歩哨線ニ於テ射撃セシキカ或ハ喧噪ナルハ亦タ巡察ヲ派遣シ其事實ヲ確メ且ツ歩哨ヲ援助スルヲアリ

第七 暗號及ヒ記號

一夜间斥候巡察及ヒ歩哨等互ヒノ識別ニ用ユルモノヲ暗號ト云フ例令ハ「山」ト呼ヘハ「川」ト答フルカ如シ

二晝夜ノ別ナク豫メ定メタル所作ヲ以テ互ニ識別スルモノヲ記號ト云フ

三最初見タルモノ先ツ「止レ」誰カト呼ヒ其人停止セハ其答ニ依テ我軍ノ者タルヲ認識セシ後チ更ニ「暗號ニ進メ」ト呼ンテ之ヲ確認ス可シ

四暗號ヲ唱フルハ低聲ナルヲ要ス而シテ暗號ヲ知ラサルモノハ查哨ノ處ニ往カシメ遁逃セントスル者ハ之ヲ射撃ス可シ

五暗號ニ依ル識別法ハ専ラ城塞戰ノ前哨ニ用ヒ通常野戰ノ前哨ニ用ユルヲナシ

其二 外衛兵及ヒ風紀衛兵

一敵ノ近傍ニ在リテ宿營スル軍隊ハ直接警戒ノタメ及ヒ隣舍營地トノ連絡ヲ通スル爲メ外衛兵ヲ置ク此衛兵ハ舍營地ノ出口及外圍或ハ前方ニアル要點ニ複哨或ハ下士哨ヲ備フルモノトス外衛兵ノ動作ハ小哨勤務ノ規則ヲ遵守スルモノトス

二宿營地ニアリテ靜肅及ヒ風紀ヲ維持スルタメ一ノ風紀衛兵ヲ設置ス此動作ハ舍營ニ在テハ平時屯營ノ規則ニ露營ニ在テハ衛戍勤務ノ規則ニ從フ可シ

三警報ニ當リ外衛兵ハ更ニ命令アル迄其位置ヲ固守シ要スレハ殊死シテ敵ヲ逆撃ス

四風紀衛兵ハ軍隊ノ遺セル材料ヲ監視ス又突然出發スル時ニ當テハ其材料運搬ノ準備整フタル後チ軍隊ニ跟隨スルモノトス

第七章 戰闘

其一 總說

一戰闘ハ軍人本分ヲ盡スノ時機生死ノ地名譽ノ場所ナリ故ニ軍人タル者此ノ時ニ於テ平生謹嚴ナル軍紀ノ下ニ養フ所ノ能力ヲ發揚シ眞ニ軍人ノ本職ヲ盡サ、ル可ラサル

ナリ

二兵卒ハ行軍及勞働ノ後戰闘ニ移ルヲ常トス而シテ戰時ニ於テハ尙ホ缺乏ノ加ハル在リテ一層困難ヲ増加ス故ニ兵卒ハ剛毅、勇猛、思慮及果斷ヲ有セサル可ラス蓋シ最大危險ノ時機ニアリテ剛毅ナルモノハ自若トシテ苦ヲ忍ヒ勇猛ナルモノハ敢テ臆セス思慮アルモノハ動作宜シキヲ得而シテ果斷ナルモノ始メテ能ク決行ス是レ軍職ヲ盡シ得ル所以ナリ

三眞ノ兵卒ヲ以テ自ラ任スルモノハ忠君愛國ノ精神ニ富ミ善良ナル教育ニヨリテ其性質ヲ鞏固ニシ獨斷ニ慣レ己ニ克ツコトヲ能クシ漸次ノ慣習ヲ以テ體軀ノ勞働ニ耐ヘ戰闘演習ニ由テ其方法ニ習熟シ以テ戰闘ノ悲惨ナル感情ニ撓マサルニアリ

其二 戰闘間地區地物ノ利用

一散兵ノ地區地物ヲ利用スルハ我射撃ノ効力ヲ發揚シ敵彈ヲ防止シ戰闘ニ勝利ヲ得ル爲ノ手段ナリ

二地物ノ利用ハ射撃ノ効力ヲ第一トシ身體ノ遮蔽ヲ第二ニスヘシ

三散兵ハ溝渠、崖岸、墻壁、生籬等ヲ超越攀登スルコトニ熟ス可シ又各散兵ハ掩蔽シテ
潜行シ或ハ僅カニ其ノ位置ヲ偏シ或ハ身體ヲ屈シ或ハ匍匐シテ地物ヲ利用スルヲ要
ス

四地形ヲ利用スルハ管ニ方便ニ過キス抑戰鬥ノ目的ハ敵ヲ殲滅スルニアルヲ忘ル可
ラス

五散兵ハ地物ヲ利用シ敵彈ヲ防止スト雖モ容易ニ超越シ難キモノト我射撃ヲ妨害スル
地物ニハ決シテ據ルヘカラス

六散兵停止スレハ概テ伏臥スルヲ要ス而シテ自由ナル射撃界ヲ得サルハ發射ノ際ノ
ミ巧ニ立姿ニテ射撃シ後再ヒ伏臥又ハ膝姿ス可シ

七散兵樹木ノ背後ニ據ルハ銃ヲ樹枝木樞或ハ樹木ノ曲部ニ依托シ其射撃ヲ確實ナラ
シム大木ニ據ル時ハ左前臂ヲ幹ニ附ケ銃ヲ掌ニ置キ小木ニ據ル時ハ左ノ掌ヲ木ニ附
ケ銃ヲ拇指ト食指トノ間ニ置ヘシ

八堆土凹地丘阜山陵等ノ頂キニ在リテハ其背後(頂界線ノ後口)ニ伏臥シ或ハ跪座シテ

射撃ス

九家屋墻壁等ハ其ノ右端ニ據リ體ヲ顯ハサスシテ射撃ス可シ

十高キ墻壁ノ如キ遮蔽物ニアリテハ其上端ヲ破毀シ若クハ階段ヲ造リ又ハ銃服ヲ穿ツ
ヘシ

十一林縁ニ溝或ハ堆土等ノ地物アラサルハ砲彈破片ノ飛來ヲ避クル爲メ最外樹ノ後
方ニ據リ若シ敵砲彈ノ憂ナキハ林縁ノ後方十米突乃至十五米突ノ所ニ退キ位置ス

可シト雖モ前面ノ土地ヲ射撃シ能ハサル所ニ據ル可ラス

十二騎兵ノ襲撃ヲ受クルハ精神ヲ沈着シ射撃ヲ以テ之レヲ擊退スルヲ勉ムヘシ若シ
射撃シ能ハサルハ地上ニ伏臥スルカ又ハ森林溝渠斷崖等ノ騎兵ノ通過シ得サル地
ヲ撰フ可シ

十三散兵ハ自己ノ前方ニアル遮蔽物ハ之ヲ利用ス可シト雖モ隣兵ニ妨害ヲ與ヘ或ハ直
轄上官ノ指揮外ニ出ツル物ハ之ヲ放棄スヘシ

十四散兵密林中ヲ經過スルトキハ別命アラサルモ分隊長ノ方ニ集合シ林端ニ出ツレハ

又タ散開ス可シ

十五散兵壕ニ據ル時ハ身體ノ正面ヲ托スルカ或ハ左ノ臂ヲ崖徑ニ托スルカ又ハ右足ヲ後ニ引キ身體ノ左側面ヲ平ニ附ヘシ

其二 戰鬪間兵卒ノ動作

一步兵ハ苟モ人ノ跋渉シ得可キ地ニ於テハ如何ナル處ト雖モ戰鬪シ得ルモノトス假令充分武裝シタルトキニ在テ巨大ノ障礙物ニ逢フモ決シテ逡巡ス可ラス

二散開シタル時兵卒ハ一定ノ位置及姿勢ヲ固守スルヲ要セス然レモ輕捷勇敢自信ニ富ミ武器ノ使用及地形ノ利用ヲ巧ニシ常ニ其指揮官及敵兵ニ注意スルヲ要ス

三散開隊次ニ在テハ密集隊次ニ比シ其任務ノ重要ナルコトヲ會得ス可シ之カ爲メ何等ノ場合ヲ問ハス己レノ全カヲ盡スニ由テノミ好結果ヲ得ヘキコトヲ銘心ス可シ凡テ散兵ノ姿勢ニ大ナル自由ヲ與フルハ耳目ヲ活動シ瞬間ニ判斷シ獨斷事ヲ所シ以テ其職ヲ盡スニ便利ナラシムルタメナリ

四敵ニ背ヲ示スハ無上ノ耻辱ニシテ危險ナリ此臆心一タヒ胸中ニ起ルトキハ敗滅立ロ

ニ至ルコトヲ忘ル可ラス之ニ反シ猛烈果斷ナル攻撃ハ成果ヲ得ルモノトス

五充分射撃ノ効用ヲ逞フスルニハ各人ノ沈着、射撃ノ熟練及ヒ射撃軍紀ヲ要ス

六射撃軍紀
射撃軍紀トハ彈丸雨飛ノ火戰中命令ヲ確實ニ實行シ銃ノ取扱及戰鬪動作ニ關スル諸法則ヲ嚴守スルヲ云フ尙其他左ノ事ヲ要求ス

- (一) 敵火ノ下ニ應射セサルモト雖モ自若トシテ動カサルコト
- (二) 常ニ指揮官及敵兵ヲ注視スルコト
- (三) 目標消滅スルカ或ハ小笛ヲ聞クカ又ハ其他ノ方法ヲ以テ射撃停止ノ命令アルモト

ハ速カニ射撃ヲ停止スル事
(四) 射撃ノ方法ニ注意シ地形ノ利用ヲ巧ニシ効力ノ増大ヲ計ルコト

抑モ戰鬪ノ勝利ハ初メニ彈藥ヲ節用シ時機來レハ猛烈ノ威力ヲ逞フシテ敵ノ志氣ヲ沮喪セシメ我射撃効力ヲ顯ハスニアリ故ニ彈藥ノ節用ハ極メテ肝要ナル一事トス

七散兵ノ各個射撃ハ「徐カ」「並」「急」射撃トス

「徐射撃ハ」隣兵ト交互ニ緩徐ナル射撃（一分間ニ二三發）ヲ行フ

「並」射撃ハ一分間ニ五六發ヲ射撃ス

「急」射撃ハ一分間ニ八發以上ヲ射撃ス

八射撃ノ應用ハ何等ノ場合ヲ問ハス確實ナル射撃界内（射撃ノ部ヲ参照スヘシ）ニ在ル

敵ヲ照準スルニ非レハ著シキ効力ヲ有セサルコトヲ銘心ス可シ而シテ敵ノ兵種ヲ撰ム

ハ必シモ主要ノコトニ非スト雖モ多クノ場合ニアリテハ敵ノ歩兵ヲ以テ第一トスヘシ

九兵卒ハ善ク射撃軍紀ニ慣熟シ戰闘中假令指揮官ヲ失フト雖モ其熟練ト不撓ノ勇敢ト

ヲ以テ利害ヲ判断シ獨立シテ戰闘ヲ維持シ他兵卒ノ鑑トナリ得ルヲ要ス然ルルハ

我ト同一ノ困難ヲ有スル敵ニ打勝ツコトヲ得可シ

十成績ナキ射撃ハ我軍ノ志氣ヲ挫折シ敵兵ノ銳氣ヲ増加スル者ナリ

十一敵ノ射撃界外ニ於ケル運動ハ主トシテ列序ト連繫トヲ維持スヘシ其射撃界内ニ在

テハ捷徑ヲ經テ敵ニ近接スルヲ以テ第一ノ目的トス

十二散兵線ノ運動ハ通常速歩ノ速度ヲ以テ施行ス

十三前進中兵卒ハ命令ナクシテ停止スルハ嚴禁ナリ火力熾大ニシテ死傷多キ片ニ在テ

モ決シテ躊躇ス可ラス

十四攻撃運動ニハ射撃ヲ以テ充分ニ準備シ間斷ナク勇敢ニ前進スルコトヲ勉メハ好結果

ヲ得ヘキコト退却ハ自滅ニ陥ルコトヲ銘心スヘシ

十五防禦ニ在テハ兵卒ハ各自ノ位置ヲ保チ敵兵接近スルニ從テ我火力ハ益々敵ヲ殺傷

スルコト多キヲ信用ス可シ

十六一步兵ハ開活ナル平地ニ於テモ射撃ヲ準備シアル片ハ一騎兵ニ優ル者ナリ假令多

數ノ騎兵ニ對スルモ沈着シ適當ニ火器ヲ使用セハ之ヲ畏ルハニ足ラス

十七千米突以内ニ在リテハ歩兵ハ砲兵ニ優ル故ニ地形ヲ利用シ速ニ千米突以内ニ接近

シ第一ニ目視シ得ヘキ駕馬次ニ砲卒ヲ射撃ス可シ

十八砲門ヲ奪取シタル時之ヲ用ユル能ハサラシムルニハ火門ニ釘スルカ又ハ閉鎖器ヲ

破壊スルカ或ハ之ヲ泥中等ニ棄ツ可シ

十九各兵卒ハ所屬部隊ヲ離ル可ラス任務ヲ帶ヒス或ハ負傷セスシテ徒ニ戰闘部隊ノ後

方ニ停止シ又ハ命令ヲ受ケヌシテ負傷者ヲ戰線中ヨリ運搬スルモノハ逃亡罪ヲ以テ論セラル可シ

二十萬一所屬部隊ヲ失フタル兵卒ハ直ニ最近ノ戰團部隊ニ合シ其指揮官ノ命令ニ服従スルコト所屬上官ニ於ケルカ如クス可シ而シテ戰團終ルノ後所屬部隊ヲ搜索シ復歸ス可シ

二十一戰團喧噪ノ中ニ在リテ決心及思慮ヲ失フタル兵卒ハ其所屬將校ヲ仰視スルヲ要ス若シ將校アラサルハ下士若クハ勇敢ナル兵卒ヲ模範トシテ其身ヲ處置スヘシ

其四 彈藥補充

一 彈藥射盡セハ步兵ハ其ノ主要ノ戰團力ヲ失フ故ニ彈藥ノ使用及補充ニ就テハ兵卒ノ最モ注意ス可キ事トス

二 各兵ノ携帶彈藥ハ常ニ大隊ノ彈藥駄馬ヨリ補充ス

三 一箱ノ彈藥ハ結束ノ儘之レヲ箱ヨリ出シ兵卒二人若クハ四人ニ別チ手ニ提ケ或ハ頸ニ掛テ運搬スルモノトス(一束八百八十發トス)

四 傷者及死者ノ彈藥ヲ收拾スルヲ緊要トス

五 兵卒ハ常ニ百五十發ノ彈藥ヲ携帶スヘキ者ナリ尙戰團前或ハ戰團間多量ノ彈藥ヲ給サル、時ハ雜囊又ハ衣囊ニ入レ置クヘシ

六 防禦ヲナスルハ火戰中ニ豫備彈藥ヲ箱或ハ桶ニ填寫シ準備セラル、事アリ

第八章 步兵工作

一 步兵ハ工兵ノカヲ籍ラス携帶器具或ハ駄載器具ヲ以テ單簡ナル工作ヲ實施スヘキモノトス

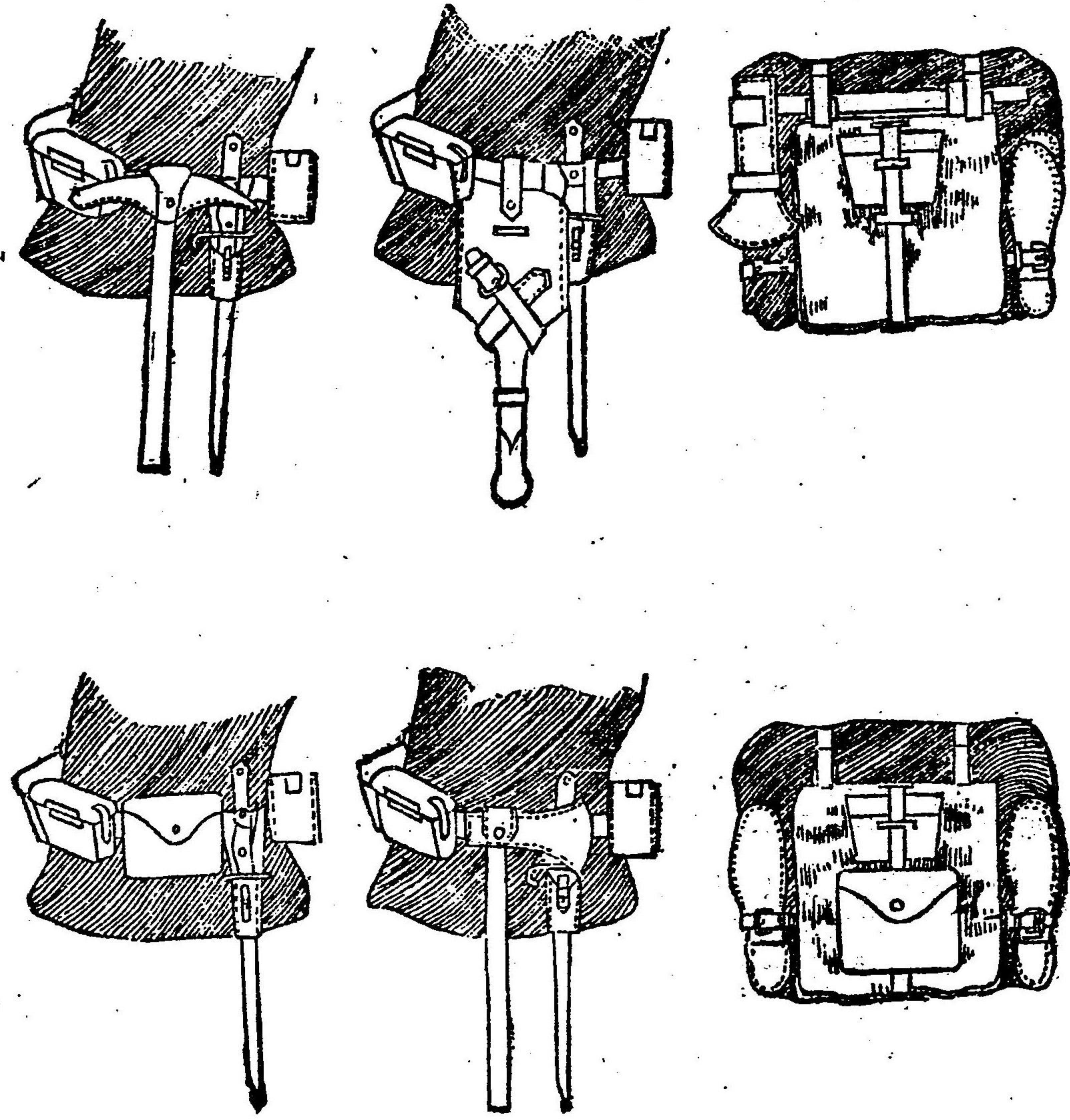
二 工作ノ目的ハ我射撃ノ効力ヲ發揚シ敵火ノ効力ヲ滅殺スルニアリ

其一 器具ノ種類及携帶法

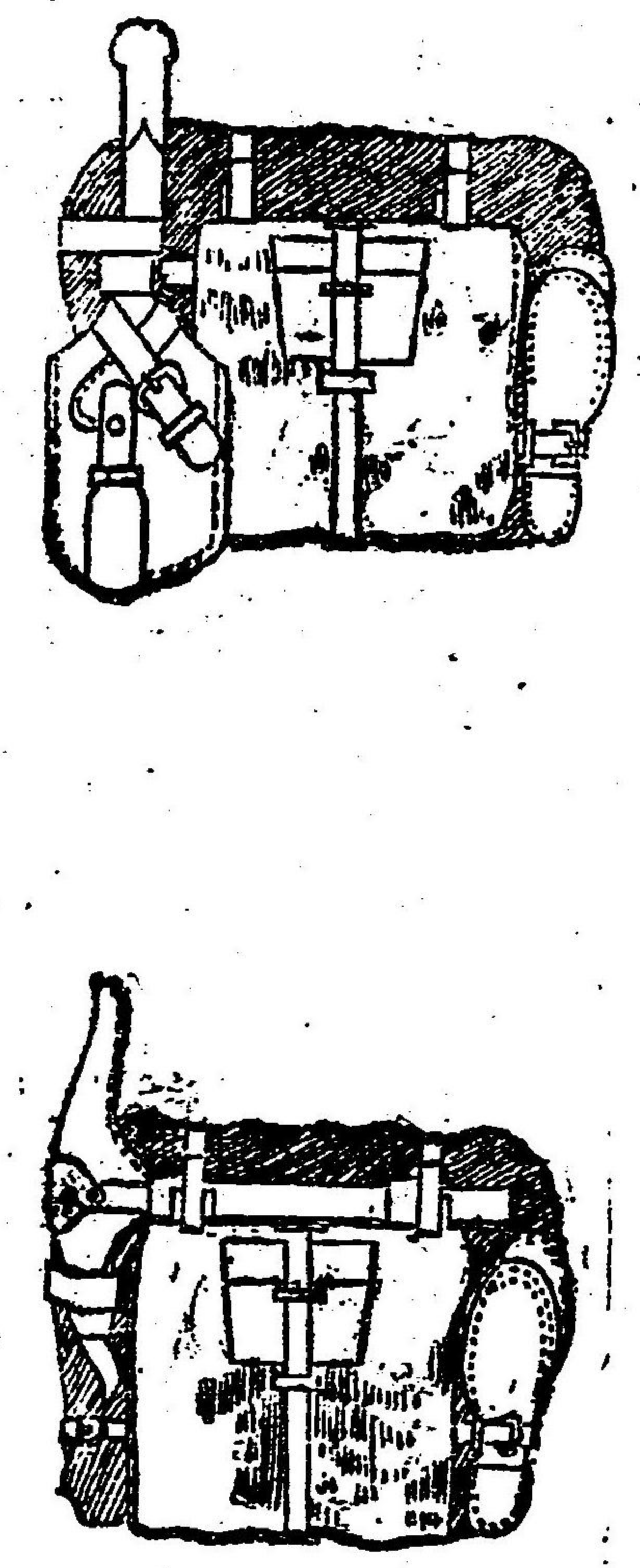
一 携帶器具ハ兵卒ノ背囊ニ附着シテ携帶スルモノニシテ中隊ニ九十八トス、其區分左ノ如シ

- 方匙 六十八箇
- 小斧 八箇
- 小十字鋏 十七箇
- 疊鋸 五箇

携 帶 器 具 携 帶 法



携 帶 器 具 携 帶 法



二 駄 載 器 具 ハ 強 大 ナ ル 工 事 フ 施 ス ニ 用 キ ル モ ノ ニ シ テ 加 之 携 帶 器 具 ノ 不 足 フ 補 フ モ ノ
 ナ リ 其 數 大 隊 ニ 七 十 二 ニ シ テ 馬 二 頭 ニ 駄 載 ス 其 區 分 左 ノ 如 シ

圓 匙 四 十 八 箇 十 字 鋏 十 六 箇

斧 八 箇

三 器 具 ノ 長 サ (鐵 部 モ) 左 ノ 如 シ

方 匙 五 十 珊 知 米 突 (鐵 部 ノ 長 サ 三 十 珊 知 米 突)

小 十 字 鋏 及 十 字 鋏 鐵 部 四 十 珊 知 米 突

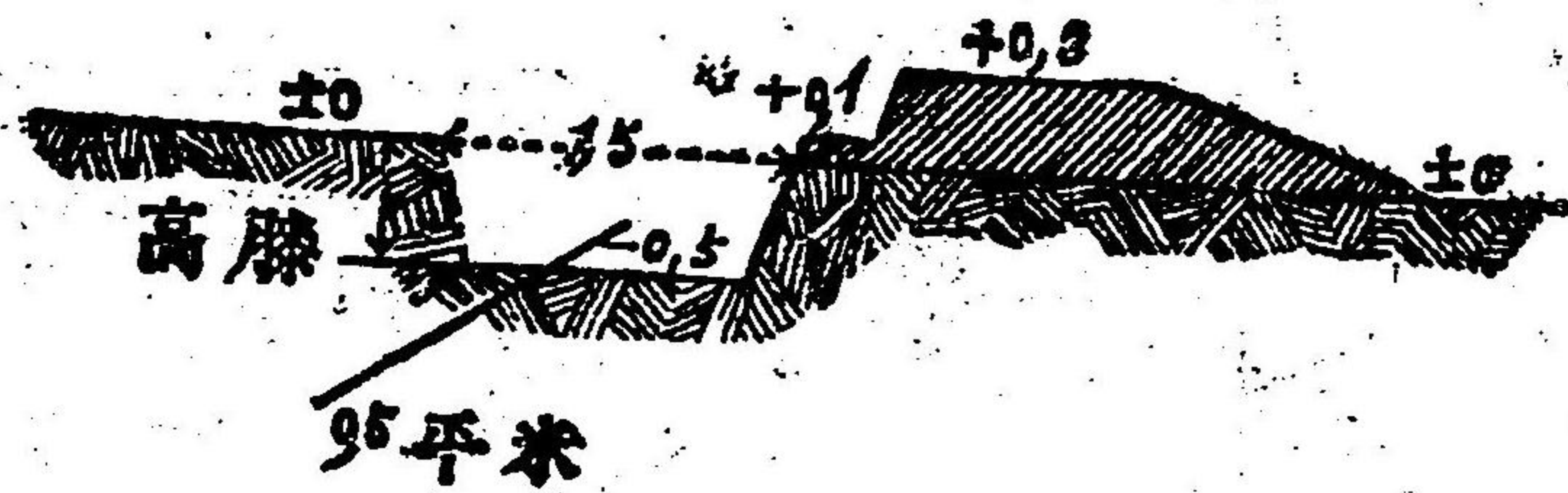
圓 匙 一 米 突 二 十 珊 知

百六十

其二 散兵壕

一 膝射散兵壕及立射散兵壕ノ断面左ノ如シ時間ニ餘裕アラハ一層強大ナルモノヲ築設ス

膝射散兵壕



立射散兵壕



二 掘開ヨリ得タル糾草若クハ土塊ハ急峻ナル胸墻内斜面ノ被覆ニ應用スヘシ

三 一工場ノ長ハ方匙三倍ニシテ一米五十珊瑚珣ナリ各工手ハ基準ノ方ヨリ逐次ニ第一標線上ニ量ルモノトス之ヲ工手一名ノ作業トシ一工場毎ニ小十字鉄一名ヲ加フ

四 駄載器具ヲ以テスルキハ標線上ニ端々接列スル所ノ圓匙三個ト十字鉄一個ノ鐵部トニテ一工場ノ長サ即チ四米突ヲ定ム之ヲ工手四名ノ科程トス

五 構築ノ終始及交代ハ皆命令ニヨリ各兵ハ靜肅ニ動作セサルヘカラス

六 胸墻ハ其積土ヲ行フ間屢之ヲ踏ミ固ムヘシ

七 胸墻ハ其周圍ノ天然物等ニテ之ヲ覆ヒ以テ自然地下區別シ難カラシムヘシ

八 大ナル散兵壕ニハ斜坡又ハ階段ヲ設ケ交通ヲ便ニス

其二 前地ノ作業

一 前地ニ堆積シタル藁、木材、塵芥及ヒ石類ハ之ヲ投棄撤布スヘシ

二 丈ケ高キ穀草ハ之ヲ踏ミ夷ケ又ハ刈リ取ルヘシ

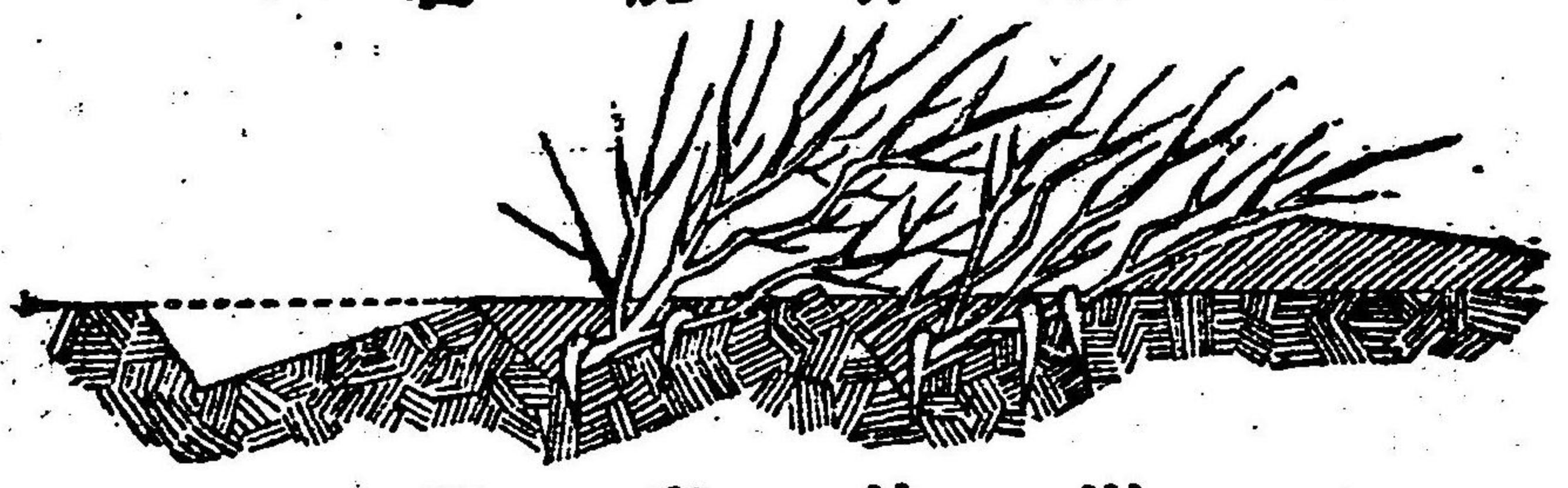
三 射撃ヲ妨害スヘキ生籬、樹木、板塀等ハ毀却スヘシ

四前地ノ清掃ト同時ニ前方ノ或ル地點迄距離測量ヲナスヘシ

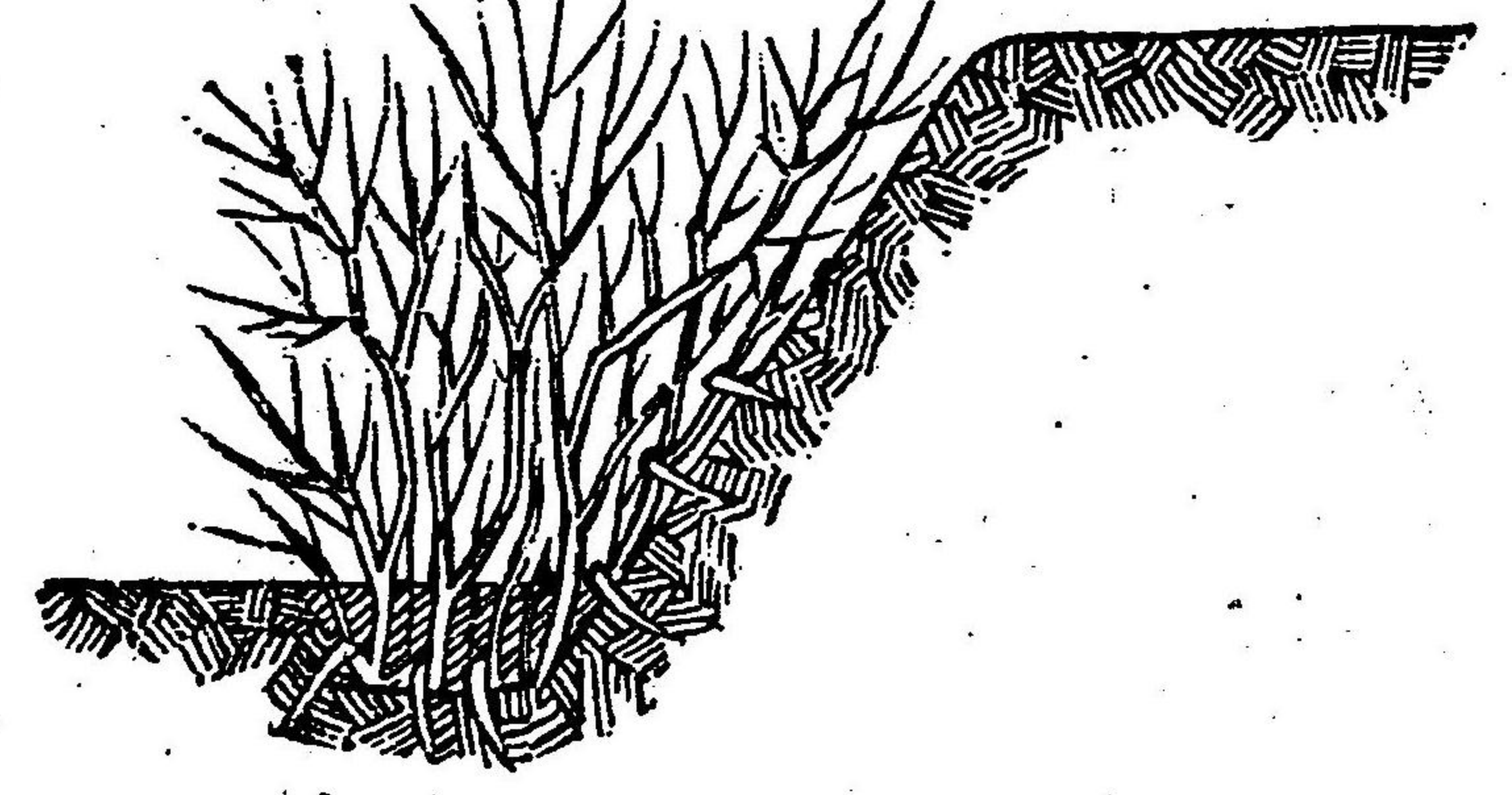
其四 障碍物

一 障碍物ノ目的ハ奇襲ニ對シテ軍隊ヲ掩護シ且ツ敵ヲ我有効射程内ニ抑留スルニアリ
 二 人工障碍物中最モ多ク野戰ニ用ユルモノハ鹿砦及鐵條網トス
 鹿砦ニハ樹幹鹿砦ト樹枝鹿砦トニアリ

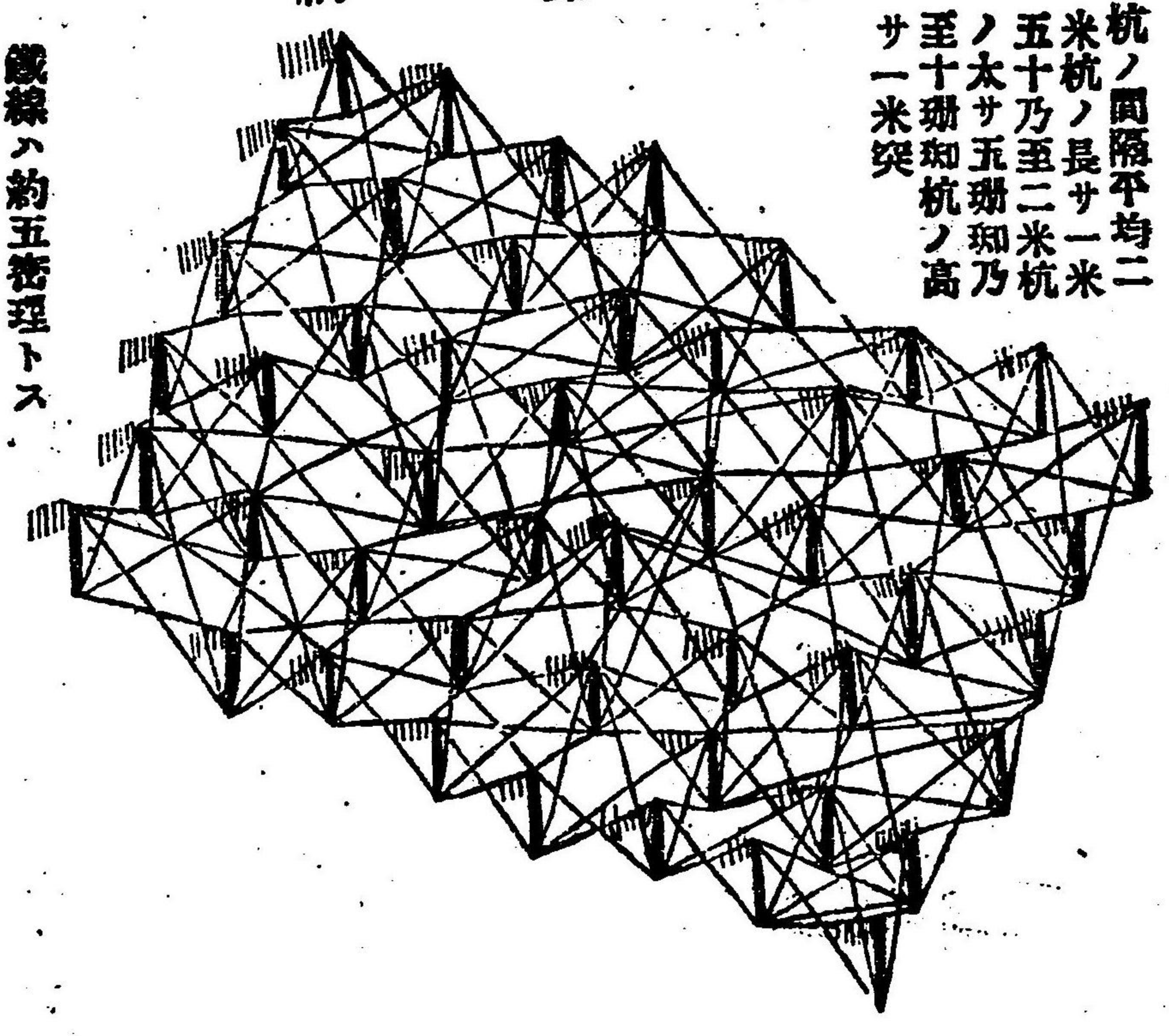
樹幹鹿砦



樹枝鹿砦



鐵條網



杭ノ間隔平均二
 米杭ノ長サ一
 米五十乃至二
 米ノ太サ五
 至十厘米杭ノ
 高サ一米突

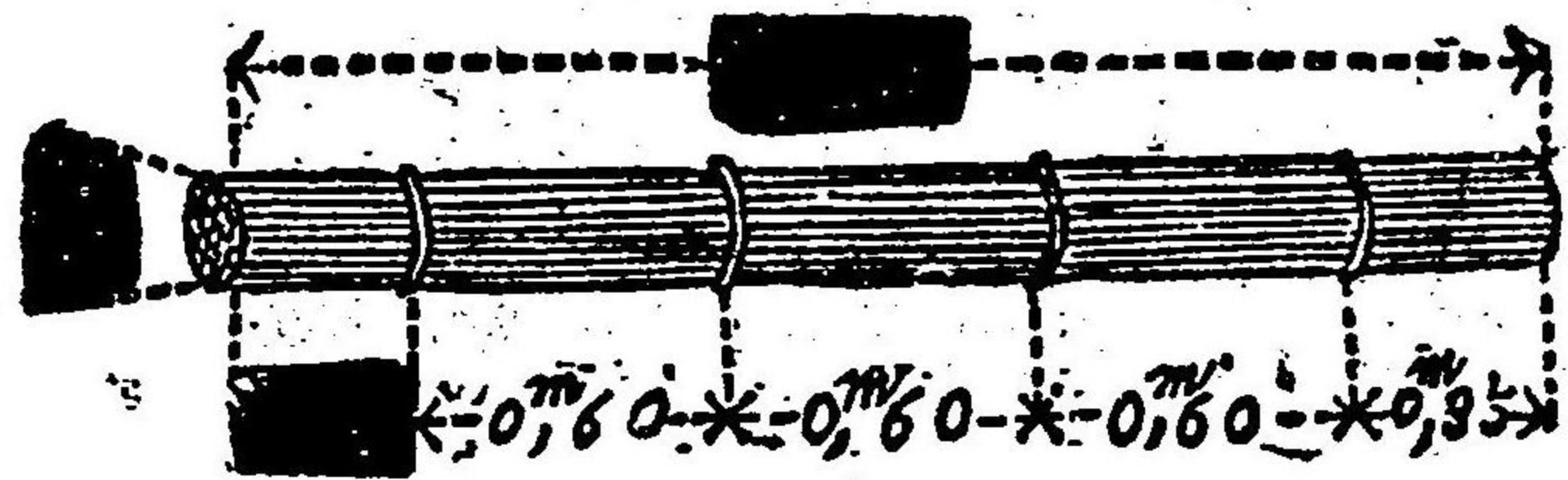
鐵線ハ約五密理トス

其五 束柴及編條

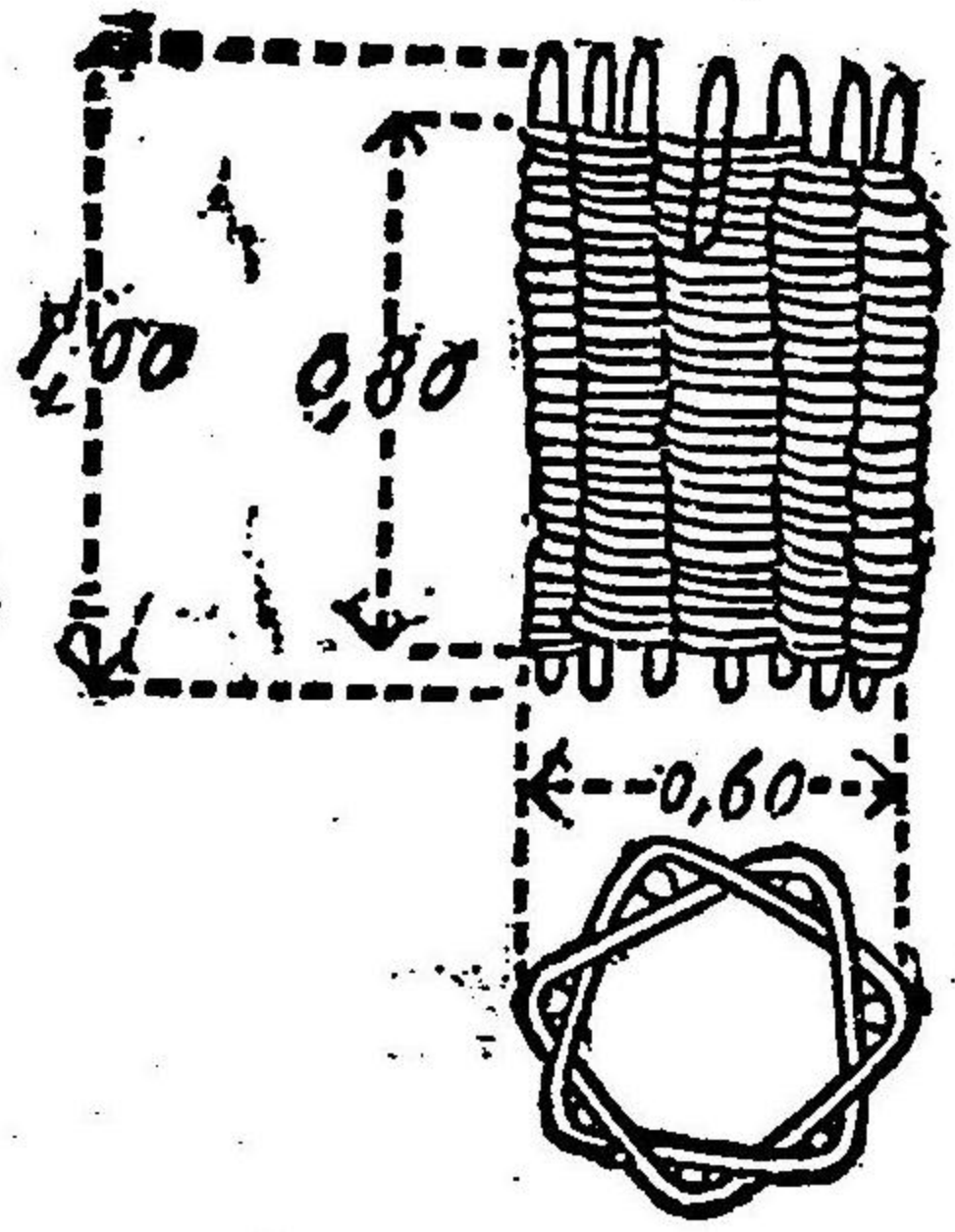
一 束柴及編條ハ急峻ナル斜面ヲ被覆シ道路ノ修繕或ハ小ナル橋ノ構築ニ用ユルモノナリ而シテ所要ニ應シ使用上ノ便利ヲ顧慮シテ長サ及ヒ直徑ヲ決定ス

二 編條ヲ圓筒形ニ作リタルモノヲ堡籃ト云フ

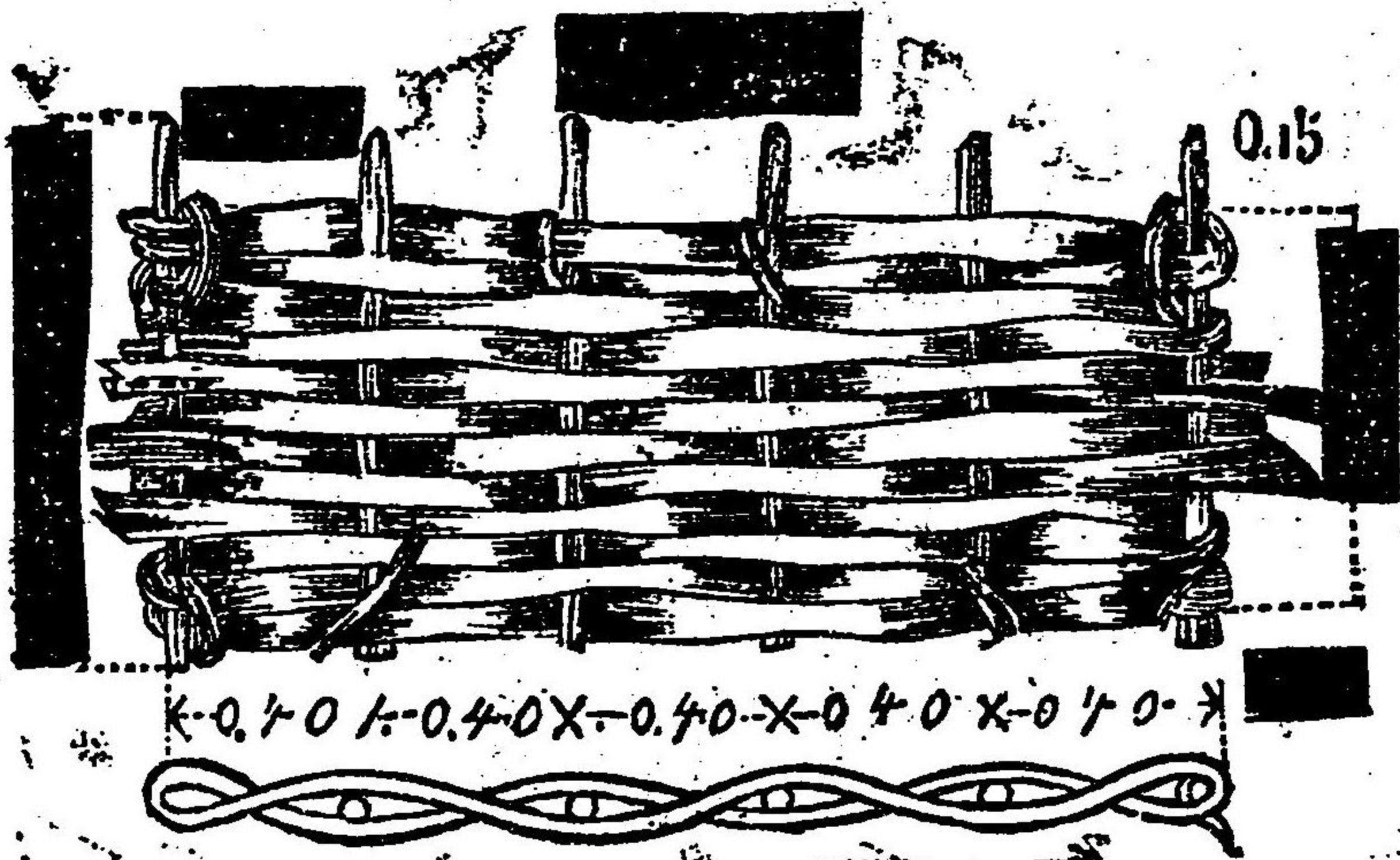
柴 束



堡 籃



條 編



第九章 河川渡過ノ心得

一行軍中河川ヲ渡過スルタメ乗船スル片ハ靜肅ニ順次ニ遠キ處ヨリ位置シ舟ノ進ム方向ニ向キ必ス跪座シ股間ニ立銃ヲナシ水面ヲ凝視セス遙ニ前方ヲ望視ス可シ

二 河川ヲ徒涉スルニハ各兵密接セル小群ヲナシ每群間ニ若干ノ距離ヲ存シテ通過セシム而シテ各兵ハ對岸ノ一點ニ目ヲ注キテ涉ルヘシ又渡涉ノ際彈藥ヲ濕スヘカラス

三 軍橋ヲ渡ル時ハ決シテ歩調ヲ揃ヘルヲナク靜カニ橋梁ノ中央ヲ行進スルモノトス殊ニ舟橋ハ通過ノ際震動甚シキヲ以テ若シ危險ヲ感スル片ハ暫時停止シ其震動ノ止ムヲ待チ後行進ヲ起スヘシ決シテ噪擾ス可ラス

第十章 給養并ニ背囊入組品

一人馬ノ給養ハ宿舍給養、倉庫給養、携行糧秣給養、徵發給養ノ四種トス

二 宿舍給養ハ舍主ヨリ食需ノ供給ヲ受クルモノヲ云フ

三 倉庫給養トハ倉庫ヨリ糧秣ノ支給ヲ受クルモノヲ云フ

四 携行糧秣給養トハ、携行シタル糧秣ヨリ供給ヲ受クルモノヲ云フ

戰時出征軍ニ屬スル兵卒一日分糧食ハ、精米六合副食物若干トス

携行糧食ハ、戰列隊ニ屬スルモノハ携帶口糧二日分、大行李ニ一日分、縱列ニ四

日分合計七日分トス

携帶口糧ハ、軍隊屯營ヲ出發スルニ當リ各自携帶スル所ノ豫備糧食ナリ、其量ハ

精六合(一日分三合ニシ)副食物若干トス、時トシテハ精ヲ乾麵包或ハ精米ニ換ユル

コトアリ

携帶口糧ハ、非常ノ場合ト至ク他ニ給養法ナキ時ニ限り命令ニ依リテ之ヲ食スルモ

ノナリ、故ニ命令ナク安リニ之ヲ用フルハ嚴禁トス

五徴發給養下ハ地方人民ヨリ糧秣ヲ徴發スルヲ云フ

六兵卒ハ左ノ諸品ヲ背囊ニ納ムルモノトス

下士以下背囊入組品物表

- 一、彈藥 三〇
- 一、洗管 一

一、携帶豫備品(袋共)

- 一、燕口袋(錐、糸巻、鉄櫛) 一

- 一、精袋共 六合(二日分)

- 一、罐詰肉 二日分

- 一、食鹽 二日分

- 一、軍隊手牒 一

- 一、襦袢袴下 各一

- 一、靴下 二

第十一章 衛生

其一 衛生勤務

一各隊ニハ衛生勤務ノ人員即チ軍醫看護長看護手ヲ備ヘ尙各中隊ニハ擔架術ノ教育ヲ

受ケタル者アリ此兵ハ戰鬪ヲ開クニ至ル迄中隊内ニアリ而シテ假綱帶所ヲ開設スル

ニ際シ要スル片ハ補助擔架卒ヲ命スルモノトス

二補助擔架卒ハ其銃ト背囊トヲ假繃帶所ニ置キ赤布ヲ右ノ上腕ニ縛シ擔架及繃帶囊

(四人ニ一個)ヲ携ヘ戰線ニ前進シ傷者ノ救急及運搬ニ從事ス

三凡テ繃帶所及病院ハ赤十字ノ標旗ヲ(外征ニハ國旗ト共ニ)植テ其位置ヲ標ス而シテ

夜間ハ更ニ赤色ノ燈ヲ掲ク

四戰線ニ於テ軍友負傷スルハ殊ニ衛生人員其附近ニアラサルハ赴テ之ヲ救助セント

スルハ人情ノ常ナリ然レ此ノ如キハ戰團線ヲ薄弱ナラシメ危殆ヲ招クモノナルカ

故ニ戰線ニアル兵卒ハ將校ノ命令アルニ非レハ決シテ傷者ヲ送致スルコトニ關ス可ラ

ス而シテ輕症者ハ其彈藥ヲ交付シ唯銃ノミヲ携ヘテ單獨ニ退却ス可シ

五戰團終レハ戰線ノ近傍ニ斥候ヲ派遣シ死傷者ヲ搜索シ且ツ無賴者ノ掠奪ヲ防ク者ト

ス

六野戰衛生部ノ人員及材料(赤十字社救護員ノ物品ヲモ含有ス)ニハ中立ノ徽章即チ白

地ニ赤十字ヲ畫ケル者ヲ附ス

七中立ノ徽章ヲ附シ及ヒ其標旗ヲ植立スル所ノ人員及ヒ病院其他家屋等ヲ侵害スルハ

嚴禁ナリ但シ敵ノ兵力ヲ以テ其病院ヲ守ルハ此限ニアラス

八下士卒ハ繃帶包ヲ上衣ノ左裾ニ入レ携行スルモノトス

其一 救急法

一救急法ハ戰友若クハ自身負傷シタル時又ハ急病ニ罹リタル時醫療ヲ受クル迄ノ間臨

時ノ處置ヲナスモノナリ

二戰友ヲ救ハントスルニハ先ツ其生死ヲ區別スルヲ要ス是無益ノ力ヲ救フヘカラサル

モノニ費シ自己ノ任務タル戰團動作ヲ不完全ニスルニ至レハナリ

第一 創傷

創ノ化膿シ又ハ腐壞スルニ至ルハ、皆病菌創面ヨリ入りテ害ヲナスニ因ル、病菌ハ間

々空中ニ飛揚スルカ故ニ創面ヲ開キ置ケハ忽チ之ニ附着ス、若シ夫レ手指モ消毒ヲ經

ルニアラサレハ病菌ノ附着シ居ルコトヲ免レズ、是ヲ以テ手指創面ニ觸ルハ、ハ害アリ

創面ハ速ニ消毒綿紗ヲ用キテ繃帶スルヲ要ス

創面ニ種々アリ左ニ其大要ヲ掲ク

一 挫創トハ、撲チ挫キ又ハ振リタル傷ヲ謂フ、其療法ハ其部位ヲ安保シ冷水ニ投シ又ハ冷水ヲ手巾其他ノ布片ニ浸シテ之ヲ冷スベシ、表皮ヲ破リシ創アラハ繃帶包中ノ消毒綿紗ヲ創面ニ當テ其上ニ殘ノ綿紗ヲ重テ頸巾狀帶ヲ用キテ堅ク巻キ其末ヲ結ビ又ハ止針ヲ用キテ縫ヒ止ムヘシ

二 砲彈ノ創ヲ砲創、銃丸ノ創ヲ銃創、白兵ノ創ヲ截創及刺創トナス、此等ノ諸創ハ先ツ衣ヲ脱カシメ場合ニ依リテハ剪刀、銃劍ヲ用キ縫目ニ沿ヒテ創處ニ當ル衣ヲ切開キ創ノ大小ニ應シテ消毒綿紗一枚又ハ二三枚ヲ其創口ニ當テ頸巾狀帶ヲ巻クヘシ、創口ニ箇所以上アルトキハ一枚宛消毒綿紗ヲ各口ニ當ツヘシ、出血甚シキトキハ止血ノ後消毒綿紗ニテ創口ヲ被ヒ頸巾狀帶ヲ用キテ固ク巻クヘシ、總テ手臂ニ創ヲ受ケタルトキハ止血法ヲ施シ更ニ胸ノ卸ヲ外シテ指尖ヲ懷ニ入レ繃帶、又ハ劍帶或ハ手拭ヲ用ヒテ是ヲ胸前ニ吊リ以テ傷處ノ動搖ヲ防クヘシ、腹部ノ截創ナル時ハ座位或ハ仰臥セシムヘシ

三 何創ヲ問ハス骨ヲ損シタルモノヲ骨折ト云フ、臂、脚ノ如キ長キ部ノ骨折ハ平常曲クヘカラサル處曲カリ又ハ其上下ヲ握リテ微ニ動セハ軋音ヲ聞キ刺痛ヲ覺ユ此骨折ヲ兼テタルモノニハ創傷ナキ面ニ副木ヲ當テ、繃帶スルコトヲ要ス、副木ナキトキハ樹皮葉束薄板、劍鞘、銃ノ一部等ヲ副ヘ固ク其上下端ヲ縛シテ其上ニ繃帶スヘシ

脱臼ハ患部ヲ安保スヘシ

四 何創ヲ問ハス皮膚破レタル處ニハ手指等ヲ觸ルヘカラス、外物創面ニ附着シテ之ヲ汚スコト甚シキ時ハ消毒綿紗ニテ拭ヒ去ルモ妨ケナシ、血液凝着シタルトキハ之ヲ剝キ取ルヘカラス、又水ニテ創面ヲ洗フヘカラス、銃丸衣片ナト傷口ニ顯ルトモ除去ヲ試ミルヘカラス其儘消毒綿紗ヲ用キテ之ヲ掩ヒ繃帶シテ醫官ノ許ニ送ルヘシ

五 何創ヲ問ハス始メ消毒綿紗ヲ用キテ周密ニ處置スルトキハ治愈速ニ且完全ナリ、之ニ反シテ初メ創面ニ手ヲ觸ルトキハ後如何ニ完全ナル療法ヲ施スモ好結果ヲ得難シ

第二 止血

一 戰場ニテ士卒ノ死スルモノハ出血ニ因ルコト多シ、故ニ血ヲ止ムル法ハ頗ル緊要ナ

リ、出血ニニアリ創ノ全面ヨリ平齊ニ出血シ其量多カラス其色暗紅色ニシテ迸出セサルモノヲ静脈出血ト名ケ、創面ヨリ鮮紅色ノ血迸出シ其量多キモノヲ動脈出血ト名ケ、大ナル動脈ノ出血ハ早ク之ヲ止ムルニアラサレハ暫時ニシテ命ヲ殞サシムルモノナリ

静脈出血ニハ、消毒綿紗ヲ創面ニ當テ指ニテ強ク壓シ血ノ止マルヲ見ハ更ニ消毒綿紗二枚ヲ其上ニ覆ヒ堅ク縛スヘシ

動脈出血ニハ、其部ヲ高ク保持セシメ先ツ綿紗一二枚ヲ丸メテ血ノ出ツル處ニ當テ指ニテ強ク壓スヘシ、若シ血止マラサルトキハ創處上部ノ動脈通路ヲ壓スヘシ

其部位左ノ如シ

(一) 指ノ出血ニハ其指根ノ兩側ニ拇指ト

食指トヲ當テ強ク撮ムヘシ(第一圖)

(二) 手臂ノ出血ニハ、上膊内側ナル淺溝

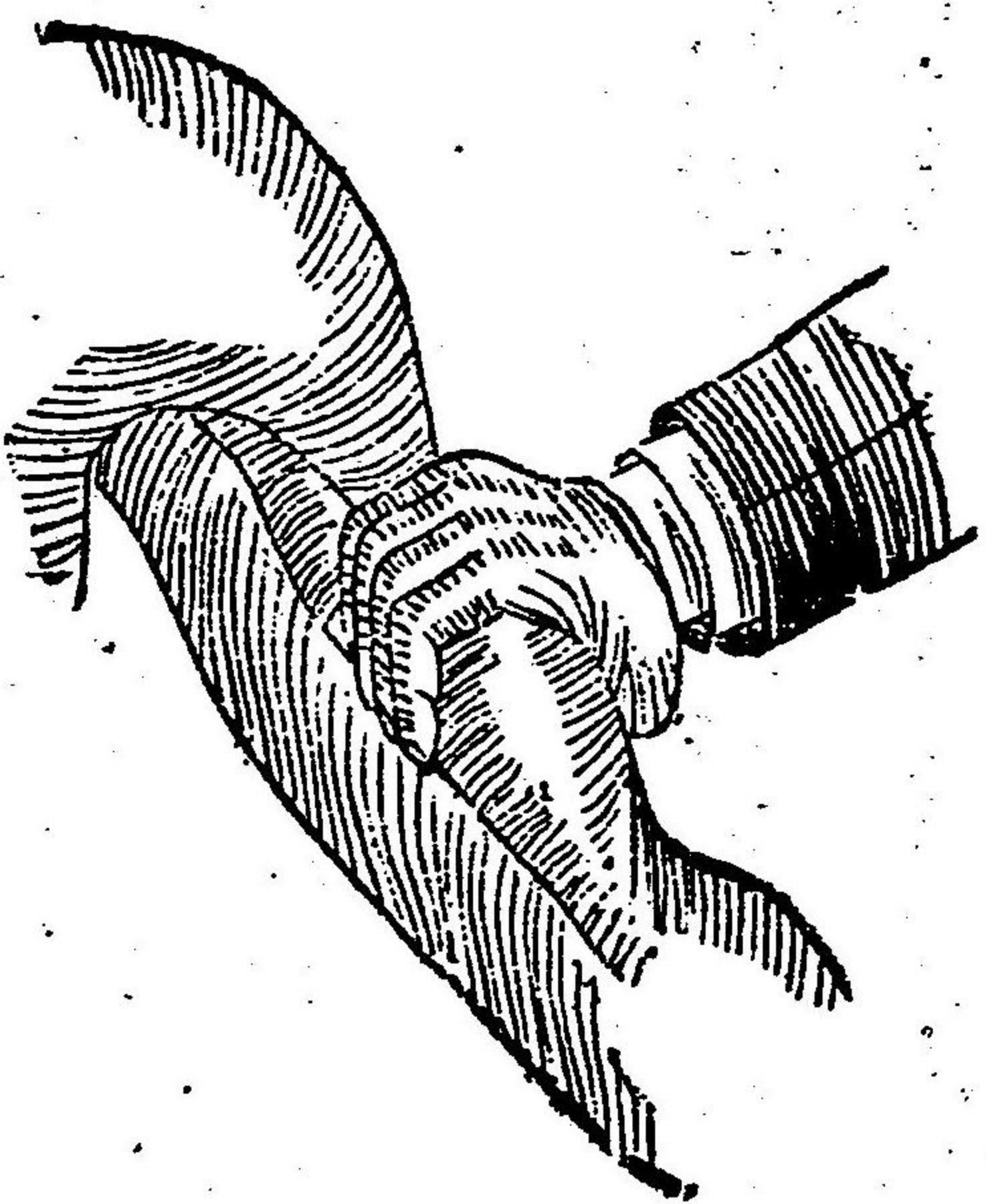
中搏動アル處ニ食指、中指及環指ヲ當

第一圖

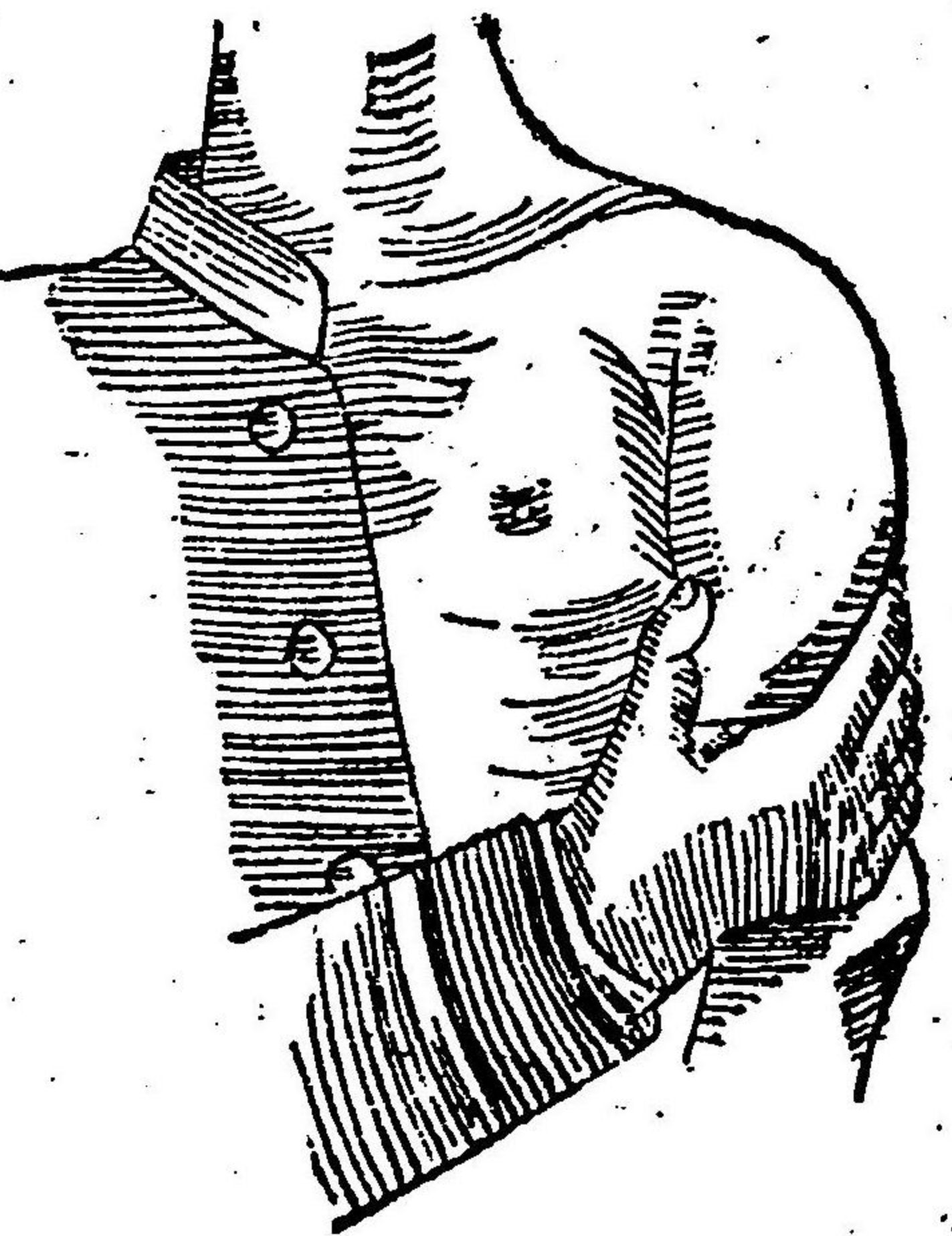


テ掌ヲ前面或ハ後面ニ廻シテ握リ指頭ニテ壓スヘシ(第二圖)
(三) 傷者自ヲ之ヲ行フニハ拇指頭ヲ上膊ノ内側ナル淺溝ニ當テ手掌ヲ前面ニ廻ラシ握リ拇指頭ニテ壓スヘシ(第三圖)

第二圖



第三圖



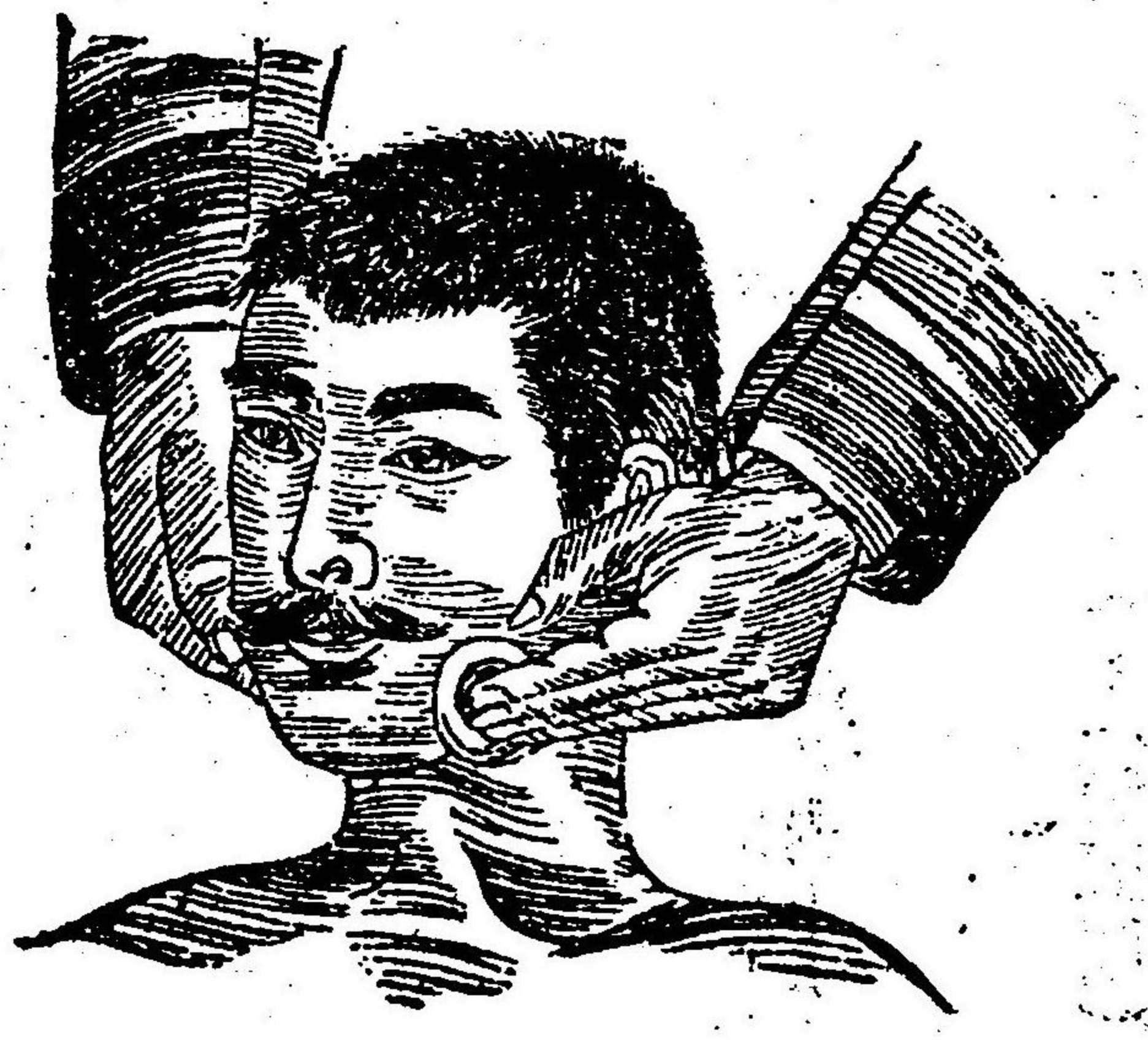
(四) 上膊ノ上部或ハ腋下ノ出血ニハ、頸ノ下鎖骨ノ上窩ニ拇指ヲ當テ深ク内下方ニ壓スヘシ(第四圖)

(五) 口ノ近傍ノ出血ニハ頸ノ下顎骨角ノ稍前方ヲ骨ニ向テ強ク壓スヘシ(第五圖)

第四圖



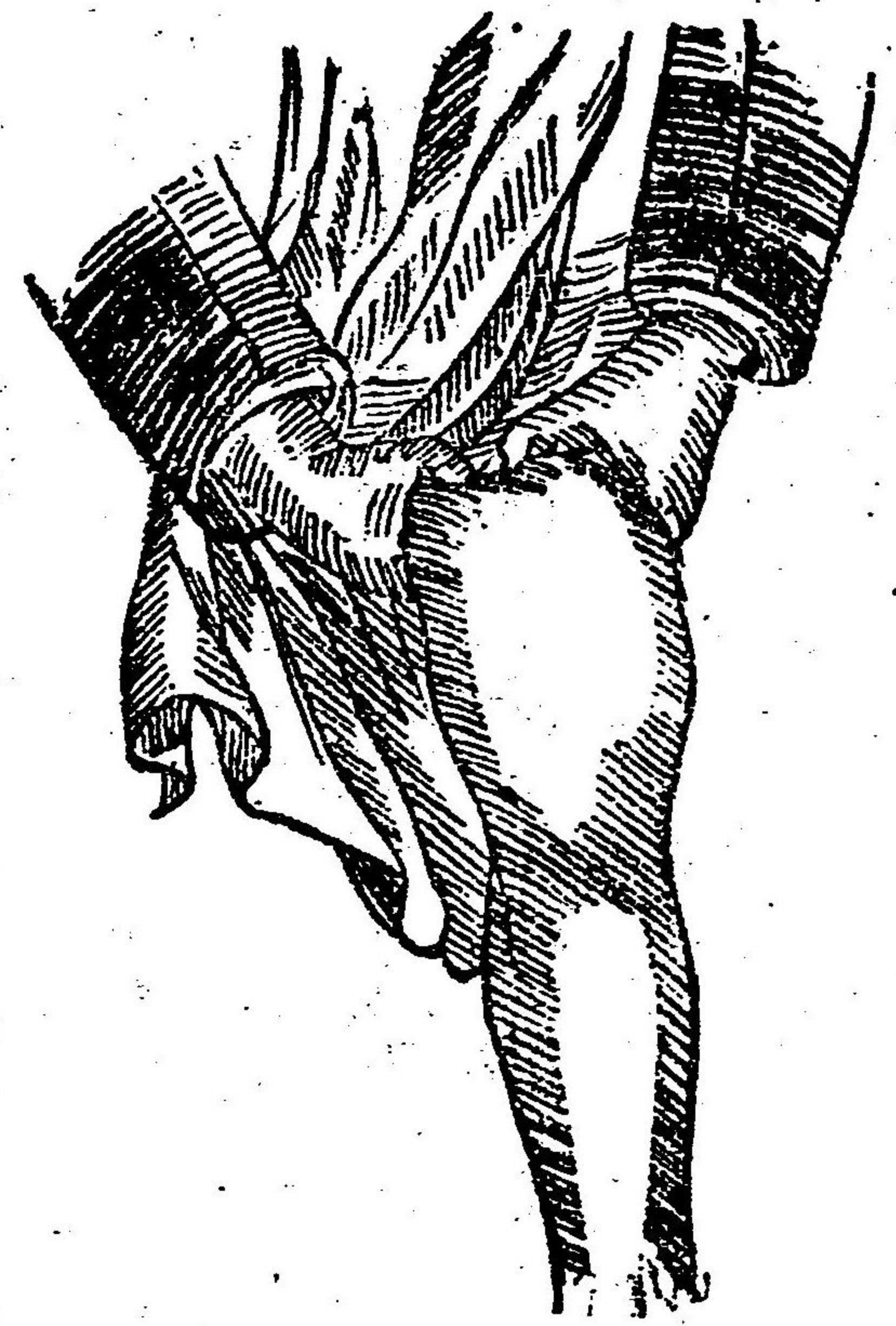
第五圖



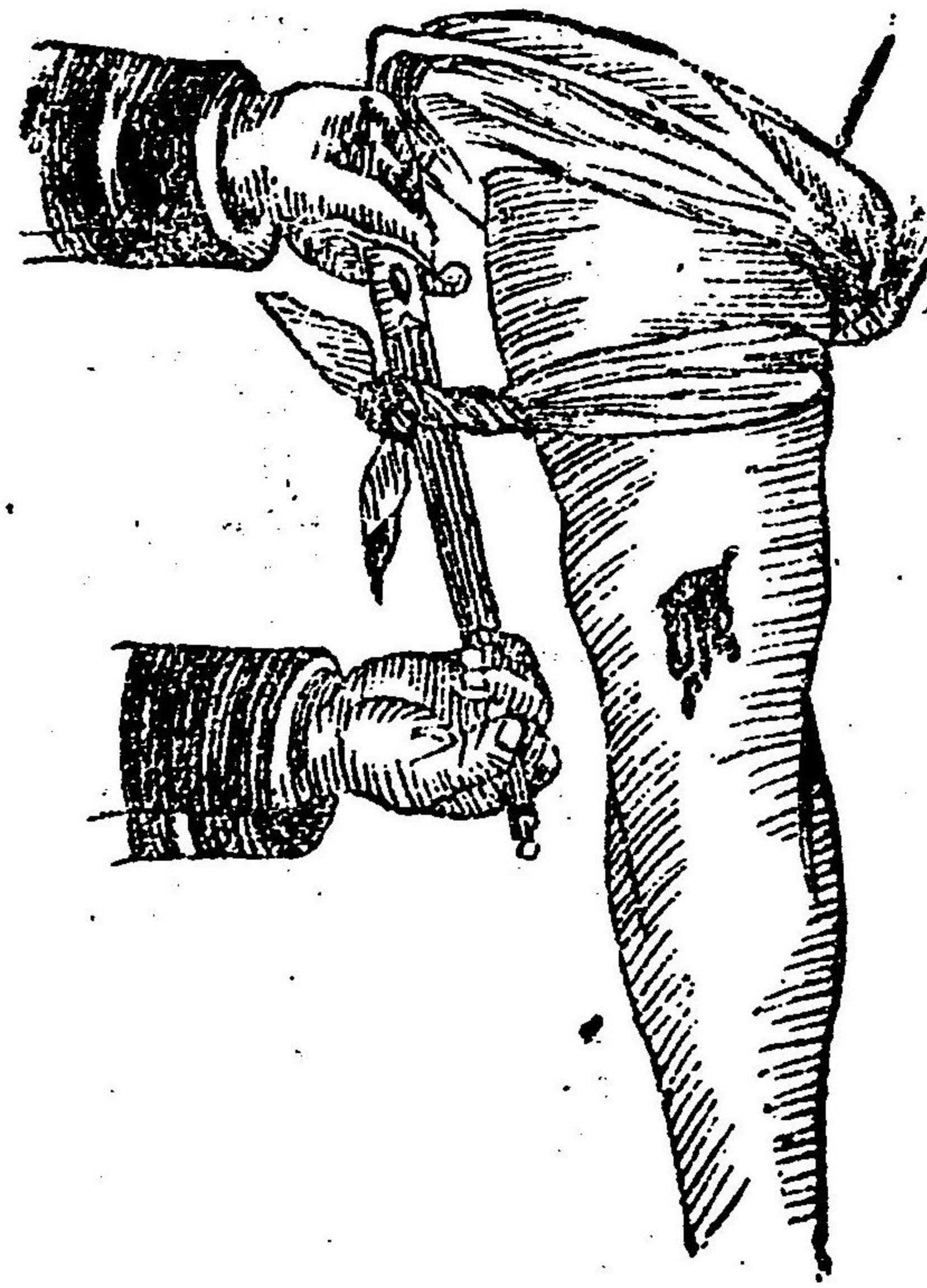
(六)脚ノ出血ニハ、鼠溪ノ中央下ニ兩拇指ヲ當テ、壓スヘシ(第六圖)

(七)上法ニテ久シク壓スルトキハ手指疲レ又醫官所在ノ地ニ赴カントスルニ便ナラサレハ、即チ左法ヲ以テ之ニ代ヘシ、栗大ノ小石ヲ布ニ包テ當テ其上ヲ手拭等ニテ緩ク卷キ末端ヲ結ヒ之ニ劍鞘、木竹、懐中小刀、棍棒狀物ヲ挟ミ回轉シテ血止マルニ至リ挟ミタルモノ、一端ヲ止メ置クヘシ(第七圖)

第六圖



第七圖



第三 繃帶包及其使用法

一凡ソ創面ハ前ニ述ヘタル如ク無毒ナルモノ若クハ消毒シタルモノニアラテハ觸ルベカラス平居ノ際ト雖モ無毒ナルモノト消毒シタルモノトハ得易カラス況ンヤ戰ニ於テ殊ニ然リ故ニ消毒綿紗ヲ裹ムニ溢引紙ヲ以テシ更ニ三角巾ヲ其上ニ被セ止針ニテ止メ是ヲ上位ノ裾角ニ納メ以テ負傷時ノ要ニ備フ此繃帶法ハ必要ニ望ムニアラサレ